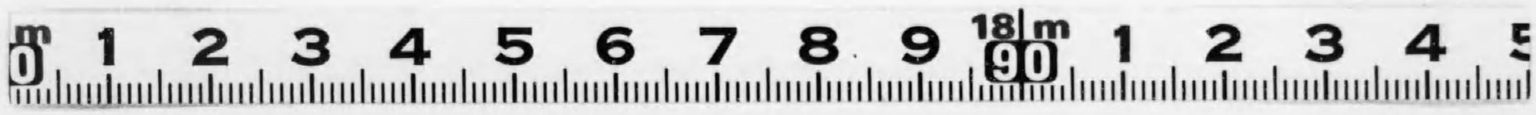
503
247



503-247

帝國圖書館藏

加藤咄堂著

# 靈覺の人

東京
潮文社發行

大正
12.6.13
内交

# 序

靈覺の機微は言詮の外にあり。理を以て論ずるも盡くさず。事を以て示すも未だ當らず、暫らく古人の行跡に探り、今人の心に問ひ、其の自ら得入するあるを待つの外なし。予の此著多くは壯時の作にして今にして想へば言て盡さず、示して當らざる多しといへども、當時の感興、今にして沔かず、一句を改めんか却て天眞を傷け、一字を添へんか寧ろ眞情を害す。靈覺もと千言萬語の當り得、盡くし得る所にあらず、如かず、斧鑿を用ひざる所の僞らざるものあるに、舊知潮文社主人、稿を需むる急なり、乃ち笈底に此「靈覺の人」を出して世に問ふ。

壬戌、秋漸く老ひ、山茶花開くの日、代々木村莊

唯堂識

# 靈覺の人

## 目次


第一　天人の籟

第一　人間としての釋迦……一

佛陀と吾等……物質生活の飽滿……精神生活の欲求……求道の眞心……靈覺の道程……慈悲心の發露……釋迦の教化……高尚の理……卑近の喩……戒律と懺悔……家族の教化……釋迦の世間教……釋迦の感化

第二　理想としての維摩……三八

維摩の經典……一曲三場の大要……菴羅樹園の場……寶積長者と求法の精神……心淨ければ佛土淨し……舍利弗と螺髻梵王……維摩の人格……維摩の生活……維摩の十喩……舍利弗と維摩……目蓮と維摩……迦葉と維摩……須菩提と維摩……富樓那と維摩……迦旃延と維摩……

「阿那律と維摩……優婆離と維摩……羅睺羅と維摩……阿難と維摩……
「彌勒と維摩……光嚴と維摩……持世と維摩……善德と維摩……文殊の
問疾……室内の不思議……病中の修養……不二の法……維摩の默……
維摩と釋尊……維摩是れ何物ぞ

第二　地　籟

第一　現實生活に於ける解脫の趣味……一〇八
第二　靈覺の人か趣味の人か……一二二
第三　西行法師……頓阿法師……兼好法師……一二一

第三　人生餘裕なかるべからず……一四一
餘裕なき世態……生活の餘裕……物質生活と精神生活……時間の餘裕
……如何に餘裕を作るべきか

第三　人　籟

小說　我が聞ける懺悔……一四五



目次終

# 靈覺の人

## 天籟

## 人間としての釋迦

## 佛陀と吾等

加藤咄堂著

釋迦は淨飯王を父とし摩耶夫人を母として中印度迦毘羅城に生れたる地上の人である。しかも人類の崇高は此地上の人をして九天の上にも揚げ、天上天下、たゞ獨り尊きものとして之れを神格化し、不思議の靈力其の一身に付し、人にはあらず佛陀なりと稱す。されど、釋迦も生れて長じ、長じて老い、老いて死す、其の世にある或は怒り、或は悲み、或は煩悶し、或は懊惱す、其の一個の人たるに於て吾等と何の異るなし。然らば吾等も佛陀と稱し得べきか。否、我等は凡夫

にして釋迦は佛陀たり。吾等と釋迦と何の異なる所かある。釋迦いふ「汝は當成の佛我れは已成の佛」と、釋迦は已に佛陀と成れるもの、吾等は當に成るべきもの、吾等に佛陀となる資格のないのではない。たゞ迷ふて覺らざるに由る。覺れば即ち佛、迷へば即ち凡夫、吾等と釋迦との差はたゞ此一念啓發せるとせざるとの別あるのみ。「佛も昔は凡夫なり、凡夫も今は佛なり」、佛として地上を離れて遠く高く飛ひ去るものではない。此地上の人、そのまゝに佛たるを得るのであるから、大覺世尊と呼ばるゝ佛陀釋迦牟尼も、亦吾等と共通の人間性を有して居らるゝはいふまでもない。否、寧ろ其人間性の濃厚なる所、沈痛なる惱みとなつて靈覺の端を啓き、こゝに慈眼視衆生の愛となつて現れたのではあるまいか。單に釋尊を人間離れのした靈格として見るは眞に釋迦を知るものではない。寧ろ其豊かなる人間性に基きて觀察してこそ、眞に佛陀たり、靈覺の人たる釋迦を見得べきである。強て之れを神秘の雲に包み、怪奇の扉に閉ぢて其の尊嚴を示さんとするは、所謂「眞眞の引き倒し」で眞に釋迦を知るべきものではない。吾等は我が心の體驗によつて釋迦を見、我が乏しき智によつて釋迦を知らんとするのである。右から見れば峯となり、左から見れば巒となつて廬山の眞面目の終に窺ひ知る能はざるが如く、人間としての釋迦は其一方面で、も



とより佛陀としての釋迦の全面ではなからうが、吾等の學び易き人格は此人間味の所に見出さるゝ最も多きものがあるのである。

此佛陀を神聖ならしめんとして母摩耶夫人が春闌けき藍毘尼園に花摘みたまふ御手の下、其の脇より生れたまひしといひ、生れながらにして周行七歩、一指は天を指し、一指は地を指して

天にも地にも　我れぱかり
たつとき者は　なきぞかし。

と仰せられたといふ如き傳說は一切之れを排斥し、吾等と同じく生れたまひ、吾等と同じく產聲を放ちたまひし悉達太子として赤裸々に之れを見んとするのである。されば天に祥瑞あり、地に奇蹟ありといひ、其の降誕を彩色する神怪談は之を除却し、小さいながらも中印度の毘迦羅城の國王の太子として內外歡呼の中に生れたまひし、といふ平凡の事實の外は、暫く之れを詩人の形容詞に止めんとするのである。

## 物質生活の飽滿

釋尊を產みたまへる母摩耶夫人は產後の肥立ち惡くして世を去りたまひ、同じく淨飯王の第二

夫人たる叔母波闍波提の手によつて育まれたまうたので、母なき子に對する父の愛は一しほ深く蝶よ花よと愛でられたまひしことは想像に難からず、長じたまひても當時の普通の教育を受け、武技をも文藝をも學びたまひしことはいふまでもなく、身は一國の王子たり、良師は選ばれ、良書は學ばれ、天稟の叡智は當時列國對峙して時に干戈を弄する印度の狀態をも察知し、深く人生の秘奥に就て考慮をめぐらされたことも疑ひはなからうが、物質生活として太子は何の不自由をも感じたまはなかつたのである。物質生活の第一は衣食住の滿足である。傳說に從へば父淨飯王は太子をして厭世の志を出さしめじと、三時の宮殿を造つて太子を居らしめたまひしといふ。春は花咲く園生あり、夏は涼しき池の汀、秋としなれば月清き高樓の園樂、釋迦種の名族として一國を治めたまふ國王の富、もとより衣食住に不自由のあるべきはなく、財力を傾けたまひし宮殿の美、輕羅身にあり、珍羞前にあり、物質上何の不足かあるべき。太子が物質上の飽滿はこれみにあらず。其の地位をいへば國王の後繼者、富、四海に等しと形容せらるべき境遇であり、之れに加ふるに御歳十七(或はいふ十九)にして娶りたまひし耶輸陀羅姫は五天竺中の美人とたゝへられ、多くの宮女は花の如くに之れに侍き、太子の周圍は欲樂の天地。人若し物質生活の飽滿を



的とせば、釋迦は實に之れを味ひ盡くしたのである。釋迦をして平凡の人たらしめば此以上何をか求むべき。況して耶輸陀羅姫は太子の御胤を宿して產み落したまへるは玉の如き男子羅喉羅のいたいけ盛りとなりて之れを慕ひたまひ、一家は團樂し、生活は飽滿し、見る所の色、美ならざるはなく、聞く所の聲、樂しからざるはない。若し釋迦をして物質の滿足に甘んじ、目前の欲樂に醉ひ、遠く思慮を永遠に運らし、深く心を精神生活に注がしめなかつたら、釋迦はたゞ迦毘羅の城主として、或は一國の英主として傳へらるゝ以外何等後世に傳へられず、人類は永く此釋迦によつて救はるゝ所もなかつたであらうが、釋迦は決して物質上の滿足に甘んずるものでもなく、目前の歡樂に醉ふものではない。歡樂極つて哀情多し、彼れは歡呼聲裡に人生の哀音を聞き、深く世相を觀察して悶々の情禁ずる能はざるものがあつたのである。

## 精神生活の欲求

太子をして厭世の心を抱かしめじとの父王の苦心は彼れの宮殿の中に枯れ衰へ老い惱み等を知らしめじとして滿目たゞ之れ盛榮、接耳悉く喜悅、彼れは此滿足の桎梏の中に置かれたのである。しかも咲く花には散る時あり、滿てる月にも虧くることあり、朝の紅顏、いづくんぞ夕の白骨た

らざるべき。彼れ一たび此満足の桎梏たる宮殿の中より一歩城外に出でては老病死の人生を苦むるを見、宮殿裏の満足は裏切られて、悲痛の情、衷心より起らざるを得なかつたのである。其の老を見ては

「日月は流れ過ぎ、時は變り歳は移る、されば人の世に老の至るは電の如し、我れ富貴の身なりとも、何ぞ獨り免れん。此苦中にあつて世人は何ぞ畏れざる」

と、其の病者を見ては

「此の如きの身は之れ大に苦むべし。さるに世の人々、徒らに歡樂に耽りて覺悟する所なし」

といひ、人の死を送るを見たまひし時、侍臣優陀夷の

「此の人、世にある時は五欲に貪着し、錢財を惜み、辛苦經營、たゞ之れを積むを知つて世の常なきを知らず、今は一旦之れを捨てゝ死し、父母親戚の愛念する所となるも、命終つては草木の如く、恩情好惡亦相關せず」

といふを聞き

「世間に此死苦あるに、其の中にあつて放逸を行ひ、心、木石の如くにして怖畏を知らざるこそ



憐れなれ」

と仰せられて、此苦の原因を討究して之れを免るゝの方法を知らんとの精神的の要求は止めんとして止め難く、一念、之れに向つては目を喜ばす艶姿も、耳を娛ましむる笑聲も、やがて裏へ行く枯骨や、消え行く身の無常に想到して、喜ぶべからざるに喜び、樂むべからざるに樂む人々を哀れと思召して、眞に彼等を喜ばしめ樂ましむる解脱の道を求めんとの心を切ならしむるの外はなかつた。吾等も此無常を知り、此苦を認めては居るが、併し吾等の心は鈍くして之れを痛切に感ずることが出來ないのである。が、太子は今之れを痛感せられたのである。眞に至醇の心を以て此問題に觸れ來られたのである。此痛切の感と此至醇の心とは、吾等にあつては目前の歡樂に因はれて脱し難き、此物質生活の桎梏を離れて精神生活に入りて之れが解決を得んとて、斷然、王位を棄ぐべき位地も、一國の富みも、美しき妃も、愛らしき子をも棄て御歳二十九歳の臘月八日（或はいふ御歳十九歳と）、豊の歡樂に疲かれたる滿殿の宮女のいぎたなく眠れるさまを見て、

「薫ずるに香を以てし、飾るに華を以てすると雖も、外は革囊たり、中に臭穢を盛る、百歳の命も

半は眠りに費し、其の半ばも憂惱の多きに之れを覺らずして、婬欲を貪る」

と、密かに宮殿を出で御者車匿を呼び、犍陟といふ白馬に跨りて道を求めて東方へと進まれたのである。至心に道を求む、飽滿なる物質生活を棄つる弊履の如し、かくて眞に道は求めらるべし

財寶に對する未練、妻子に對する愛着の心を勞するあつて、何の道をか得らるべき、東方藍摩城を過ぎ、アバミ河畔の深林に至りて太子の服裝を脱して一個の沙門となり車匿に命じて白馬犍陟を曳いて宮城に歸りて父王に告げしめ、其の左右に從はんを請うに對しては

「世間の法は獨り生じ、獨り死す、豈に復た伴ふものあらんや」

と諭し、昨日までは花の如き宮女に侍かれたまひし太子も、今は一人の從ふものなく、飄然として當時苦行者として名高き跋迦仙人を訪ひたまふ。宮殿の生活は樂の又樂なるものであつた。今、訪ひたまふ所は苦の又苦を行ふ修行者である。彼等の中には一日一食又は三日一食等自ら餓ゆるの法を行ふものあり、或は糞を食うて命を繋ぐものあり、或は終日終夜一脚にして立つものあり或は一本づゝ頭髪を拔くものあつて、現在の肉體を苦むることによつて、未來は天に生るゝの樂を得るものとし、苦因を以て樂果を得んとする交換的の思想で、もとより究竟解脱の道ではない、



身體の安逸を貪るの非なるを知りたる彼れは徒らに身體を苦むるの亦道にあらざるを知り、更に去つて當時の碩學たる阿羅邏迦蘭並に欝陀羅摩を訪はんとして此處を去つた。

## 求道の眞心

跋迦等の苦行者を後に見て阿羅邏等を訪はんとして進みたまふの時、父王の使者は太子を追ひ來りて歸らんことを迫るに遇ふ。思ひ返して宮に還りたまへとの諭旨は頗る懇切に、父王の憂ひ波闍波提の悲み、さては耶輸陀羅の嘆きまでも說きて止めたれど、太子は頑として、

「我れ、父母の唯だ今生の老病死の苦あるを畏るゝのみならず、將來永く此の憂ひを絶たんとて此に來る。今しばし父母に遠ざかるは行末長く遇はんとの願ひに外ならず」

父母眷屬の悲みもさることながら一時離別の苦を忍びて永遠和合の本を開かしめたまへ、我れ耶輸陀羅等を愛せざるにあらず。此れを愛する深きが故に其の苦因を斷ぜんとするのみと。釋迦の美はしき人間性は此中に現はるゝと共に、彼れが志す所を枉げざる人格の權威もこゝに發露して居るのである。王使等は、王命を受けて空しく還り難しとて、憍陳如等五人の者を止めて太子に侍從せしめ、僅に父王の心を安めんと請ひ、太子はそれをも否み難く此五人を從へて途を東南に

取り、恒河を渡りて、當時印度に於ける大國摩迦陀の王舍城に入りたまへば、國王頻婆娑羅は、太子の出家を以て加毘羅の小國なるに甘んぜざるが故と思惟し、出でゝ太子を迎へ

「我れ深く太子聰明の性を以て自ら王位を棄てゝ此國に來りたまふ、太子若し此國を治めんとならば一半を捧げん、若し一半をも狹小なりとせば、我れは王位を太子に讓らん。若し我が國を取らじとならば我が兵力を供もて他國攻伐の用に供せん、此三者の中、我れは太子の好む所に任せん」

と。頻婆娑羅王は世間の心を以て太子を忖度し、太子の既に棄てたまひし物質上の欲望の更に大なるものを與へんとしたのである。これ太子に對する非常なる誘惑である。しかも太子は

「我れ今既に王位を棄て何ぞ又王國を取らん、況んや兵を弄して他國を取るを望まん？我れの迦毘羅を棄てしは生、老、病、死の四苦を斷たんがためで五欲を求むるためではない。世間の五欲は大火聚の如く、衆生之れがために燒かれて自ら苦みて出づるを知らず、我れ又何ぞ其の苦に貪着せん……我れはこれより山に入りて苦の本源を滅盡するの法を修めんとするのみ」

と、苦の本源を滅盡するは精神生活の安定である。釋迦は實に此物質生活を脱して精神生活を求



むるために、此誘惑をも全く斥け了つたのである。

## 靈覺の道程

當時の印度には所謂九十五種の外道とて諸種の哲學は盛行し、深林に入つて深き思索に耽り、其の覺り得た所を學徒に教示して居つたので、釋迦は道を其等の碩學に問はれたので特に阿羅邏迦蘭、欝陀羅摩の兩師の如きは、九十五種の外道中、嶄然頭角を現はせる數論外道とて印度六大哲學中の優秀なる僧法哲學の泰斗なれば釋迦は其の許にありて學ぶ所多かつたのである。しかも其の究竟處に至りては未だ釋迦を滿足せしむるに足らず、此間六年、身は苦行に疲れ、心は煩悶に囚はれて身心共に安きを得ず、顏色憔悴、形容枯槁、時には波羅門の法に倣ひて一日に一麻一米を食ひ、時には七日に一麻一米、終に昏迷して地に倒るゝに至つた。これ一たび再び蘇するもの、宗教的更生は此大死一番底の所より逝り、地に倒れし釋迦の漸く蘇りて苦行六年、何の得る所なし、徒らに身を苦めて道を求めんとするは之れ眞の解脱の法にあらず、身と心ともと二ならず我れ當に食を受けて我が體力を復し、徐ろに思念して其の道を得べしと、尼連禪河に入りて身垢を洗滌し、偶ま來れる牧牛女難陀婆羅の勸むる乳摩を飲みて飢餓を醫し、靜かに歩を運びて迦耶

の地に赴き綠濃かなる菩提樹の下、苔清き石の上に草を敷きて坐し、我が道ならずんば此坐を去らずとて寂然として深き思索に入られた。從來の修行は多く他によつて道を得んとせられたのであるが、今は自ら內に之れを求めんとせられたので、釋迦は此端坐の中に於て、從來の智識を整理し、其の思想を統制し、妄を去りて眞に就き、枝葉を棄てゝ根本を求め、痛切に感じたる人生苦の相を明にし(苦諦)之れが原因を尋ねて眞理を眞理とせず、非眞理を眞理とする無明の惑によつて身、口、意の業を行ふによつて集成せらるゝとし(集諦)、其の根本を滅却して涅槃の理を體得するにあらざれば苦を免るゝ能はずとし(滅諦)之れが滅却の方法を考察して修行の道に及び(道諦)正智を發して虛妄を除かんとせられたのである。しかもたゞ智識的に考慮したるのみにては未だ全心の安慰を得るに足らず。人の心は智のみにはあらずして、別に力强き情の執着あり、此智と情との衝突は常に吾等の心を苦むるもの、智識の光明をかゝげて情執の闇を破らんとするも、なか〳〵に去り難きは此情である。釋迦が如何に此情執打破に力を盡されしかは、後世詩人をして降魔の狀を想像せしむるに至つたので、釋迦の將に智見を開いて眞道を悟得せんとするや魔王波旬は我が事破るとし、欲妃、悅彼、快觀等の女を遣はし、女等は艶冶の嬌態、或は股脚を



現はし、或は手臂を露はし、喃々の語を以て之れを誘ひ、或は秋波を送つて之れを惑はさんとし釋迦は之れを一喝して

「形體は好しといへども、其の心は醜く、畫餅の中に臭毒を包むが如く、將に自ら壞れんとするもの、それ何をかなさん。去れ、又我れを累するなかれ」

といひて寂然として動かず、魔王は大に怒りて此上は力を以て服せしめんと、六天八部に命じて之れを威脅せしめんとした、六天とは四王天を初め多く戰鬪の神、八部は天、龍、夜叉を初め怪面奇眼の鬼神、或は劍戟を執り、或は刀槍を手にして其の志を阻まんとし、尙ほ其の動かざるを見るや、魔王は天上地下、凡そ一億八千萬の惡鬼羅刹を呼び集め、火雷を鳴らし、熱鐵を雨らす等の詭計をめぐらせしも、釋迦は之れを斥け〳〵て、終に情海波平かに智光赫灼として其の影を映し、心內平靜にして、惡魔に譬喩せられたる煩惱の心を勞するなく、臘月八日の曉の明星、燦として輝くと共に豁然として無上道を大悟し、とこしへなる無明の長夜はありて佛陀靈覺の光は三千大千世界を照らすに至つたのである。

釋迦は此靈覺の途上に於て先づ初めに物質生活の飽滿より精神生活の慾求に入り、次ぎに身心

は一如、物質生活と精神生活との離るべからざるを感じ、其精神生活に於ても徒らに理智に流れて情意を抑壓するの全人心の安慰を得る所以にあらざるを見、智情を統御する全精神の中樞を捕へて、こゝに其の信念を確立し、其の確立したる信念を以て一切衆生を濟度せんとする大慈悲心を發露し來つたのである。

## 慈悲心の發露

釋迦は單に自ら覺りて止む人にあらず、此の覺り得たる所を一切衆生に及ぼして、皆な俱に佛道を成せしめんとする大慈悲心を以て行動した人である。此大慈悲心こそ釋迦をして四十余年席煖かなるに遑なく、横説竪説せしめた所以である。蓋し人間味の最も濃かなるは慈悲に過ぎたるはなく、此慈悲の眼を以て一切衆生を見る、其の弊所短所を知りながら、しかも之れを寛容して更に之れを救はんとするに至るのである。

慈悲の眼ににくしと思ふものぞなく
罪ある身こそなほあはれなれ。

恰も親が其の子の弊所短所を知りつゝ之れを寛容して慈悲を垂るゝが如き至醇の心、これ尚ほ人



間の美はしき所、此美はしき所こそ佛陀の心に外ならない。されば涅槃經には耆婆が佛を讃へて阿闍世王にいへる語の中に、

「たとへば七人の子あり、此子の中一人、病に遇へば、父母の心平等ならざるにあらざるも、病める子に於て心偏へに多きが如く、佛の心は諸の衆生に於て平等ならざるにあらざるも、罪あるものに於て、偏へに心重きが如し」

と、佛の心は親心より更に擴大したるもので、法華經に所謂「三界は皆なこれ我が有にして、其の中の衆生は皆な是れ吾が子なり」とは眞に佛の心を現はしたものである。

此の心はこれ佛のみの心ではない。吾等人間の心に潜めるものに外ならない。佛は「一切衆生に悉く佛性あり」(法華經)とのたまひ、其の佛性を解して「善男子よ、大慈大悲を名けて佛性と爲す」(涅槃經)と。而して佛は其の大覺の初めにいふ、

「奇なる哉、此諸の衆生、如何ぞ如來の智慧を具有して、愚痴迷惑して知らず見ざるや、我れ當に教ふるに聖道を以てし、それをして永く妄想執着を離れ、自ら身中に於て如來の廣大智慧を見るを得て佛と異るなからしめん」(華嚴經)

と、これが釋尊の後半生を支配したる精神である。理を以て教へ、情を以て救ふ、理情兼ね備はつて人心初めて平安に、吾等は此釋迦によつて教へられ、導かれ、救はれ、助けらるゝを得るのである。

## 釋迦の教化

釋迦は先づ自己の師事したりし阿羅邏並に欝陀羅摩の二仙に自己の所見を告げ、彼等をして眞の道に入らしめんとしたれど、二仙は既に世を去りしかば、久しく自己と苦行を共にせし、憍陳如等五人の者を教化せんとし、波羅奈斯園の鹿野苑へと進まれた。憍陳如等五人は先きに釋迦の徒らに身を苦むるは眞解脱の道にあらずとして食を得て體力を復するを見て、之れ彼れの墮落なりと離れ去り、今尚ほ苦行をつゞくる人々である。釋迦は先づ之れに向つて自己の悟り得たる所を說き、其の迷妄を解かんとて、途々、遇ふ所の者を濟度して鹿野苑に入る。憍陳如等五人は

「彼れ苦行を棄てゝ退轉し、飲食の樂を受けて道心を失ふ、今、此に來るとも、何の禮拜するの要あらん」

と、出迎へもせず坐も設けずと語りてありしが、其の近づくに從つて容貌端正にして態度莊嚴、覺



えず、起つて禮拜し、席を設けて坐を勸む、釋迦、乃ち五人に向ひて

「汝等、共に我れを見て禮せざるを約し、今却て此の如きは何ぞや」

五人は慚愧の心を生じ進んで其の教を請ふ、釋迦いふ、

「汝等、小智を以て輕々しく我が道の成ると成らざるとを量る、形、苦にあれば心は惱亂す、身、樂にあれば情は樂着す、苦樂兩つながら道を成す所以にあらず……苦樂を捨てゝ中道を執りて之を行へば心寂定して能く道を成さん」

とて諄々として教化したまふ。彼等其教に服し直に佛弟子となり、こゝに教主(佛)教理(法)教團(僧)の三寶は具足し、宗教の形態成り、此地に止りて法を說く、來るものは拒まず、僧と俗と學と不學とを問はず、富めるも貧しきも、男も女も其の教を受け、長者の子耶舍は進んで僧となり、其の父と母とは在俗の身たがら佛に歸依す、俗を離るゝを僧といひ、俗にあるを優婆塞(男)優婆夷(女)といふ。

斯く釋迦、教は一切平等にして、當時印度の風習たりし四姓の階級も、釋迦は之れを打破して「川の水の海に入つて同一鹹味たるが如く四姓も佛に歸しては同一釋種」なりとの人間に對する平

等觀を以て此中道の教義を宣揚したが爲めに歸依するもの日に多く、其の徒弟も亦釋迦の

「汝等の所作已に辨じて世間のために上福田となるに堪へたり、宜しく各々遊方教化して慈悲心を以て諸の衆生を度すべし」

との許しを得ては諸方に教化宣傳し、釋迦の教義は普く印度國中に彌滿するに至つたのである。

釋迦は斯く教徒を四方に派して教化せしむると共に又彼等を教化することを怠らざりし。されば彼れの鹿野苑を去りて、其の出家の途次、國を擧げて之れを讓らんといひ、其の肯かれざるを見て「成道したまへば先づ我れを教化したまへ」といへる頻婆沙羅王を度せんとて鹿野苑より王舍城に向はんとして漸く摩伽陀國に入りたまひし時偶ま印度の雨期に遇ひしを以て此期は河川漲りて旅行　不便なるのみならず、生類繁茂の時なるを以て行脚して之れを害し、其の小虫だも踏み殺すを憐れなりとし、此期中は出遊を止め、何れの地方にあるものも一所に來り住まりて專ら修道に盡さしむることと定められた、此期は五月十六日より八月十五日に至る三ヶ月で、之れを雨安居といふ。彼等は此安居の中に修め得たる所を期滿ちて四方に散じて教化するので、上に菩提を求め、下に衆生を化するは佛弟子たるものゝ忘るべからざる心掛けとせられたのである。



此第一回の安居は摩伽陀國の杖林に過ごされ、雨晴れて途々有名なる波羅門の學者たる迦葉兄弟を化して王舍城に入る。蓋し此の迦葉は曾て王の歸依を得たるもの、其の迦葉既に釋迦の弟子となる。大王其の教を受けて隨喜の念禁じ難く、長者迦蘭陀も亦其の教に服し王舍城中の竹林の地を献じ王は之れに伽藍を建てゝ釋迦を迎へ、同地方の碩學といはれたる舍利弗、目蓮の二人も亦來つて之れに師事し、次で此二人にも優りし大學者たる摩河迦葉の來りて之れに歸するあり、學者といふ學者、當時の階級制度に於て最上位にある、波羅門種の人々も、皆な來りて一位下れる刹帝利種(士族)の釋迦の弟子となり、衆星に圍繞せられて太陽の獨り光りを擅にするが如く、釋迦多くの徒弟に圍繞せられて其の教主となり、太陽の光りの汚穢をも厭はざるが如く、釋迦は種族に於て下位なる田舍(商、農)首陀羅(賤民)をも同視して教化を垂れられたのである。

## 高尚の理、卑近の喩

釋迦の教義は理に於ては一個の哲學であり、其の微に入り細を穿つ宇宙人生の分析は今日の學者を驚嘆せしむるもの、しかゝ之れを統制して其の本を究むるに至つては其の理深く其の旨遠く幽を闡き玄を盡くし、發して八萬四千の法門となり、流れて五千七百の經卷となる。皆なこれ釋

迦一個の腦中より迸發せしもの、一切の哲學は此中に包容せられ、諸種の論議は皆なこゝに批判せられ、洗練せらる。其の學者を教化し得たるもの實に此にあると見るべきであるが、釋迦はたゞ其の高きを誇るものではない。其の教化の民衆的なるに至つては卑近の譬喩、簡易の叙述、能く人心の機微に觸れて、これが開發を過らざる所、釋迦も亦一種の苦勞人たるの感がある。

「昔、人あり、遠く行くに當り、下男に命じて、汝、能く門を守り、且つ驢の索に氣付けよ」と、出で行きし後、隣家に樂の音聞えしかば、下男は之れを聞かんとて、門に驢を繫ぎて隣家に行きし間に、賊入りて家中の財物を奪ひ去りぬ。主人歸りて下男を叱すれば、下男は平然として「門と驢の索とは之れを守りぬ。財物のことは命を受けず」といふ、主人怒りて「汝を止めて門を守らしめしは財物のためなり、財物既に失ふ、門何の用ぞ」と、

生死の愚人、愛欲に溺れて心を忘るゝも亦此の如し　（譬喩經）

と說き

昔、夫婦あり、三つの餅を有し、各々其の一つを食ひて一つをあまし、さて約していふ先きに物言ふものには此餅を與へず、默するものゝみ食ふべしと、夫婦は此一つの餅のために語らざ



りし間に賊は忍び入りて家中の財物を盜み去りぬ。二人は其約あるが故に敗て言はざりしが、婦は堪へかねて「何が故に此一つの餅のために賊のなすまゝに任す」と、夫は之れを聞きて「汝既に言ひたり、此餅は我が物なりとて食ひぬ。

凡夫もまた此くの如し、小名利のために詐りて賢善の相を爲し、虛假の煩惱、諸種の惡賊の侵略する所となつて大苦に遇うて患となさず、却て五欲に耽着す。　（百喩經）

と、これらは人間の弊所短所を徹見したるものにあらずんば云ひ得べからざる譬喩ではあるまいか。若し其れ彼のトルストイも引用せる有名なる人生喩の如きに至つては想像の富贍なる直に大詩人として見るべきである。

人あり、曠野を旅びし、惡象の追ふ所となり、怖れ走れども、免るゝに所なし、偶々一つの空井戸を認め、傍らに樹の根あるを見、其の根にすがりて身を井中に潛めしに、忽ち黑白の二つの鼠來りて其の根を嚙み、井の四邊よりは四つの毒蛇、頭を擧げて嚙まんとし、井の底には毒龍あり、口を開いて呑まんとす、これのみならず、樹根に蜂の巣あり、蜂散じ來りて螫し、野火起りて此樹根をも燒かんとす。されど、其の蜂の巣より日に五滴づゝ口中に蜜落ち來る此人、

此五滴の蜜のために憂惱を忘れて身の苦中にあるを知らざるは憐れならずや。

此人餘人にあらず、衆生の世樂に貪着して大なる患を思はざるにたとへたるなり、曠野は無明長夜の曠遠なるに喩へ、象は無常の襲ひ來るのであり、しばし潜む井は生死、其のすがれる樹の根は命、二つの鼠は晝夜、樹の根を嚙むは念々これ生滅、四蛇は地水火風の四大、蜂は邪念、火は老病、毒龍は死、而して五滴の蜜は色、聲、香、味、觸の五欲なり。（譬喩經）

釋迦の譬喩は此の如くに巧妙に、此の如く卑近に、何人をも教化し盡されたのである。

## 戒律と懺悔

釋迦の教は慈悲の教である。されど其の修行者に對しては毫も假借する所なく、操行の嚴正ならんことを望むので、出家の佛弟子は教化の責あるものなるが故に其の守るべき戒律も實に多く二百五十戒の多きに達し、微罪も之れを許さぬが、在家の弟子即ち優婆塞、優婆夷に對しては、僅に

一　殺生するなかれ
二　偷盜するなかれ



三　邪婬するなかれ
四　妄語するなかれ
五　飲酒するなかれ

の五に止め、出家即ち比丘(男)比丘尼(女)に至つては邪婬のみならず、夫婦の婬行をも斷たしめたるのみならず、女人に觸るゝことをも、(女に於ては男子)故らに精液を出すことをも禁ずる如く微細に入つて居るのである。此二百五十の戒を見るの時、釋尊が如何に人間の弊所短所に精通せらるゝかを察知することが出來るのである。しかも大乘の戒法に至つては

一　一切の惡をなすなかれ(攝律儀戒)
二　一切の善を修せよ(攝善法戒)
三　一切の衆生を濟度せよ(攝衆生戒)

の三と爲し其の大綱を統べ、其の網目は發して二百五十の比丘の戒、比丘尼の三百四十戒となり之れを罪惡視するといへども、人誰か罪なからん、釋迦はこゝに於て減罪の法を示し、

「百年の垢つける衣服も、一日に洗ひて鮮淨ならしむるが如く、百千劫の中に集むる所の諸の不

善の業も、善く順ひて思惟せば佛法の力を以ての故に、一日一時に盡く能く消滅すべし」

（大集經）

「人、衆くの過あらんに、自ら悔いて頓に其の心を息めずんば罪の來りて身に趣くこと水の海に歸して漸く深廣となるが如きも、自ら解して非を知り、惡を改めて善を行はゞ罪の自ら消滅すること病の汗を得れば漸く痊損するが如し」

（四十二章經）

といひ、其の懺悔の第一歩を慚恥の心とし、

「慚恥の服は諸の莊嚴に於て最も第一とす。慚は鐵の鈎の如く、能く人の非法を制す、此故に行者常に慚恥すべし」

（遺教經）

と示し、巧みなる喩を擧げて

昔、猿あり、一握の豆を持ち、誤りて其の一粒を落し、之れを求めんとして、手の中の豆を捨つ、一粒未だ求め得ざるに他は悉く雞の食ふ所となれるが如く、凡夫、一戒を破りて悔ゆることを知らず、悔いざるを以ての故に放逸滋蔓して一切の戒を捨つ

（百喩經）

と說く、皆なこれ人間の弊所短所を指摘して其の美所長所を發揮せんとするもの、嚴なるが如く



寛なるが如く、能く人間性に應同して其の教を說かれたのである。

## 家族の教化

釋迦は到る所に教化を施しつゝ終に其の故郷たる迦毘羅に入りて人の情として若し新たに財寶を得たる時は先づ其の父に贈る、我れ亦我が得たる最も貴重なるものを父に贈らんとて其の開覺したる教法を說き「正道に從ひて之れを行ひ、邪道に墮つることなかれ、正道に順へば世々患なからん」と激勵して其の領解を得、宮中の男女悉く出で、迎へしに、たゞ耶輸陀羅のみ來り迎へず、獨りいふ「太子若し妾を忘れたまはらずば來り見たまふべし」と、釋迦は舍利弗、目蓮の二人を伴ひ耶輸陀羅の室に到らんとして、先づ二人に告げ、「我は既に一切の愛欲を離れたれど、耶輸陀羅は然らず、久しく我れを見ざりしが故に、愛慕の情未だ去らず、我れの室に入らんとするや、必らず我が足を把るべし、汝等之れを妨ぐる勿れ、彼れは之れによつて還つて法門に入らん」と、果して其の言の如く、耶輸陀羅は走つて釋迦の足に觸れ、慟哭しばらくも止まず、父王は其の心を推し、釋迦に告げて「汝、去るの後、日夜、汝を思うて汝が粗衣を纏ふと聞いては其の服を粗にし、汝が食を減ずると聞いては其の食を減じ、再嫁を勸むるものあるも之れを拒みて今に至る、痴態

此の如き亦咎むる勿れ」と、釋迦は徐ろに愛欲の去るべきを說き之れを誘化して喜んで佛門に歸せしめられたのみならず、耶輸陀羅は其の子羅喉羅に向ひ、子は父の敎を受くべし」とて釋迦の敎を請はしむるに至つた。羅喉羅は釋迦の一子、喜んで其の餘財を與へんことを請ふ、釋迦いふ「汝、眞に得んと欲するか」羅喉羅いふ「眞に得んと欲す」と、釋迦、舍利弗に告げて「彼れが父に請ふ所の財は用ふるに從ひて盡くるが故に懊惱あり、我が與ふる所の財は用ふるに從つて盡きず、我れ之れを菩提樹下に得たり、汝、彼れを度せ」と、舍利弗、乃ち羅喉羅をして沙門たらしむ、其時羅喉羅、自ら省みていふ「佛の智慧は大海の如く、我が心は毫末の如し、能く如來の智慧を受持せんや」と、釋迦、こゝに於て敎を垂れていふ。

水滴、微なりといへども、漸く大器に滿つべし、大禍、もとより大ならず、纖々より積む、小善を輕んずるなくんば、無量の福を得ん

（法句經）

と、太子已に出家し、太子の子亦出家す、父王は其の繼嗣なきを悲み、子孫と別るゝを悲む。釋迦は其の心を察し、其の徒弟に命じていふ

「父母聽かされば出家受戒するを得され」



と、爾來、父母の聽許を得ざるものゝ出家を許さゞる如き、實に釋迦の人間味の濃かなるを見るべきである。

釋迦の尙ほ迦毘羅にある間に父王は老病のために死去せられしを以て、盛大なる葬儀を擧げ、釋迦、自ら其の棺を擔うて子たるの道を果し、しかも尙ほ徒弟を敎化するを忘れず、「世間は無常にして幻の如く、餘の如く久しく居らず、汝等、勤めて生死を離るゝことを求むべし」と。幾もなくして釋迦は迦毘羅を去つて王舍城に向はんとする時、波闍波提初め迦毘羅の貴夫人等は之れを追ひ來りて、出家せんことを請ふ、釋迦之れを許さず貴夫人等泣いて去らず、阿難之れを愍み釋迦に向つていふ、「女子は佛果に達するを得るや」「然り」と、阿難、此に於て叔母波闍波提、哺育の恩を說きて之れを許さんことを請ふ、釋迦、終に之れを許し、こゝに初めて比丘尼の制は立てられたのである。

## 釋迦の世間敎

釋迦の敎を以て出世間の道なりとし、甚しきは人間を離るゝの敎とするは眞に釋迦を知るものではない。釋迦の敎は高尙幽遠なる出世間の大道に根據を置きて、世間の敎を說くに於て頗る人

情に應同したるものを見る。其の夫婦の道を說くに於ても、夫の妻に對する道として

一　待つに禮を以てすべし
二　威嚴を欠くべからず
三　時に隨つて飲食せしむべし
四　時を以て莊嚴(衣服等)せしむべし
五　家事を委付すべし

といひ、妻の夫に對する道として

一　先づ起きよ
二　後に臥せ
三　言を和げよ
四　敬順なれ
五　意を先にして旨を受けよ　(六方禮經)

特に女人に對して三惡を示し



一　早く寢ね晩く起き、夫の訶責に遇へば罵り返す、
二　美味あれば先づ食ひ、夫に進むるに惡食を以てし、他の男子のかほよきを見ては仇し心を起し、常に虛言を構ふる、
三　家事を治めず、遊惰に耽り、人の善惡をいひ、他の長短を語り、口を慎まずして無用の爭ひをなし、親族に憎まれて人の賤しみを受く

とて其の缺點を指し、五善を擧げて

一　晩く寢ね早く起き、髮を理め、服を整へ、面を洗ひ、汚れを去り、常に恭順にして事あれば先づ夫に告げ、美味あれば先づ夫に勸むる、
二　夫に叱り罵らるゝとも、能く之れを忍び、口を慎みて瞋り恨むことなき、
三　一心に夫を守りて恒に及ばざらんことを恐れ、苟且にも仇し心を起さゞる、
四　夫の長壽ならんことを願ひ、其の不在の間は能く家事を理めてまた他意なき、
五　夫の惡を念はずして常に其の善を念ひ能く家名を擧げて親族鄕黨に喜ばる、

と長所を示し、五善を行ふものは人に愛敬せられ、世の譽を受け三惡を行ふものは常に人毀(そしり)を

受けて身安穩ならず(玉耶女經)とす等、其の觀察の徹底し其の教訓の痛切なるを思はざるを得ない。

若し其れ父母の恩を說ける如きは今更らいふまでもなく、「教化の則は孝順を以て本とす」とし「父母を供養すれは大功德を得大果報を成す」とし、

父母忽ち病に染る時は自ら看視して下賤に委せず、床邊を離れざれ(父母恩重經)

と說き、終に

「父に慈恩あり、母に悲恩あり、若し我れ世に住すること一劫、これを說くとも盡くすこと能はじ」(心地觀經)

といひ、單に世俗的なる物質の孝順のみならず、精神的に

「若し父母、信なきものは信心を起さしめ、若し父母、戒なきものは禁戒に住せしめ、若し父母、慳なるものは惠施を行はしめ、若し父母、智なきものは智を起さしむ、子能く是の如くなる之れを報恩といふ」(毘奈耶律)

といふ等枚擧に遑なく、父母たるの道を示しては



一　子を制して惡をなさゞらしめよ
二　其の善處を指授せよ
三　學と道とを教へよ
四　善き嫁娶を求めよ
五　時に隨つて供給せよ　(六方禮經)

といふ。その友を語りては

友に四品あり、花の如きあり、好き時は頭に挿み、萎む時は捨つ、富貴を見ては付き貧しければ棄つ、これ花友なり、
秤の如きあり、物重ければ頭を垂れ、物輕ければ即ち仰ぐ、與ふるあれば敬ひ、與ふるなければ慢る、これ秤友なり
山の如きあり、金山の如し、鳥獸、これに集れば毛羽爲めに光を蒙る、己れ貴くして能く人を榮えしめ、富樂同じく觀れば、これ山友なり。
地の如きあり、百穀財寶は一切これを地に仰ぐ、施給養護して恩厚薄なきはこれ地友なり

と世相を知悉して友情を分ち、其の親友とすべきを挙げて

一　與へ難きを與へ
二　作し難きを作し
三　忍び難きを忍び
四　密事を語り合ひ
五　しかも他に向つて語らず
六　苦に遇ふも捨てず
七　貧賤となるも輕んぜず

「此七つを具ふるものを親友とす」(四分律)といふ、これらの教訓は皆な反面より釋迦の如何に人間に通達せるかを見るべきものではないか。若し其れ貧困の原因を説きて

一　飲酒に耽ること
二　夜遊びすること

（學經抄）



三　伎樂に耽ること
四　賭博的行爲をなすこと
五　惡友と交ること
六　怠惰に流るゝこと　（六方禮經）

とし、嘗て尉闍迦なる波羅門の如何にして世間法に於て安樂なるを得べきかを問ふた時、(一)方便具足とて生活の方便たる職業的修養の完備すること(二)守護具足とて財物の保存をいひ(三)善知識具足とて善友に交るべきをいひ(四)正命具足とて濫費と卑吝とを避けて生活すべきこと（原始佛教思想論）をいへる如き、これ亦其の世相通達を見るべきである。

成道以後の釋迦は教化に日も之れ足らず、其の間、外よりは波羅門教徒の迫害あり、内には徒弟提婆の自立を計つて教團を分裂せしめんとするあり、しかも少しも動じたまはず、高く自ら信ずる所を標置して教化を怠りたまはざりしが故に、之れに歸するもの漸く多く、舍衛國の須達長者は波斯匿王に請うて太子逝多の邸園を抛きて祇園精舍を建て、先きの竹精舍と此祇園精舍とは

布教の二大中心となり、其他王舍城を距る遠からざる所の靈鷲山卽ち耆闍崛山並に毘舍離城の大林精舍なぞは有名なる布教の道場となり、此間を往來して機に臨み變に應じて横說竪說したまふたので、釋迦の生涯は努力の生活なり、奮鬪の生涯なりと見ることが出來ると共に、其の意思の强固にして何者にも抵げられざる崇高の人格を見るべきである。されば

十千の敵に對し一夫にして之れに勝つとも未だ自ら勝ち忍ぶの上なるに如かず(法句經)といひ忍の德たるや、苦行持戒の及ぶ能はざる所、能く忍を行ずるものは名けて有力の人と爲すべし若し夫れ惡罵の毒を歡喜忍受して甘露を飲むが如くする能はざるものは道に入るも智慧の人と名くべからず(遺教經)

と、かくて釋迦は四十有五年を經過し、病軀を擧げて尙ほ教を說きしが、病勢頓に增し、今は步行も困難となり、拘尸那(くしな)城の附近なる娑羅双樹の繁れる所に來り、從者阿難に命じて頭を北にし面を西にし右脇を下にし、兩足を伸ばして安臥せしめたまふに至つたのである。

此時、阿難は號泣して

「世尊入滅したまはゞ我れに師なし、我れまた誰れに從つて道果を得べき」



と、釋迦は懇ろに之れを慰めて、

「汝、憂ることなかれ、我れ常に汝等に告ぐ、諸行は無常なり、會ふものは離る。過去の佛の金剛身を以てするも亦無常のために變遷したまへり、我れ亦之れに異るあらんや、」

汝等、我が滅後に師なしとて憂ふる勿れ、常に我が教示したる所を尊奉すべし、之れ汝等が大師なり」

と、肉身の釋迦は死すとも、其の精神的生命の發露たる教法は滅ぶべきものではない、釋迦が之れを諭示する頃には身體益々衰へ、死期刻々に來る、卽ち

「汝等、法に於て疑あらば今こゝに聞き、後に悔を殘すなかれ」

と死に至るまで法を說いて止まず、かくて二月十五日の夜(西曆紀元前四百七十九年)は、しだいに更けて將に半ばならんとする時、

「汝等、しばらく語るを止め。時は將さに過ぎんとす。我れ今滅度せんとす。これ最後の教誨なり」

と說き終りて寂然として涅槃の雲に隱れたまうたのである。

## 釋迦の感化

以上は釋迦を一個の人間として毫も理想の色彩を施さずして觀察したのである。しかも其の一代の行爲に於ては吾等の企及すべからざる超絶せる所のものがある。釋迦をして若し吾等と同じき凡夫ならしめば、迦毘羅城中春海の如き物質の樂に醉うて一歩を出ることが出來なかつたであらう。之れを脱離して乞食生活に入り、精神上の生活を求む、これ既に異常、しかも、單なる精神生活のみに甘んぜず、物質と精神との融合調和の上に眞の靈覺を求めんとする難行苦行、これ凡人の耐ふる所にあらず、志すは易くとも、之れを遂ぐるは難い。釋迦は終に之れを遂げたのである。既に之れを遂ぐ、遂げて尙ほ安んぜず、家を棄てゝ山に入りたる彼れは復た山を下りて諸方に教化し、迫害と戰ひ、誘惑と爭ひ、其の自ら得たる所を體驗し、其人格の光りを以て大衆を導き死に至るまで倦まざるの努力は、成功に甘んじて爲すなきに終る徒に偉大の警告〻なるものでなからうか。

豫言者は故郷に入れられずといふ。しかも釋迦は其の故郷に入りて家族をも教化した所に其の人格の大を見るべきでないか。其の死して荼毘に付するや、阿闍世王其他七國の王は佛骨の分配



を得んがために、干戈に訴ふるに至り、拘尸那城の波羅門徒羅那の仲裁によつて八國に分つたといふ一事に釋迦が如何に各國王に崇敬せられて居つたかを見るべきでなからうか。其の感化は滅後に傳はり、佛弟子は釋迦の教訓を嚴守し、滅後二百年に至りて釋迦は、出家は其の日〳〵に托鉢して生命を繋ぐべきで、斷じて食物を貯へて置くべきものでないと說かれたが、鹽は貯へてもよいか惡いかとか、釋迦は出家は午後には食を取るなとあるが、正午から日が指二本ほど傾いた後も惡いかといふやうなことが爭點となつて七百の佛徒が集つて論議したほどで、一言一句をも其の教示に違はじとしたる思想を見るべきである。此の如きの釋迦の崇拜は、此偉大なる人格者が僅に八十年の壽命を以て終るべきでない。肉身の釋迦は死んでも、其の眞身は死すべきものでないといふ信仰より、此土に現れたる歷史の釋迦を應化身とするに對し、別に不生不滅の法身があるといふ思想となり、次第〳〵に釋迦を理想化して全く超人間的なる神秘なものとまでなつたのであるが、今、それらの粉飾を除き去つて赤裸々なる人間としての釋迦を見ても亦實に最も完全なる人格の顯現であり、人類永遠の指導者であるを疑ふことは出來ない。釋迦は確かに靈覺の人であり此靈覺を人類に啓示したる人である。

# 理想としての維摩

## 維摩の經典

維摩は實在の人にあらずして理想の人物と見ることによつて大乘の教旨を窺ふことが出來る。由來大乘の經典は一面に甚深の哲學を有すると共に他面には富贍なる文藝味を有して居る。今此維摩經を中心として大乘の教義を語り、文藝としての脚色を見つゝ理想の靈覺者として維摩を語らんとする。此の經は理致深遠にして玄旨淵玄である、其の最も詳しき解釋は天台の宗祖智者大師が隋の煬帝の需めに應じて講ぜられた維摩經廣疏廿八卷並に維摩經玄義六卷ある、其の六代の法孫荊溪湛然が廣疏の旨を節略して十卷(維摩經略疏)となして天台一流の教眼を以て之れを解釋し、我が國にては殆ど天台大師が煬帝の前に於て之れを講ぜられしと同時代に聖德太子が推古帝の前に於て此の經を說かれ、而して自から義疏三卷を著はされて居る、之れ我が國漢文著述の始めであると云ふ、其の他華嚴宗は華嚴流の見方法相宗は法相流の見方で此の經を解釋し、禪宗は又禪宗流に此の經を見て居るので各宗何れも此の經を說いて居る、其の教理の方を見れは八



面玲瓏人に與へて見せしむで、前から見れば峰となり、後から見れば巒となり、一部の維摩經は八宗九宗の見るに任せて居るのである、而かも之れが俗人の教で一居士が中心となつて居るのである。抑も此の經は如何なる結構如何なる脚色の上に立て居るかと云ふと、全部戲曲的即ちドラマチツクである。之れが此の經の特色である、大乘經典は法華でも皆戲曲的の事があるが、簡單にして而も出色の文字で文章は雄渾にして其の譬喩の巧妙なるは此の經を推すのである。

## 一曲三場の大要

此の經の脚色は三幕より成り、初めに序幕とも目す可き佛國品と云ふのがある、之れは佛が或る時毘耶離城の菴羅樹園内の綠葉蓁々たる所で說法せられた、然るに此の際維摩は病の床に臥して居て佛の說法を聽きに出ない、ソコデ維摩は毘耶離城中菴羅樹園に於て說法せらるゝを聞き佛の大慈悲我れ病に臥すときゝ給はゞ必らず見舞の人を出し給はんと思念して居る處へ、佛も亦之れを知り給ひて見舞に使を遣はされたが、維摩は見識もあり、學問もあり、地位もあり、財產もある、仲々立派な人物で、在俗の身でありながらよく佛法に通じて大いに尊敬せられて居る、此の維摩居士今病床に臥して出でず見舞に來る人々をとらへては議論をなす、故に誰一人として見

舞に行く者がない、然しながら佛は之れを舍利弗に向て汝行きて維摩が病を問へと仰せらるゝと舍利弗は我れ其の任に堪へずとて辭退した、ソコデ目蓮大迦葉等大弟子と云はるゝ人々に順次に其の使命が下たが何れも曾て維摩の爲めに論破せられた事があるが爲めに、各々其の因緣を述べて之れを辭退した、阿難も辭退し十大弟子幷に五百の大弟子達が皆行かないのである、之れ反面から維摩の拔群なることを示してをる、ソコデ佛は更に大乘の修業者たる菩薩に命ぜられた、先づ第一に彌勒菩薩に向って汝行て維摩の疾を問へと、仰せらるゝと二つ返事で出掛けるかと思ふと彌勒菩薩も亦其の理由を附して任に堪へざる旨を答へられた、斯樣にして八千の菩薩も誰一人行くものがない、さりとて誰も行かぬわけにはいかぬ、そこで終ひに文珠菩薩に命ぜらるゝと流石に三世通達智慧自在の大菩薩のことなれば佛の命を受けて行くことゝなつた、之れ迄が第一幕である、之れから愈々文珠が出掛けると維摩病室即ち方丈の場となる、サテ文珠は維摩の病室に行った一方は智慧自在〻文珠菩薩、一方は辯才縱横の維摩居士、東西の大關技を戰はさんとし恰も龍虎の相會せんとするが如く兩々相會して抑も如何の問答を爲すのであらうか、サテ面白からうと云ふので滿座の聽衆は此の問答を聽かんとて皆ゾロ〳〵と文珠菩薩の後に付いて行った



そこで文珠と維摩と甲論乙駁種々の問答があつて是が第二幕となつて居る、之れが終つて場面は前に返りて再び菴羅樹園の說法場となり、此處へ文珠は維摩を伴ひ、衆菩薩は之れに隨ひて佛前に來て兩人の問答の判斷を乞はんとするの光景にて之れが最後の幕となつて此の經が結ばれて居る、今述べ來つたのは一經の大要に過ぎないが、要は全體の脚色一曲三場となり、初めに菴羅樹園の場を出し、次ぎに維摩が方丈の室となり、更に菴羅樹園になりて之れを結び、佛を中心として別に主人公たる維摩を置きて其の口より大乘佛敎の妙理を說かしめ、其の副主人公として大乘の菩薩たる文珠を出し、其の間に人間思想の代表者とも云ふ可き舍利弗を點じて事每に疑ひを出さしめて其の談を進め、實に一經の脚色如何にも面白い、而して此の維摩、此の文珠、此の舍利弗畢竟之れ吾等が心中の光景を讀みしもので、此の深遠の理を看破して始めて大乘佛敎の妙はあるのである、單に文學として見るも理想詩としての價値も頗る高いのである、夫故俗人の敎として世に大いに珍重せらるゝのである、特に病氣平癒祈願の時に讀む事になつてをると云ふに至つては面白い經であつて、全部十四品に分れて居る、今より其の梗概をお話致さうと思ふのであります、其の大要だにお話したならば霞を隔てゝ雲を見るのほどでも御解りになることと思ひ

ます。

## 菴羅樹園の場

第一は序品とも云ふ可き佛國品である、今一應此の品の仕組をお話し申さんに、此の品の組織は殆ど小說の樣である、前にも申しました通り之れは佛が或る時印度の摩竭陀國の北の方に當る風光明媚の毘耶離の菴羅樹苑にて、桃のやうな果實の出來る樹の木葉茂れる而も清風徐ろに來る所で、大衆の爲めに說法をして御座る時、聽衆は實に立錐の餘地もなき狀態で、佛弟子五百人、大比丘衆八千人、菩薩三萬二千、梵天一萬、天帝一萬二千並に天龍八部、諸比丘比丘尼、優婆塞優婆夷等推すな〳〵と詰め掛け圍繞して法を聽いた、其の中に佛は恰も海拔三百三十六萬里と云はるゝ須彌山が大海の中に顯はるゝが如く、佛堂に安座ましまして法を說き給ひ、其の盛大なること物に譬へ樣がない、其の佛弟子と云ふは羅漢であつて小乘の悟りの人である、菩薩は大乘の悟りの人である、大小二乘は敎理の上より云へば小乘敎は自分さへ悟れば他は何うでもよいと云ふ自利主義である、此の世は苦の海、涙の谷である、此の苦の海涙の谷に何故生れて來たのか、生れたればこそ苦しみをするのである、されば生を止めて生死の無い境界に到るのを願ふのが羅漢



である、羅漢譯して無生と云ひ此の苦海に生れ出ないで煩惱を斷ぜして無垢淸淨の身となり、山中靜かに修行して世の中に出て働かない、卽ち働らかんの方だ、之れに反して菩薩は梵語で詳くは菩提薩埵と云ひ、漢譯すれば覺有情となる、自分が悟りの道を求め苦を離るゝのみならず、一切衆生をして悟らしめんとする、所謂上求菩提下化衆生と云ふ大乘の方で利他主義の方である、されば羅漢は之れを供養はしても祈るものではない、祈つたとて駄目だ、只供養するは可いけれども願ふのは無意義である、菩薩は

人をのみ渡し渡して己が身は
岸に上らぬ渡し守かな

で、一切衆生を渡さんとするのが菩薩行である、此處が大小乘の區別の起るところである、兎に角羅漢菩薩其の他天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽の神々無量百千の衆が佛を圍むで法を聽いて居た、今此の經を讀むで驚くのは此の經の始めに三十二名の菩薩の名が擧げてあるが之れは三萬二千の菩薩の中から代表者として示されたのである、此の菩薩に就いては見解がある、唯三萬二千と擧げたのは多數を意味するので事實上肉體のあつた人でなく皆理想

の上に名づけたのである、凡そ宇宙間に於て世を救ひ人を助け　利々他の行業あるものは皆菩薩と見るので、禪宗にては凡べて他を助け人を救ふは勿論、凡そ衆生濟度の機關方法に要用なる事物道理皆之れ菩薩と云ふて、米も菩薩なれば味噌も菩薩であつて何でも一切を救ふものは皆菩薩である、吾人はかゝる見識を以て此經を活解せねばならぬ。

## 寶積長者と求法の精神

コレデ此の經の道具立は出來た、これから愈々序幕でこゝに花道から現はれて來たのが寶積長者である、五百の長者子と共に手に手に金、銀、珉璝、瑪瑙、瑠璃と云ふ七寶を以て飾りたる天蓋を持つて佛の前に出て來て、頭面禮足即ち最敬禮を以て其の天蓋を佛に献上し奉つた、ソコデ佛は之れを受け取て不思議の力を以て其の五百の天蓋を集めて一の大天蓋とせられた、其の一の大天蓋は遍く三千大千世界を覆ひ其の天蓋の中には宇宙の山川草木國土日月星辰さては十方の諸佛の說法の相迄が悉く其の中に現はれたと云ふ有難い手品であつて、滿座の聽衆は此の不思議を見て、アッとばかりに感歎し、唯佛の御顏を見奉るばかりである、實に此の不思議の說話の裏面には深い妙理が含まれたるのであるから、大乘の教典を繙かん人は大に心して讀む可きである、



即ち文學の裏面を窺ふことが肝要である。

抑も此の寶積長者初め五百の長者子が七寶の天蓋を佛に供養したと云ふことから面白い理が含まれて居るので凡そ人に教を受やうとするものに、自分の寶とする我見があつては法は聞けるものでもたゞ又其の教は解るものではない、自分の我見を振りすてゝ一向專心に佛の教を信ずると云ふのでなければならぬ、今寶積長者等が七寶の天蓋を献じたといふのは各々自分自分の寶とする我見を悉く振り捨てゝ佛に歸依した狀態である。コップの中に水が一杯入つて居ては容れることは出來ない　内が空虛であればこそ、水を容れる事が出來るのであると同樣に、自分の我見が一杯になつて居ては、他の教の入る可き筈がない、東京小石川に南隱老師と云ふ人があつた、此の人の許へ一日工學士と文學士との二名が老師を訪れた、何んでも新時代の新思想に憧れ氣鋭衝天の少壯學士のことであるから、今日は一番老師の法話でも承つて冷かしてやらうと云ふ意氣込みで參つた、老師は早くも之れを見てとり、彼等二人が來るがまゝに座敷へ通して、常の如くに番茶を呑んだ、ところで學士先生何氣なく其茶を頂戴せんとすると、老師は尙ほ其茶碗の中へ番茶を溢れんばかりに注ぎ込まんとした、そこで學士先生はそれでは溢れます〳〵と云ふと、此處

で老師えたりかしこし、さても汝等二人よ、此の茶が溢るゝが如く汝等の心の中は新思想だの新知識だの、やれ文學だの、やれ工學だのと無暗矢鱈に頭の中へ詰め込んで居る上に、尙ほ深妙幽遠なる佛法の道理を入れんとするは、今の茶と同じく無理な事である、眞に佛法の玄旨を聽かんと欲したならば宜しく赤子の如く心中空虛にし來るがよからうと云はれたと云ふ話がある、又老子の語にも虛往實歸と云ふことがある、虛はおなしくと云ふて虛く往つてこそ一杯になつて實歸することが出來る、初めから一杯になつて居ては到底入れる譯には往かぬ、處が今文學士工學士の如きは腹の中に一杯文學なり工學なり理學なりがあるからして其があるうちは佛法の玄旨は入らない、故に我見を捨てゝ心中空虛にして置てこそ初めて何物かを持つて歸る事が出來るのである、今寶積長者等が先づ天蓋を佛に獻じたのは卽ち我見を振り棄てた意味である、さて佛が其れを合して一にせられたといふのは各自の我見を振りすてれば自他平等一如で、天地宇宙間我れの彼れのと云ふ差別はない、平等一如であつて、彼れの我れのと云ふ差別の見をすてれば、こゝに悉く佛の大慈悲の中に包まれて一つのものになつてしまうと云ふ意味である。我を捨てると云ふ事は卑近の處より云へは「ヲモヒヤリ」同情である卽ち我と人と一如になるのである、我見があつて



は同情は出來ぬ、此のヲモヒヤリは水の如く方圓の器に隨ひ、我見我慢は氷の如くで之れを春風に溶かし水となして始めて重箱になり或は圓器になり方圓器水を自由に容るゝ事を得るのである、ソレ故に此の我見の氷を溶かし行けば何事によらず、圓滿に行くのである、實に此の同情は人情の美であつて、此の心を以て人に接すれば何人でも動かぬものはない、人生の趣味社交の快樂は此處にあるので、此の心さへあれば身はたとへ九尺二間の裏長屋に佗住居して居ても、常に春風駘蕩である、之れが無ければ金殿玉樓中にあつて富み榮えても常に秋風落莫である、此の心だにあれば唯一軒の家のみならず一國乃至は世界が美しく圓滿に治まつてゆくのである。陛下が下臣民を思召す事、我　子の如く民の上を敬ふ事恰も親の如きは之れ　陛下の御仁慈の深きは水中に映ずる月の如く木の葉の上におく露の上迄も映つるのである、此の同情の念、慈愛の心は人と人との間のみならず、廣く之れを一切の禽獸虫　草木に及ぼし、卽ち道の邊に咲く菫たんぽゝ及犬猫蜂蛙にでも此の同情を以て對すれば、誠に樂しく愉快に平和に美しく趣味がある、信州の俳人一茶は六歳の時であつたが、身は繼母に養はれて、「我と來て遊べや親の無い雀」と謳つたといふ其他「やれ打つな蠅が手をする足をする」又「痩せ蛙まけるな一茶こゝにあり」とかくの如く小動物

に至る迄同情を以てをる、又草庵に寢て居る際其處へ蟋蟀が飛んで來た、其の時の句に「寢返りするぞわきから飛んで來る蟋蟀」と云ふがある、實に同情の念が溢れてをる、許六の言に「物乞食でも穢ないと思へば發句にもならぬがあはれと思へば發句になる」といふのがある此の思ひやりを以て犬猫に對すれば尾を振つて從つて來る、彼の加賀千代の句に「朝顏に釣瓶とられて貰ひ水」と實に思ひやりが朝顏に迄ある、鬼貫の句に「行水のすて處なし虫の聲」とある、要するに此の同情の心を以て自己を失はず廣く萬象に及ぼせば鎭守の森や村の小川の流迄も、同情があり宇宙は皆な同情を以て滿されてをる、即ち我を棄てれば天地一體、今佛の一大大慈は佛の大慈悲の顯現を見ることが出來るのである、こゝに此の經の面白い處があるのである。

寶積長者は佛の大神通力に對して大に讃美し偈を說た、其の偈は長いが其の中に「佛以一音演說法衆生隨類各得解」といふ句がある、これは有名なので佛は一音で法を說かれるのであるが、之れを聽く衆生は隨類と各々自分〳〵の類に隨つて會得して誰の聽くのも同うすとするので、佛の法は一なれども之を聽く人々の機に應じて各々其の求むる所を得せしむると云ふ無碍自在なることと到底他の及ぶ處ではない、之れを長者は讃歎したのである、一佛法を說くと云ふことはむ



づかしい事で、自己の信ずる如く他をして信ぜしむると云ふのが目的ではあるが說く人と聽く人とは、其の境遇閱歷が違ふから、各々の人に滿足を得せしむると云ふことは六ケ敷、然るに今聽衆が隨類各得解したと云ふのは如何なる譯かと云ふに、確かセボンの論理學の中であつたと思ふが分ると云ふ事を說いて、「分ると云ふことは自分に分つて居ることであつて自分の考へと他人の考へとが相一致するから分るのであると云ふて居る卽ち成る程と思ふ思考力があるから分るのである一致するのである、故に佛以一言演說法云々とも云ひ得るので佛の說法は天にある一輪の明月であつて、月あれば水の上にも木の葉の上にも萬物に其の影を映ずる如く、各々に滿足さすことが出來るのである。

## 心淨ければ佛土淨し

寶積長者は我見を捨てゝ說法を聽き自己の見解を述べ佛德を讃し、如何にせば佛土の中を美に觀ることが出來、又如何にせば此の如き佛の淨土に至り得可きかを尋ね參らす佛は善哉寶積とて諄々として菩薩淨土の行ひを說き給ひ、「若し菩薩淨土を得んと欲せば其の心を淨くす可し、卽ち心の淨きに隨ひて佛土淨し」と仰せ給ふ、丁度遠き處へ旅行せし人が歸て見ると鎭守の森が我を迎

へる如くに見え、村の小川の流も此の如く思はれる如く彼等に心はないけれども我れに慕はしくなつかしく思ふ心があればこそ斯様に覩える、之れ心淨佛土淨で心次第である、「心頭滅却火亦涼」で、汽車の機關士の如きは炎天土を燒くが如き夏の日は隨分暑いだらうが汽車の進行中は暑いと感じない、反つて驛に着くと非常に暑くなると云ふ所謂列車進行中は責任と云ふものを重んじて何うかして失錯は致すまい次の驛へ安全に到着したいと云ふ心があるから返つて暑いのを忘れて居るが、驛へ着いて安心すると初めて暑いと感ずるのである、即ち心其處に存せざれば暑いとも思はぬのである心次第である、又一の月を見るにつけても悲しき心を以てすれば悲しく、樂しいと思へば樂しい、人は月を見て喜んでも盲人の妻は「明月は座頭の妻の泣く夜哉」となげく、爛熳たる花を見れば誰も喜ぶ處であるが心ある人が見れば種々と慕はしくも、なつかしくも、悲しくも見える、明月の今宵亡き娘を思ひ出しかこつ人もなきにあらず、花語らず月言はず誠に唯見る人の心に依つて悲しくも嬉しくも見える、三界唯一心心外無別法で何事も心の現はれであつて心を離れて物はない、無門禪師の詩に

春有三百花一秋有一月。　夏有三涼風一冬有一雪。



若閑事無掛二心頭一。　便是人間好時節。

と云ふがある、實に萬法唯心で心から心を見れば心を苦しむのが人生であつて心が汚れて居るから佛土も穢れる、

おもしろや散るもみぢ葉も咲く花も
　おのづからなる法の御姿

と見る時何の不淨の處があらう、心淨ければ佛土淨し、此の一句に大乘の妙旨は充分に言ひ現はされて居る、佛教では三界唯心と云ふが事物を見るのに三性と云ふて、遍計所執性、依他起性、圓成實性と唯識では立てる、第一の遍計所執性と云ふのはそうでないものを、そうと見るのである。即ち菊石（あすた）を醫と見る如くこれを歴史上の事實で云へば、彼の平維盛が平家の軍勢を引き連れて駿河の富士川まで來て源氏と對陣したが、夜討をしやしないかと心配して居た爲めに、水鳥の飛び立つのを源氏の白旗と思ふて恐れ逃げたのは之れ遍計所執性で、實にある可きものでないものを有ると執した迷である、この迷で見れば枯尾花が幽靈に見える、而しイヤ源兵ではない水鳥である、幽靈ではない枯尾花であると知り、さて此の水鳥も尾花も眞に有る可きものでない萬物悉

く緣に依て元素と元素と和合して出來たもので因緣和合して假りに存して居るのである、此の假存の萬物之れを依他起性と云ふのである、コップはホヤでなくコップであるが其のコップも眞に有るのでなく假りにあるので只コップはアルカリと硅酸との元素でなつてをると知り、更に其の本性たる眞如といふ根本迄究め登て初めて圓成實性と云ふのである、昔支那唐の世に元曉なる人唯識を研究せようと思つて、名山高岳を歷訪せられ偶日暮れて止むなく獨り塚間に露宿した、處が日中の勞れで夜中渴する事甚しい、ソコデ邊りにある穴中に手を舒て水を掬て之れを飲んだ味頗る冷甘である、處が黎明に之れを見れば、何ぞ圖らん髑髏中の汚水で在つた、法師嘔氣を一時に催して悉く吐出し去らんとした、此時法師猛省して歎して曰く「心生すれば卽ち種々の法を生ず心滅すれば則ち髑髏不二なり」、如來大師曰く、「三界唯一心なりと豈我を欺かんや」と、深く唯心の教意を悟つたと云ふ事である、事洵に一小事實であるが唯心の論旨が宗教的實踐の方面に於て大に功果がある、斯の如く心に依て苦にも樂にも汚にも淨にも思へるが畢竟淨汚不二である、卽ち心淨れば佛土淨しである、是れ此の一句實に佛國品の大眼目である。

## 舍利弗と螺髻梵王



既に佛心淨佛土淨と說、たまふ、此の時坐にありし舍利弗は此の語を聽きて疑念を抱き、佛のたまふ如く菩薩の心淨佛土淨とすゝならば、今此の世界が何故に斯く不淨であるか、佛土淨しと仰せても世の中は實に不二である、我等が仰ぐ御佛に心の不淨な事があつたから國土が今見る如く不淨であると云ふ筈でもなからう、こは如何なる理であるかと思念した、佛は舍利弗に告げて仰せらるゝには日月は明らかに照らして居るが、盲者は之れを見ることが出來ない、是 日月が不淨なる故であろうか、盲人が不淨なる爲めであらうかと仰せられた、舍利弗は之れに對へて「もとより之れは盲目の罪で、日月の咎ではない」、と、佛は尙語をつぎ此の土は淨いけれども見るものの心淨からざるが故に、淸淨なるものを見ることが出來ない、卽ち汝の智慧の目が淨くないから此の土が不淨に見えるのであると仰せられた、爾の時一座の中にありし螺髻梵王は傍より言を挿みて舍利弗に向ひ、

「汝は何の爲に此の土を不淨といふ、我が見る處によれば此の土の淨きこと自在天宮の如し」と云ふた、處が舍利弗は尙ほも此の土は不淨であると見た、梵王は舍利弗に向ひ「仁者(卽ち舍利弗)の心に高下ありて佛慧に依らざるが故に此の土を見て不淨と爲すのみ」といふた、萬事萬物皆心

に依て生ず、心に高下があるから地にも高下の差別が出來る、一切平等の佛慧に依れば差別の高下はない、汚不二である、生死は世の中の常相であつて高下はない、高下差別あると思ふは皆心に由るのである、一切平等の見地より見れば此の佛土淨からざるなく實に淸淨である。

サテこゝで愈々心淨佛土淨の道理は明白になつた、此の時佛は二人の問答をきゝ給ひて足の指を以て地に觸れ給まへば、不思議なる哉三千大千世界は忽ち莊嚴光明百千の珍寶を以て飾り無量功德ある寶土となり輝くばかり立派なものとなつた、舍利弗は大いに驚き、今迄穢惡充滿せりと見たりし此の土は莊嚴無比の淨土となり、其の身は自ら寶蓮華臺上に坐す如し、何たる美妙であることよと佛の不思議に感じた、然るに佛一旦足をパツと離したまふや此の土は今再び穢土と化した、之れ吾人凡夫の心に高下あるが故に此の土が穢惡に見えたが、今其の心が佛の平等の大智慧に少しでも觸れて高下差別の念無ければ、此の世は淸淨無量莊嚴無比に見えるぞ、汝之を心せよとの意を示したのである、此の一幕が此の經の卷頭にあつて序幕である、是れ迄は本經の主人公たる維摩は出て來ないが、第二には方便品となつて始めてソロ〳〵と顏を出すことになる場面となるのである、然らば維摩居士は抑も如何なる人であるかと云ふことに就ては次第に述べるが



凡べて經は心に見、心に讀んで始めて深甚の妙旨無量の功德があるものである。

## 維摩の人格

此の方便品と云ふのは維摩が種々の方便を以て人を一度して行く手段方法を示したもので、今は病を以て人を度すると云ふ事が說いてある、今を去る三千年前印度に居たと思はず、其を現在自分の胸の中にあるとして考へよ、一體此の人は如何なる人かと云ふに、前述の如く毘耶離と云ふ一小都會に於ける金持ちで、智慧もあり、學才もあり、人格高く、世の中から非常に尊敬された人で、在俗の身でありながら、佛敎には至つて精しく眞理探究に身を委ねて居た、其の生活はと云へばたとへ佛敎に精通したる人とはゝへ、決して僧侶の生活はしなかつた、所謂大乘的生活であつた、手近く云へば此の生活こそ大小乘の異る要處であつた、此の大小乘の差異の生ずる處を明かに見るには富の問題所謂金錢の問題が最も能く分る、昔から金と道德とは仲が惡いが金なくては一日も生活は出來ない、生るゝより死ぬる迄皆金である、所謂生前死後金錢大明神である然らば道德は如何にと云ふに之れ又一日も缺いてはならないもので、之れを缺いでは人間らしき生活は送れない、而しながら前申す通り金と道德とは仲が惡い、或る道德家は云ふ、金を儲けん

と欲せば仁義道德を口にするな義理も恥もかいて之れを成せと云ふて居る、彼等が言ふ如く果して金と道德と斯く離るゝものであるか何うか、眞に道德を行はんとするものは全然金に手を觸れずに居ればよいといふが、かくして意義ある生活、生きたる生命を送らんとするのは仲々容易でない、考へものである、山陰げ靜かなる處に坐禪はよいけれ共、世智辛い現代に於てはそうはゆかぬ、何うしても金が要る、實に金と道德との關係は大問題である、遐羅及び印度の如き小乘教の坊樣は金錢を手にするは汚らはしいと云ふて電車等に乘る時には金が入るけれ共無一文で乘つて乘車の際に車掌に財布を見せる、そうすると車掌が其の財布の中から出して呉れると云ふ事である、斯樣に小乘教では金錢を尊ばない、昔は支那に於ても仁義道德を重んじて金は尊ばないで賤しんだものである、日本に於ても武士は金錢を嫌ふて金錢の事は決して口言せなかつたと云ふことである、我が國で慶長小判の鑄造せられた時に多くの大名が之れを殿中にて見て感心をして居つた、然るに上杉の家老直江山城守は之れを扇の上に乘せて手に採らなかつた、何故かといふに「此の山城守の手はイザ戰爭となつた場合には采配を取る手だ、汚らはしい金錢は手にとれぬ」といふた、然し之れは考へものである、道德も自分の心を清くするものとすれば別として、活社



會に活動し意義ある生活をなさんとするには金は大切である、此處に於て金と道德との關係に就て問題が起る、金を獲得するの方法如何及び其が使用法如何との二問題が是れである、人を押し倒して迄も金を得んとするのは亂暴至極で不道德であつてよくない、孔子も之を誡めて、「不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」と云はれて居る、不義の金儲は大に忌むべきである正當なる道を踏み正しき金を儲ける之は決して惡くない、斯くして得たる金こそ眞に光を放つ、眞價がある、ベーコンは常に云ふてをる「惡魔より來る金は急ぎ來る、神より來る金は跛で徐ろに來る」と即ち正當なる金は徐々として來るのである、實に此の正當にして跛を引きつゝ徐ろに來る金こそ善けれ、次に道德上貧者と富者とを比較して考へると同じ貧乏でも清貧と濁貧とある清貧は可い濁貧は不可ない顏回は清貧に甘んじて一簞の食一瓢の飯に甘んじて其の樂を改めなかつたとテふが之れは可い、されど借金で首が回らず人を踏み倒すは不可ない、人に迷惑をかけ社會に相手にされぬ如きは吾人は之れを稱して濁貧と云ふて大に忌む可きことである、金持が一概に惡いと云ふ譯ではない、所謂清富はよい、然しながら不義にして富む金持ち即ち濁富は不可ない、又濁貧の惡しきは尙ほ濁富の宜しからぬ樣なもので、一方に清貧の良きものなるを知らば他

方に清富の尊きをも知らねばならぬ、都て貧者と云はず富者と云はず共に清きを以て勝れりとなすで、今維摩は非常なる清富豪である、其の人の人格は如何にと云ふに高潔にして世の中から尊敬されたのであると云ふ事は前々申した通りである。

## 維摩の生活

維摩の日常生活は如何にと云ふに大乘的生活である、其の大乘的生活と云ふのは吾人が此の生活をするには世の中に無くてならぬものが三つある、曰く、智仁勇である、此の三つは神儒佛與に主張する所である、是れは何れも世に處する上に於て大切である、所謂三德兼備は容易からざることであると同時に又大切である、お爨どんが火を焚く上にも大切である、吾人日常の上にも政事家が政を執る上にも、必要である、國のよく治まるのは仁であつてよく治まる可く精勵するのが勇で斯くすれば治まると見究めるのが智である、今之れを下女の上に見るに下女が火吹竹をもつ上にも智あり仁あり勇ありで皆ある、お爨が如何にせば飯を甘く炊くことが出來るかと考ふるのは智であり、如何にせば主人を喜ばし得るやを考ふるのが仁で、炎暑堪え難き夏の日に當つて竈の前に蹲て火吹竹と奮闘するのは之れ勇にあらずして何んぞやである、此の三德をば佛教に



ては六に分つ、其の六とは即ち六波羅密である、之れは三德を積極と消極とに分つたものと見てよい、仁にも積極と消極との二方面があつて前者は即ちヤル方後者はラヤナイ方である、人の爲になることはヤル、之れ仁の積極的方面で佛教では布施と云ふのである、人の爲めにならぬ事はヤラナイ、之れ仁の消極的方面で佛教では持戒といふのである、其の布施と云ふのは施し惠むことで、天地宇宙自然の道理は皆是れ布施に非らざるはなしで、人の爲になる事は皆布施である、惡を止め善を修し防ぐ可きは防ぎ人として其の守る可き道を守り少しも之れを犯さず惡を止め非を防がん爲めにやる之れ持戒である、他を妨げるのはいけない善を修し惡を防ぎ守るは之れ仁の消極的態度である、次に勇にも亦此の二方面がある一旦緩急あらば義勇公に奉ずと云ふは積極的勇であつてこれは精進、人を無暗矢鱈に撲るやうな正しからざる勇を出さないこれが消極的方面で、忍辱である忍耐であるが、佛も「百千の敵に勝つを以て勇者なりとせず己れに勝つを以て勇者なりとす」と又大内青巒居士の歌に

たゞ忍べ人の人たるみちのくの
忍ぶの外に道あらめやは

とあるのは僅か三十一文字の中によく此の忍辱の道を示されてあると云はねばならぬ、されば佛も「忍の德たる持戒苦行も及ばざる所なり」と仰せられて、殊に此の忍と云ふことを勤められて居る、而して奮然として世豈に吾れを妨ぐるアルプスあらんやと向上奮鬪努力勉勵して行く處之れ勇の積極的態度であつて所謂精進である、最後に智に於ても又々二方面あり、心を落着けて散亂させない樣に妄念妄想を抑へて心鏡の如くにして行くのが智の消極的方面であつて所謂禪定である、かく心を一所に落着けて生じたのが正しき智慧で、明鏡の如く萬象の來つて其の影の映らざるなきは正しき智である、ジョン、フエルソン曰く腹の立つた時は一から十まで勘定して怒れ」と斯の如く詰らない智を抑へて正しき智を出す可きである、即ち禪と智とは大切である、今維摩居士は此の三德を兼備し大乘的生活をなし出家の如く山林に入り獨り坐禪するのでなくして、彼れは眷屬妻子はあり、家財もあるが、之れに囚はれて居るのでなく、三界を離脫し、丁度蓮の汚泥中にあつて立派な花を開くが如く、身は俗中にありながら心は佛と同じく、俗人と交りつゝ佛教を說き、市に行つては市に說き、學校に入つては學校に說き以て學生をして屈服せしめ、遊里に入つては遊里に說き、飯食居に入つては飯食店に說き、賭博場に入つては賭博場に說き、之れを濟



度し而も五欲六塵は眼を過ぐる浮雲の如し云々と云ふ風で、彼の太陽が塵箱の中をも照らす樣に行く處として說かざるなく、而も諸の邪道を受くるも其れが爲めに己れを損ぜず、佛法の正信を毀らない、到る處に正しき法を傳へ、一擧一動悉く人の模範とならざるなし、之れ實に其の正信の確乎たるので大乘教の大乘たる所以である、昔希臘のデオゲネスと云ふ人が酒肆姪舍の中を徘徊して居るのを、或る人が見て「之れ聖人と云はれ、哲學者と云はるゝ人達の入る所ではないじやないか」と云ふと、デオゲネスは笑つて曰く「哲學者だからと云ふて來るに何の不可がある、太陽は能く塵溜をも照らすではないか」と云ふたといふことがある、即ち汚なき所も淸き所も淸き人も汚なき人をも明鏡は照らす、維摩は此の如く淸淨なる明鏡の如き心を以て、世に處し照さざる所がなかつたのである、維摩の德望隆々たる斯の如きを以て一旦病氣とあれば見舞客は頗る多い國王、大臣、長者、居士、婆羅門、幷に王子及び餘の官屬等無量數千人の人々は皆往いて疾を問ふた、病氣見舞の事であるから誰も彼も先づ御自愛肝要とか、御身を大切にとかいふのは當然である、然るに維摩は其の來訪の客を捉へて大いに問答を吹掛ける、之れに就て維摩の十喩を擧げた

## 維摩の十喩

是身如聚沫――如泡――如焔――如芭蕉――如幻――如夢――如影――如響――
如浮雲――如電と之れは是れ身の無常なるを示したので古來之れを維摩の十喩と云ふて有名なものである、實に人間の身は浮ぶ泡沫の如く聚沫とて水を擊つて生ずるあるかなきかのしぶきのやうなものでさわることの出來るものでない、又泡の如く久しく立つ事の出來るものでなく、焔とて陽炎の如きもので實體のあるのでなく、又葉のみあつて幹なき芭蕉の如く中に堅實なる所なく又此の身は幻の如く眞にあるのではなく、夢の如く妄見に於てこそ有ると思ふて居るが覺めて見ればあるものではない、又影の如く、響の如く、又浮雲のあるかと思へば無く無きかと思へば有つて變幻生滅常たらざる如き、又電光の須臾にして明滅する如く、少時の間も住まるものではない、以上十喩は畢竟人間　身の頼りなきものなることを云ふて文學上有名なる喩へである、此の十喩を赤染衛門は和歌に依て其の意を示してをる、又明の謝康樂は十譬の詩を作てをる、常に變り易きは人の身、諸行無常頼みなきは世の習ひであ　、更に羅什は註の中に譬喩經中の佛が波斯匿王に說かれた面白い喩を引いて居る、曰く一人の旅客あり、曠野を行く途中にて惡象に遂はるゝ所となつた、彼怖れ走つて免るゝ所を求め、一の古井の傍に樹の根のあるを見て、其の根に縋つ



て井の中に潛むだが、下を見れば毒龍が口を開いて今將に我れを呑まんとして待ち其の上を見れば其力と頼む樹の根を黑白の二鼠が來て嚙み初め、四邊から四ツの毒蛇が來て其の人を螫さんとし、更に其の樹の枝に蜂の巢があつて樹の根の搖ぐにつれて其の蜂は散つて人を螫し、野火は來つて其の樹を燒く旅客は此の苦惱の中にあれども其の蜂の巢から五滴づゝの蜜の口中に墮ち來るのを嘗め樂んで身の苦中にあるを忘る之れ人生である」トルストイも「我が懺悔」と云ふ書物の中に此の譬喩を揭げて居る、其の曠野とは無明長夜の曠遠なるに喩へ、惡象は之れ無常の風に喩へ、井は生死にして樹の根は所謂人間の命にして生の根である、黑白の二鼠は晝夜に喩へ、根を嚙むは念々生滅にして晝夜となく時々刻々日月は經ちて死が近つく事で、四毒蛇は四大、峰は邪念、火は老病、毒龍は死而して五滴の蜜は五欲に譬へたのである、今は其の譬喩を以て吾人の死の念々近つくのも知らず甘き蜜に醉ひ樂み危きを知らず五欲六塵に汚れて居り老少不定何時かは死なねばならぬものであることを羅什が此の註の中に引いたのである、此の如く人生は儚なきものであるから、維摩は生死の問題を斷ち切つて死なない工夫をなすべきであると、斯く見舞人に問答をふきかけるから御身大切になぞと云ふて見舞に來た連中は大いに閉口して歸ると云ふ始末で

ある、之れで問疾者に對する維摩　說法は終つた即ち方便品は終つた、第一の佛國品では佛が毘耶離城で說法をして御座る狀況で、第二の方便品は今述べし如く維摩が疾に臥して居る狀況を示したので、之れより愈々弟子達をして見舞に使はし其の弟子達が維摩に呵責せらるゝ樣子を述べた弟子品に入るのである。

## 舍利弗と維摩

佛は佛弟子中智惠第一と云はれたる舍利弗に告げて汝維摩の處へ行つて疾を問へと仰せられた所が舍利弗は、佛に向て言ふのには、世尊よ、私はほかの人の病氣見舞ならば行きも致しまするけれども、維摩の許に詣つて疾を問ふの任に堪へません、たとへ世尊の命令たりとも此の儀のみは御辭退申しますと云ふた

何故に御辭退申したかと云ふに、維摩の處へ問疾に出掛ければ維摩の事であるから法門上の議論をするに相違ない、所が舍利弗は到底維摩の敵でないのである、曾て紅塵萬丈の都を避けて林中に於て靜かに樹下に宴坐して居つた、宴は安なりで坐禪をして居たことがある、其の時維摩が出て來て私に向て謂ふのに「汝何するものぞ必らずしも坐するのみが宴坐と云ふものではない、



只靜めるのには敢へて山中でなくとも市中でも何處でもよいではないか、何故山中に於てやるのか」と言はれた、此處が大乘小乘との區別を生ずる處である、舍利弗は小乘教徒であるから世の中の散亂を患ひて山中に隱れ自分の身心を修めやうとしたのである、故に維摩は之れを叱責して大乘無上の道理から言へば萬境は空であるから彼處此處と區別はないので、何處でもよい既に彼是區別がないならば修めやうとする身心も無いので、隨つて止めんとする散亂もない、されば山中へ隱れる必要はない、之れ大小二乘の見解の違ふ處である、延ひては兩人の見解の違ふところである、大燈國師の歌に

坐禪せば四條五條の橋の上
往き來の人を深山木に見て

とある、眞の坐禪をするならば山中に飛び込んで心を安んずるのが眞の坐禪でない、衣黃扇影の雜沓し花の馥郁たる心を迷はす四條五條の橋の上に立ちて、窈窕たる美人をも之れ山木なりと見て、而かも心を迷はされないと云ふのが本當の坐禪である、然しながら之れもよくない、天桂禪師は此の歌を作り換へて

坐禪せば四條五條の橋の上
往き來の人を其のまゝに見て

と云ふて居る、殊更に山木なりと見なくとも又骸骨などと見なくともよい生死に就ても古人

は雨霰雪や氷とへだつれど
溶くれば同じ谷川の水

と云ふてをる之れを

如何なれば雪や氷と隔つらん
溶けぬも同じ谷川の水

と云ふたが溶けても溶けなくとも同じ谷川の水と見るのが之れ大乘の眞實義である、かうは云はないけれども、此の理を維摩は喋々と說いて如何に坐禪すればとて佛になれるものではないと云ふた、然らば如何にしたならば眞の坐禪をすることが出來るかと云ふに佛の修行をするのには不捨道法で佛の教其のまゝにして凡夫事を現はす處が眞の坐禪である、「行亦禪坐亦禪語默動靜泰安然」である、山林中に在て宴坐ばかりしてをるのを坐禪と云ふのではないぞと維摩は之を叱責し



た、昔南岳の懷讓と云ふ人と馬祖道一と云ふ人との間に面白い話がある、馬祖が終日默々として坐禪して居つた、そこへ南岳が來て「汝は何が故に坐禪をするのであるか」と問ふた、馬祖はソコデ「佛になることを圖つて居るのである」と云ふと、南岳が一日瓦を持つて來てその坐禪して居る前で磨き出した、ソコデ此度は馬祖が問ふのに「瓦を磨いて何とするか」南岳答へて、「鏡とするのである」と、又馬祖が言ふのに「瓦を磨いて鏡とすることは出來まい」と云ふと、南岳は「坐禪して佛とならうと思て居るのも同じである」と言ふたといふ話があるが實に然りである、今舍利弗の如く山中に坐禪するばかりが佛になれると云ふ譯のものではない、算盤を彈ちき鍬鋤を持つて耕し道法を捨てずして凡夫の事を現はすのが眞の大乘的坐禪である。或る處に立派な御知識があつた。或る日のこと禪宗の一小僧が知識の許に至つて問答した、「如何なるか是佛法」と小僧が問ふた、和尚は待て〳〵と言ひつゝ庭にをり鍬を持つて裏の畑に行て「之れ即ち佛法なり」と答へた實に生きた佛法である、田畑を耕やす處其のまゝ之れ佛法なりと、小僧大いに感心して歸つて此の話を婆々に告げたところが返つて大に誹られた、汝の佛法は鋤鍬佛法と云ふもの行住坐臥これ佛法何ぞ殊更に庭に出て鋤鍬を手にするを用ひんと言はれた、然り喫茶喫飯是佛法である、道法

を捨てゝ凡夫事を現はさなければ眞の佛法は現はれない、夫故に此の理に習はなければならぬと維摩は舍利弗に向て一痛棒を下した。舍利弗は大に閉口したものゝ心を外界に住めず内に住めて居るからソコデ維摩居士は「心 不レ住レ内 亦 不レ在レ外」で心の内に住つて居るのも亦外に在るのも眞 宴坐ではないといふた、昔澤庵禪師が柳生但馬守に斯ういふ事を言ふたといふ話がある、劍術の時に御前は心を何處に置くか、柳生答へて敵の双の上に置くと言つた、敵の双の上に置く時は自分の方が粗末になる、之れではいかぬ、そこで柳生が然らば自己の双の上に心をおくといふた、敵の双の上に心をおけば敵の双ノ爲めに心を奪はれ、自己の双の上に心を置けば自己の双の爲めに心を奪はれる、柳生が然らば矢張り心を臍下丹田に置くものは又其れが爲めに心を奪はるゝから不可ない、然らば如何にすれば宜いかと云ふと、澤庵が心を何れにも置くこと勿れ、心を何れにも置かぬのは即ち敵と味方と諸共に我が心の中に在るので、心一切が自己の心となるが故に心を何處にも住むゝ事勿れと云ふ此大乘的意義を維摩は舍利弗に向つて話た、即ち維摩は舍利弗が小乘に執着して居るのを呵して大乘の眞意を現はさうとしたので、舍利弗大いに感服したことがある、そんな事情があるから今亦彼れが問疾に出掛けたならば又もや維摩の爲めに言ひ



籠められるゝならん、かくては佛弟子の面汚しともなるのであるから辭退した。

## 目蓮と維摩

ソコデ更に佛は目蓮に命ぜられる、スルト大目犍蓮も亦私も到底維摩の疾を問ふの資格はございませぬと申して辭退した、何故かと云ふに我れ曾て毘耶離の城中に於て居士達の爲めに說教をして居りました時に、維摩が參りまして、私に申しまするには、唯だ目蓮よ在家の居士の爲めに說法するには汝の如く說いては適當でない、夫れ法を說くには法の如くに說かねばならぬと云ひ出しました、之れが維摩が目蓮に對する總呵である、目蓮は說教するのに聽者の根機を見る事をせない、是れ故に大乘の根機に相當す可き居士に對して小乘の法を說いてをるので、教理の上から云へば大乘無相の理を說く可きに諄々として小乘有相の教を垂れて居る、佛法の根本原理たる眞如は玄妙にして口に言ふ可からざるものである、言詮不及意路不到で言ふに言はれず無一物中無盡藏花あり月あり樓臺ありで眞箇其の境に至るのには冷暖自知するの外なしと云ふ可きである此の境に至て始めて絕對第一義の眞如が分かる。

實相は無相で第一義の法の無相なることは言說に依つて示すことは出來ない、「說法者無說無示

其聽法者無聞無得」で無心にして說き無心にして聽く、而かも宇宙に充滿して居る、佛法は見聞覺知する事能はざる程充滿してをる、然るに目蓮には此の心なく徒らに無相の機に對して有相の法を說く、故に維摩の呵責を免れなかつた所以である、で目蓮は斯く詰られたこともあるのであるから任に堪へずとて辭退した。

## 迦葉と維摩

然らば大迦葉汝行ひて維摩の疾を問へと言はれると、之れ又辭退した、十大弟子中頭陀第一と云はるゝ迦葉が曾つて貧乏町を行乞して歩るいた時に、維摩が出て來て之れを呵したのである、迦葉自から考へるのに金持ちは前世に於て善根を修し今其の果報として富樂の境遇を得てをるのであるが、貧乏人は前世に於て惡い事をなし福を修めなかつたが爲めに、今其の果報によつて斯くミスボラシイ境遇を送てをるから、彼等を救ひ善根を植えしめん爲めに、今こゝに行乞した、然るに維摩は大いに呵責した、卽ち迦葉に言ふには大迦葉よ、汝の托鉢するはよいけれども貧富の區別を有する間はいけない、汝の心は慈悲あつて平等あることを知らない、富豪の町を棄てゝ貧里に於てのみ行乞するは之れ貧者に慈悲心あつて富者に慈悲心なきものである、貴といひ賤と



云ひ唯之れ僅かの差別のみである、悟て見れば富とし貧とす可きものはない、同じものである、何んで貧富平等の法に住して食を乞はざるやと呵した、來て是非を說く人は是非の人である、金儲けは嫌ひだと云ふ人はやはり幾何かの金が欲しい人であると菜根譚にもいふてあるが、之れ迷悟に囚はれて居る人である、夫故富貧の區別をするは不可ない、貧里であるから我心動かず富者の町は立派であるから我心之れに愛着するといふ樣ではいけない、思慮分別を絕してしまへば此の心の起る筈はない、平等大悲の法に住する事が出來るとて呵責せられた故に任に堪えずと辭退した。

## 須菩提と維摩

今度は須菩提の番となつた、佛は解空第一と云はるゝ須菩提に命ぜられたが我れも亦其の任に堪えずとて御辭退申した、其の理由とするところは種々とあるが、第一は貧者は自分の境遇が境遇であるから物を憐むの心同情心が厚い、之れに反して富者には此の心が薄い、今生に於て富豪を誇つても未來には貧苦を免るゝ事が出來ない、之れを憐んで先づ富者を救ふの考へを以て富里に入らんと決心した、次には彼れは解空第一と云はるゝ程で、決して迦葉の如くに見聞に依つて

心を動かさるゝことはないと云ふて果報の上よりかくの如き自信を以て居る故に、富里を托鉢中維摩の門に立つた、之れは大變面白い、迦葉は貧乏町を托鉢して叱られたが須菩提は之れと反對に富豪の町を歩いて終ひに維摩の宅の前に立つた、ソコデ維摩は直ちに須菩提の持つて居る鐵鉢を取つて之れに一杯飯を盛りて出て來て、まだ與へずに言ひかけた、汝抑も貧を棄てゝ富に就くは何故か先に迦葉の富を棄てゝ貧に就きたると其の行ひは正反對なれど其の心の平等ならざるは卽ち同じである。佛者の慈悲は須らく平等なる可し、然るに貧をすてゝ富に就くは平等ならずと大に叱責せられた、抑も平等の慈悲を以てする上には貧富の差別はない筈である、達觀し來れば萬法は同一相である、汝が空を解して居ると思ふのは大なる誤りである、解すと思ふ丈け本物ではない迷はぬと云ふ心もなくならなければ眞の空を解したるものではない、されば能く此の空を解して初めて食を求む可しと云ふた。

或る人が「夢さめて見れば恥し寢小便一と云ふて今迄は煩惱妄想の爲めに覆はれて居たが、其の迷の雲夢がさめて見れば誠に恥しい次第であると悟たと云ふ事がある、然るに此の人は此の悟りを鼻にかけて此の話題を萬丈和尙の下に提露したが「恥しと未だ夢覺めぬ寢ぼけ坊」で恥しいと



思ふ心がある中はまだ駄目である、本物ではない、特に汝は佛法を修行して悟たが他の人は未だ迷ふて居る杯と思ふ故に人間の差別が生ずる本性より見來れば同一平等である、自分に物を異れゝば功德が積めるなどと思ふのは邪正一如の考へがないのである、邪正は只人間の差別の話である、根本に至たつては生死も邪正も一如である、須菩提は我は佛を見、法を聞けり故に正しく功德も多きことと思ひ、外道は佛をも見ず法をも聞かざれば邪であるなどと邪を避け正に就く、卽ち差別の見を以て居て邪正一如の極處に徹底して居らない、實に第一義諦の中には佛の見る可きなく、法の聞く可きなし、邪正異なりとも其の性不二である、此の道理を知つて後始めて眞に空を解する事が出來るのである、僧正遍照の歌に「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何とて露を玉と欺く」といふのがあるが、これを或る人は「白露と玉と欺く欺かぬ、はちすは見るにまかせたりなん」と云ふことを云ふて居るとある、卽ち之れ人間の見方で欺いたと見るのは之れ人間の見方である、本當の見方は白露を欺く考へも蓮葉を欺く考へもない、之れ只人間の考へより見た迄で、本來そのものゝ上には正邪はない正邪の區別は人間がつけた迄である、此の如く維摩が須菩提に逆談せられた故に、須菩提は茫然として其の意のある所を知るに苦しみ、鉢を置いて逃げ

出さうとしたが、維摩は之れを引き止めて曰、、汝懼るゝ事勿れ、言語は之れ手段なれば其れ程懼るゝに足らず、言語も亦た之れ幻化にして實有にあらずと、文字も言說も性は空にして一切の繫縛をはなる、故に文字言說なりと雖も之れあることなし、之れ眞の解脫である、一切諸法此の如しと說いた、於茲二百の天子は卽空の理を見るの明を得た、以上の理由で須菩提は到底維摩の病氣を見舞に參る資格がないと申し述べた、此の如く次へ次へと十大弟子達に命ぜられたが皆各々其の理由を申し述べて見舞に行く人がない、此の理由が卽ち大小二乘の區別を明したものである。

此の經の大體をお話するに就て一言いふ可きことは、此の維摩居士は如何なる人物であると云ひますれば吾人の本心である、本來の心である。心の異名である、然るに斯樣な意を以て此の經を讀む人は世間尠ない、卽ち心を人格化して示したものである、三千年以前にかゝる居士が具體的に在つた譯でない、卽ち歷史的に實在した人でない之れは理想的の人物である、維摩と云ふ文字は梵語であつて之れを譯すれば淨名と云ひます、淨名は淨いことで卽ち本來淸淨なるものが淨である、無形のものに名けましたので所謂淨名とは吾人本來自性淸淨心を云ふたので卽ち維摩、



維摩は之れ我が自性淸淨心である、之れを人間として假りに出されたのが此の經の體裁である、是れは智覺大師が明言して御座る、故に此の經を讀むものは先づ此の心を以てして形に囚はれない樣に道理をよく見る可きである。

## 富樓那と維摩

サテ之れ迄は舍利弗目蓮大迦葉と順次に指名せられたが、上陳の如く各々其の任に堪へざる旨を申して辭退した、所で此度は佛十大弟子中雄辯家富樓那に命ぜられましたが、彼れ亦到底維摩問疾の資格はないと辭退した、其の理由は私曾て毘耶離に近き園林の中で新學の比丘達の爲めに說法して居た時に維摩が出て來て言ふには、富樓那よ汝の如く對者の根機を看取せず、徒らに說くとも何等の功かあらん、此の新學の比丘は旣に大乘の機根を有せり、然るに汝は今小乘の法を說くは盲滅法と云はねばならぬ、彼等新學の比丘は過去に於て大乘の資を養ふた立派なる機であつて、久しく大乘心を發して、中頃此の意を忘れて居たので、其の根源は皆佛性を具して居て悟りを開く人達である夫れ故に此等比丘に說法せんには心の根本を知らしめんとして說法すべきである、之れを話さんとするに就ては人間の心の作用を話すのが便利である、人間の心の作

用は一體何が本であるかと云ふに吾人の心には門がある、入口がある、之れを佛教では眼耳鼻舌身の五根と云ひまして之れを生理學では五官と云ふ、此の五官が其の對境とせる色聲香味觸の五境にふるゝ之れが心の入口即ち門である、眼は色を見耳は聲をきゝ鼻は香を嗅ぐ等、玆に於て心の作用の門をなすのである、佛教に於ては之れに就て議論がある、心の入口には五官があるが何が故に眼は上部に在り、舌が下方にあり耳が横に鼻が眞中に口が下にあるかと云ふに之に就ては理由がある、即ち一番近い處のもの外分らないものが下にある、今手に就て見るに堅いか軟いかは如何にして分るかと云ふに手近く持て來て手に觸れて始めて分かる、口が何故不味甘味が分るか、即ち口に入れ舌の上に載せて始めて分かる、所が鼻になれば香しき匂ひは遠く距つて居ても分かる、梅林を過ぐれば暗香浮動して遠くても かるが口の方は近かく持つて行かなければ分らぬものである、雪隱にて臭きは敢へて鼻頭に糞のあるに非らざるも臭ひ、此の如く鼻は近くなくとも分かる、耳に至つては鼻よりも一層遠き處のものが分かる、鐘が鳴ればハテ今は鐘が鳴るわいと遠く之れを聞く事が出來る、眼は更らに遠方のものが分る、行き暮したる旅の空、燈火のしたから人の聲が聞ゆる、即ち眼は最も遠くが分る眼耳を遠境と云ひ鼻舌身を近境と云ふのである、科學で



は前者を高級官能と云ひ後者を低級官能と云ふのである、之等の門より入り來るものを一と纏にするものが意である、即ち心である、眼で物を見、耳で聲を聞いた事どもを統一してかく〳〵斯樣のものであるとする之れ心の作用であつて、此の心の作用に二つあるのである、一を五倶意識と云ひ、二を獨頭意識と云ふのである、五倶意識とは眼耳等の五識と同時同刻に倶起並生して作用する意を云ふので、即ち眼で色を見耳で聲を聞くと云ふ樣に五根が五境に對して同時に起るのを五倶意識と云ふ、口で物を味ふに當ても又現在眼に物を見ることなく又耳に聲を聞くことなく唯昔の事を想像し、又未來永劫の事を推測するが如き心の作用を獨頭意識と云ふのである、手近く云へば夢を見る等のことは五識が全く休息して生ぜざる場合にのみ見るので之等は獨頭意識である、之れやはり心の作用である、然しながら此の意識は眞の心であるかと云ふに然らず、また此の奥に心がある、意識は心の受附けであつて心の主人公は即ち佛教で云ふ阿賴耶識である、阿賴耶とは漢譯して藏と云ふかのヒマラヤ山のヒマは雪の事でラヤは藏と云ふのである、即ち阿賴耶は一切萬物を開發す可き原因を攝藏する吾人精神の主人公である。受附が主人に向て直接自分の見聞覺知したものを告ぐるかと云ふに、然らず、まだ其の間に家扶がある之れを佛教では未那識（或に我見識

とも云ふ)、と云ふ之れを通じて阿賴耶主人に申し上げ、復た主人阿賴耶よりの命令は家扶なる末那識を通して受附なる意識に告ぐるのである、之れが次第に前五識に通じ眼は菊石を以て靨と見之れを又次第に取り次いで阿賴耶に通ずるのである、之れ皆心の作用である、更に之れを能く分る樣に云ひますれば諸君が今私の顏を見て話を聽いて御座る其の眼で見、耳で聞くにも其の見てをる聞いてをるなと思ふ心が無ければ駄目である、卽ち心此處に存せざれば聞けども聞かず、食ひて其の味ひを知り聞いて其の聲を知るのは之れ心が存するからである、其の今現在聞いて居るのであると思ふのが意識である、聞えて居るのは之れ既に言ふで他人でない、我が聞いて居るのであると思ふのが末那識である、又一歩を進めて云ふと我が確かに聞いて居るのに違ひないと云ふのを唯識では相分見分自證分證自證分と云ふのである、之を喩へば夫婦喧嘩の場合に野鑵を投げる底が凹む然しうまくは潰れない反て野鑵がヒョコ〳〵舞ひ躍つてをる、此の際には面白くとも怒り腹立て居る際であるから笑ふことが出來ない、ソコデ自分に怒り腹立てる時は如何にも笑へないぞと知るのは阿賴耶識である、之れ等は心の本體かと云ふに心の上に表はれたる現象に過ぎない其の現象を見る心の本體を眞如と云ひ本來清淨心と云ふのである、此の如く人には見聞覺知する



心があるが、其の奥底には人々皆眞如を有つてをる釋迦何人ぞ我れ何人ぞと云ふ聖凡一等である聖人と云はれた吾が中江藤樹先生は之れを心の主人公と云ふて居る、「日々心の奥の御主人、御對面之れあり候はゞ然る可く候」と或る人の問ひに對して答へたさうである。此の主人公を西洋の言葉で云へば眞我「ツルーセルフ」と云ふのである、此の眞我は一切衆生皆有つてをる處より佛敎では一切衆生悉有佛性と云ふ、其の眞我は尙ほ語を換へて云へば眞如とも佛性とも如來藏とも何とでも云ひ得る、此の眞如を吾人は皆有つて居つて朝な夕な抱いて寢ね抱いて起きて居るが、此の眞我を知らずに居る、今富樓那はやはり此の本心眞我を知らないから徒らに現象に就て說いた維摩は之れを知らしめんとした所で、富樓那は維摩の力の大なるを知て到底彼に參つて見舞ふの資格はないと遂に辭退したのである。

## 迦旃延と維摩

此度は十大弟子中解義第一と云はれて、敎理上の見解に於て最も優れたる迦旃延に命ぜられた所が彼れも亦御斷り申したのである、其の理由とする所は曾て佛が諸々の比丘の爲めに佛法の要

義を示されたことがある、後に我れ其の意を敷衍して說法した事がある、其の時に維摩に叱せられたのである。

凡そ佛法は無常苦空無我の有爲法と無爲法の寂滅とを說くのである、先きに佛が此の有爲無爲の法を說かれたのを迦旃延が之れを布衍した、現在の世は實に有爲轉變の世の中で一として有爲法ならざるはなく、世に有りと所有一切萬物は常と定まつたものあるのでなく、悉く變遷極りなく、咲く花も散る時あり、滿つる月も缺くる時がある、昔希臘のヘラクライトス「足を川中に投ずれば投じたる瞬間の水は是を上げる時の水でない」と言ふて居り、近頃有名な佛のベルグソンは此變化といふことに就て哲學を立てゝ居るので實に逝くものは其れ水の如しで流れ流れて片時も止まらず移り變り變遷無常定りないものであります、苦とは人間世の中の當相で忘想の世、涙の種苦の海である、生老病死を初めとして樂と云ふものはない又空も此の如く世の中の萬事萬物は悉く因緣假和合で、假の世である、夢幻の世である、之れを離れて別に實有のものゝある可きではない、元素を離なるれば一切皆空である、我も亦此の如く別に常一主宰のものゝあるべきでない、酸素とか炭素とか水素とかの元素が分散すれば何もない、今此處に野鑵がある此の野鑵は褐色とか金屬



とかカンと云ふ音などの種々分子が集まりて此處に一個の野鑵と現はれて居るので、野鑵と云ふ實物のある譯でない之れと同樣に我も別に常一主宰と云ふ定まつたものゝあるのでないと斯く迦旃延は諄々として說いて居たのである。處へ維摩が出て來て迦旃延よ汝は差別の見地より說くから世の中は苦であるが、根本第一義諦より云へば、即ち悟て見れば無爲寂滅である、寂滅とは平等一如である、悟れば凡てが平等一如である、苦であると云ふから樂もあり、黑と云ふから白いと云ふこともある、根本の土臺より見來れば何もない平等一如である、一體迷と云ふのはこれかあれかと思ひ迷ふて物を二つに見るから起るので、一つしかなければ迷ふことは出來ぬ、即ち人間は此の世は苦無常空無我等と物を二つ以上に見るから世が苦ともなり無常ともなる之れを平等一如と根底を徹見し、悟入するのが大乘無爲の法である、諸君が茶碗は汚ないとか淨いだとか云はれても土臺に遡つて見れば土瓶も茶碗も同じ土で作られ、因緣和合に依つて出來た、假りの相である、之れを根底より見れば平等一如無爲の法である、弘法大師の「いろは」四十八字の歌は世の中の諸行無常を詠つたものであつて無爲の悟に這入つた所である、即ち世の中の無常を一層解り易く歌たものである、之れ有爲法を無爲法としたのである、で要は迦旃延は有爲法のみを說

いて居たから、維摩は無爲法を說かしめんとした右の樣な次第であるから、我は到底維摩の病氣を見舞ひに行く資格はないとお辭り申した。

## 阿那律と維摩

佛は更に十大弟子中天眼第一と云はるゝ阿那律に命ぜられた、阿那律も亦辭退した、其の理由は曾て或る所に於て經行(キンヒン)をして居た時に、嚴淨と云ふ梵天王が萬の梵天と共に淨光明を放つて出て來て、阿那律に仁者の天眼では那の位な所が見えるかと問ひ、阿那律の天眼通と優劣を試したソコデ阿那律は我が天眼通を以て此の三千大千世界を見る事は掌中の菴摩勒果を見るやうであると答へた、菴摩勒果と云ふは菴摩羅と云ふ樹に出來る果實で、形は桃のやうなもので、其の味酸くして且つ甘ひと云ふことである、法の本來より見來れば、人天世界が此の掌中の菴摩勒果の如く見ゆると云ふた、時に維摩が出て來て阿那律に云ふには汝の天眼三千大千の世界を見ると掌中の菴摩勒果の如きは我れ之れを聽けり、其の天眼の見る處有相と爲すか無相と爲すか、見ることを得るものとすれば其れには限りあり、宇宙は實に無限なり、サー汝の天眼に見る所は此の有相の見によつて種々差別の相を取るか、無相の見によつて何等の相を分別せざるか、若し有相の見を以



てするならば之れ外道の天眼と同じことで決して貴ぶに足らない、若し又無相の見を以てするならば一切平等にして無爲、見るあることはない、世に眞に天眼通を有するものは佛のみである、汝の如きは未だ眞の天眼と云ふ可からずであると云ふた、ソコデ阿那律は答ふるに所を知らず、終に此の如く詰られたる故を以てお辭り申した。

## 優婆離と維摩

此度は十大弟子中持律第一と云はれたる優婆離に命ぜられた、優婆離も亦お辭り申した、其の理由とする所は、曾て私が坐禪をして居た時に或る二人の僧が佛の敎へられた戒律を犯して心に大いに愧ぢ我の處へ來て、吾等破戒の咎を免れさせて貰いたいと云ふた、ソコデ優婆離は諄々と佛の敎へ示された戒律に依つて二人の比丘の罪の輕重を決し、且つ罪障を消滅す可き懺悔の法を示したとへ罪障ありとも懺悔の心が一念起れば罪は消滅する由を告げて居た、ところへ維摩が出て來た、維摩は優婆離に向つて汝の說き方で見ると、反つて二人の比丘を迷はするものである、宜しく鏡に物の映ずるが如くに說く可しと云ふた、何ぜなれば此の二比丘は已に戒律を犯して懺悔の情頗る深いのである、之れに罪相を說けば益々其の罪を懼れて執着の心を生ぜしむるので、之れ

却つて罪を深からしむるのみである、何ぜ本體に入て罪性不可得の道理を說かざるか我れ汝に變つて說かんと維摩は比丘に向つて懺悔の道理を說き初めた。

凡そ懺悔の心の最も始めに起るのは、今日の語で云へば自己分裂である、自己が所謂二つに分かれる眞我と假我とである、之れが無ければ懺悔は起らない、喩へば酒呑が酒を呑んでは惡い、もう今日限り酒を飲むまいと思ふ、之れ飲むのも飲むまいと思ふのも皆我である、頭を無暗矢鱈に叩いては惡いと思ふのも、又叩いたのも己れである。之れを哲學的に云へば自己を客觀化して見ると、自己分裂するのである、卽ち自分の行た事と自分とを分離して考へて、自分の行た事は善かつたアー惡かつたと思ふ、其處に罪惡の自覺が起る、之れが卽ち懺悔心となるのである、此の心のあるのは人間自から救はるゝの道である、惡を爲して惡の何たるを知らざれば益々墮落するのである、天籟地籟寂として音なき靜夜、自分の事を種々と考へアー今迄は惡かつたと思ふのは罪惡の自覺である。サア酒飲むのは惡かつたと自覺すると、次に來るのが然らば酒はもう飲むまいと云ふのが懺悔である、而して今酒を飲むのは惡ひ飲むまいと誓つたのは枝末懺悔であつて其根本に入つて酒が飲めなくなるのを根本懺悔と云ふ、罪性の根本を究め罪性不可得の所に至つて眞に罪



を懺悔し了るのが根本懺悔である、之れに又人前懺悔と佛前懺悔とある、人を相手にして懺悔するのは未だ飾りがある、心の本性根底より懺悔するのは到底人の面前に於ては出來ない、罪惡の根本より拭ひ去り佛前に於ても人前に於ても少しも疚しき處なき時、之れが眞の根本懺悔である故に枝末懺悔を絕たんとするには根本懺悔を其の奧底より拭はなければならぬとの意を維摩は云ふた、故に優婆離の說く處の罪性懺悔は唯だ末にして本を究めない、故に斯く維摩に呵責せられた事があるから彼れは御辭退申したのである。

## 羅睺羅と維摩

此の度は佛が十大弟子中持戒第一と云はるゝ羅睺羅に命ぜられた、此の羅睺羅は御承知の通り佛と耶輸陀羅姫との間に出來た御實子であるが、後には出家して佛に從ひ戒律を守つて出家たるの實を擧げたお方である、此のお方も亦吾れ問疾の任に堪へずとて辭退せられた、其の理由は曾つて毘耶離の地に在つた時に、多くの長者の子が出て來て羅睺羅に向ひ、汝は佛の子なり佛其家を出てたまふの後は當然印度國王たる可き身進んでは世界の王となり得可き身を以て家を出でゝ佛道の爲めにする、抑も出家に何の利かあると問ふた、玆に於て羅睺羅は世の榮えは樂しと雖も、久

しく保つ可からず、出家の利は長く無爲を樂しむのであるから、世を捨てゝこそ眞の出家である
と其の功德を說き示したのである、時に維摩が出て來て羅睺羅に向ひ、出家の功德の利を說くの
は眞の出家でない、何等かの功德を得やうとして爲ることには有所得の念がある、かゝる心を以
て爲るやうでは眞の出家ではない。無レ利 無二功 德一是 爲二出 家一で出家は無爲の法を得んが爲め
である、昔梁の武帝が達磨大師に向て寺塔を建立し僧尼を供養す何の功德があるかと問ふた時に
達磨大師は無功德と喝破せられたと云ふ有名なる話がある、兎角功德を得やうと有所得心を以て
報酬的にやるのは眞に道の爲めにするのでない、又決して功德ある可き筈がない、太陽は日々赫
々として輝き水は滾々として流る之れ人間が別段お禮を言はなくともやつてをる、天地宇宙森羅
萬象悉く無功德にやつてをる、其の無功德にやつて居る處に無一物の處無盡藏で無として見る處
にあるのである、現在の世の中に於て罪惡ありと思ふても懺悔の心を以てすれば山に入らなくと
も悟り得らるゝのである、手に鍬鋤を採る處に阿耨多羅三藐三菩提を證することを得るのである
換言すれば在家の姿の此のまゝに出家の理あるを示したのである、ソコデ羅睺羅は斯く呵責せら
れたる事實もあることであるから、到底維摩の所に赴いて疾を問ふの資格はないとお斷り申した



のである。

## 阿難と維摩

此度は十大弟子中總持第一と云はるゝ阿難に命ぜられた、阿難は釋迦牟尼佛の從弟に當る方で
常に佛に侍して居られた、此のお方も亦到底維摩の處へ詣つて疾を問ふの資格はないと云ふて辭
退した、其の理由とするところは、曾て佛が少しく御病氣であつた時に、阿難は牛乳を差上げん
として早朝に鉢を持ち大婆羅門の家の前に立つて牛乳を請はれた時に維摩が道を過ぎて阿難に遇
ひ、サテ言ふのには、阿難よ、何が故に晨朝鉢を持して此處に住まるか、其時阿難は答へて、居
士よ世尊に少しく疾あり、當に牛乳を用ふ可し故に我れ來つて此處に至るといふと、維摩は止み
ね〳〵阿難よ、かゝる事を云ふ勿れ、如來の身は金剛の體、無量壽無病である、何んの病があり
何んの惱がある、佛の身は實に常住不壞不生不滅の法身であるぞ、金剛不壞身である、此の御身
に對して病ありなぞと云ふのは之れ佛を謗するのである、默つて去れ、異人をして此の語を聞か
しむる勿かれと云ひ佛身の講義を初めた、阿難は之れを聽きて慚愧の心を生じ、日頃佛に近かづき
つゝ佛說を謬り聽きつゝあるにあらずやと思ひ、將に歸らんとした時に、空中に聲あり「阿難よ維

摩の言の如く佛の身は法身で病ある可きでないが、今此の五濁惡世に出でゝ病あるを示し給ふは一切衆生を度脫せしめたまはんとするに外ならぬ、行て乳を貰ひ歩け、何んの慙る所あらん」と此時阿難は忽然として悟るところがあつた、右の次第であるから到底維摩に及ばぬ、左程の智慧辯才ある居士であるから、阿難は問疾の任に堪へずといふて辭退したとある、以上此の如く十大弟子を初め五百の大弟子皆其の困緣を擧げて維摩問疾の任に堪へざる旨を答へた、是等の弟子は聲聞とてまだ大乘の妙理に達せぬのであるから仕方なしとて更に之れよりは大乘の修行者たる菩薩方に對して維摩問疾を命ぜらるゝので之れが其の次の菩薩品である。

## 彌勒と維摩

小乘聲聞の弟子方は皆斷られたものであるから、佛は彌勒菩薩に命ぜられた、彌勒菩薩は之れ補處の菩薩であつて、佛滅後は佛に代て再び一切衆生を救濟す可き責任のある立派な彌勒菩薩である、然るに彌勒菩薩も亦御辭退申し上げた、其の理由とするところは、此の經中最も面倒困難なる處であつて、彌勒菩薩が未來に於て佛となつて衆生濟度をなさる御方である、此の人が其の昔兜率天及其眷屬の爲に不退轉地の行を說いて居つた時に、維摩と問答したことがある、此處は生



れ變つて人を救ふと云ふ生死の問題であるから困難である、要を取つて云へば、佛敎にては人間生死を說くは最も大切である、今日の場合最も興味あることと思ふ、人間死して何が遺るか、靈魂は一體何んなものか、之れ古からの一大問題である、人間が死ぬといふことは唯五尺の身體が無くなつてしまうといふことなら分りよい、今迄物言ひ動いて居た人が動かなくなり、物も言はず呼吸が止まつたのを死といふのである、ソコデ古人は云ふ、其身死しても靈が身から拔け出るのであると、恰度蟬の拔け殼の如くに思ひ靈魂は暖たかくフワ〳〵したものであると考へた、而して地獄極樂に生れ換るものと考へたのが古の人の考へである、佛敎は此の如く簡單なるものでない、佛敎では心を八ツに說く卽ち眼、耳、鼻、舌、身の五識と意識末那識阿賴耶識とであつて其の上大乘の極致たる密敎にては庵摩羅識を立てるのである、庵摩羅識とは通佛敎の見地より見れば眞如を云ふのである、華嚴では總該萬有心といふ、今日の語で云へば宇宙精神である、吾人が覺めて居る場合には心が皆働いてをる、寂然端座して居る時は五識の作用は休んでをつて意識のみ働いて居る、以上は覺めて居る時である、寢て居る時には夢を見る、此の夢は眠根耳根等五根が見るのではなく、末那識と意識とが見るのである、是れ吾人の腦の作用である、全く熟睡時に

は夢みることはない、夢みるのは曉方半睡狀態の時が多い、サーさうなると此處に問題が起る、吾人の心は無常暴流で、水の流の如く人間は朝早くより夜遲く迄、アーショウかコーショウかと色々グル〳〵と廻て居る、心が振動して行くのである、心が全く休息した時は寢た時である、寢た時は全く考へない、卽ち心の作用がピタリと止まつたので、一旦覺むれば又働き出す、然しながら心の働きがピタリと切れ止まるものならば、昨日の事は今日迄覺えて居る筈がない、トコロが之れを慥かに記憶して居る、其は何う云ふ理由かと云ふに、昨日の流れは止まつても昨日の心の流と今日の心の流とを續けてゆく處のものがある、其の續けて行くのが阿賴耶識である、今日の心理學の言葉で申せば潛在意識である、然れは人間生きてをる間は五根より阿賴耶識迄間斷なく繼續し働いて行く、而して死したる場合は如何と云ふに、死しても尙ほ續いて行くものは庵摩羅識卽ち眞如である、然らは其の現在の世より未來に向つて繫がれて行くのは何かと云ふに、是れ又庵摩羅識である、卽ち眞如である、心の上よりは庵摩羅識と云ひ、宇宙より云はゞ萬有心である、之れは生死に拘はらない、例へばコップ其物は損じ壞けて無くなつても、硝子其物は後に殘つて行く、之れ庵摩羅識である、而し之れが現在の行ひに由つて未來に殘つて行くのが佛敎で業卽ち英



語のアクションで働きである、現在人間が爲た業と云ふものは、小にせよ、大にせよ　其の人死しても決して消滅するものでない、葛城の慈雲尊者は、人間の仕事を爲ろは恰かも白紙に印形を捺すが如きものである、卽ち吾人の身體は印材である、其の中には黃楊も、水晶も、水牛もあらう、而し此等の印材を以て爲す以上は之れが潰れ壞けても、印形を捺した上は、決して消えない其の責任を負はなければならん、天地宇宙に於て行つた事は失せない、必らず業として殘つて行くのである、彌勒は此の生死問題に就いて兜率天王等に說いて居た、處が維摩は其れ以上の事を云い遂に問答の結果彌勒は敗を取つたのであるから今彼の許に詣つて疾を問ふの任に堪へずと云ふて辭退したのである。

## 光嚴と維摩

ソコデ佛は光嚴童子に命ぜられた、處が我亦彼れに詣て疾を問ふの任に堪へずとて御斷り申した、其の理由とする處は、私曾つて佛の御敎へに隨ひ、紅塵萬丈の巷では心が動てはいけないから、山中閑寂にして道を修むるに適當なる道場を得んとして毘耶離の大城を出て〻迦つて行くと毘耶離に入らんとする維摩に出會ふた、何れも知り合の事であるから、光嚴は何處から來たのか

と維摩に問ふと、維摩は道場より來たと答へた、之れ卽ち光嚴の求めんとするところであるから直ちに道場とは何んな處が是なるかと問ふた、ソコデ維摩は「直心是道場無虛假故」と答へた、直心とは心を修めて道に進み眞直にて亂れざる心、卽ち誠の心である、是れが道場である、世を捨てゝ山中に入つたとて此の心が無ければ眞に修道の場とすることは出來ない、我が誠心を主として萬行を場として道を修めて行けばこゝに眞の道場はある、卽ち直心是道場で る、これ、外に虛假なく、內に眞直なれば之れ萬行の本である、誠の心なければ海に山に辿り入つても道場はない、心此處に存すれば是れ道場、曷んぞ閑地を棄てゝ遠く空地を求めんやである、古へ某が山中閑寂の處を道場となして

仲々に山の奥こそ住みよけれ
草木は人の上を言はねば

と歌ふた、之れ閑寂の意味である、全く人の噂も聞かず世俗を脫却して山中に住するは樂みなるが、之れに返歌して

仲々に山の奥こそ住み憂けれ



草木は人の上をいはねば

と、之れを要するに喜憂の二方面がある、如何に山の奥に住むと雖も、其心無き時は心憂きもので心さへあればたとへ身は市巷にありても、住みよきものである、それであるから、汝の心を直くして誠の心を以て修道を求むれば、其が直心是道場であると云ふのである、弘法大師と一休和尙と面白き問答がある、弘法大師は一寸頑固であつて高野山の洞穴に這入つて入定し給ふた、何も洞內に入るの必要はない、デ一休和尙之れを冷笑して

弘法は虛空の定に入りもせで
心狹くも穴に入るかな

と云ふた、ソコデ弘法大師洞內より答へて

入りぬれば虛空も定もないものを
心せまくも穴と見るかな

と云ふた、やはり弘法大師は一休より偉い處がある、トカク心一つに依つて何んとでも見える、維摩は今光嚴が其の外境に着して其の心地を見ざるを咎めて、直心是道場無虛假故と早速說き伏し

た、光嚴はかゝる次第であるから私は到底維摩の所に到つて疾を問ふの資格は無いとお答へ申したのである。

## 持世と維摩

今度は持世菩薩に命ぜられた、所が持世菩薩も亦御辭退申した、其の理由とするところは、菩薩曾て物靜かなる樹下石上に靜坐修行して居た時に、惡魔波旬が嬋妍窈窕たる一萬二千の天女を從へ鼓を鳴らし樂を奏して絃歌し帝釋天の如き姿をして出て來た、而して菩薩の足下に禮拜し合掌恭敬して、前に立つて菩薩の修行して居るのをほめた、然るに帝釋天はこゝに從ふ一萬二千の天女我れに用なし、汝願はくば此の一萬二千の天女を受けて掃灑に備へ給へと云ふた、持世菩薩は修道の士である、豈かゝる天女を納れて何かせん、ソコデ答へてかゝる非法の物を以て我が出家沙門に要することなし、出家沙門には出家沙門の法がある、女人を近づけるは法でない、我が用ふ可きものでないといふて斷つた其の言まだ訖らざる中に、維摩が出て來たのである、ソコデ持世菩薩に向ひ、こゝに居るのは帝釋天にあらずして帝釋天の姿に化して出で來れる惡魔なり、此の惡魔が汝を繞圍して修行を邪魔し、心を亂さんとするのであると云ふた、維摩は斯く持世菩薩



を戒むると共に、魔に向て、此の天女等を我れに與へよ、我は白衣の一居士なり、諸女を受くるも何んの妨げかあらむと云ふた時、魔波旬は之れを拒むことも出來ず、大いに驚き懼れて、之れ維摩の我等を惱まさんとするなり、早く形を隱くすに如かずとて、自から姿を隱さんとしたが隱くす能はず、終に正體を現はされた、惡魔は頗る閉口した、ソコデ維摩は天女等に向つて語つていふには、汝等は見聞覺知五欲の樂に耽けるものである、是れ眞の快樂ではないぞ、眞の樂は物質上の樂みにあらずして、精神上の快樂にあるのである、されば汝等五欲六塵の樂を捨てゝ我れに從ひて道を求むる心を出せば、こゝに法樂あり、以て自から樂しむべしと諄々として說いた之れを聞たる天女等は、大いに感動して、心の上の法樂を得んとして、維摩の弟子たらんとし、道心を發した、所が惡魔波旬の方は少しも面白くない、茲に於て波旬は天女に向ひ我れ汝と俱に天宮に還らんと欲すと、彼等に還宮を勸めた、然るに天女は波旬に向ひ、妾達は今居士の說法を聽きて精神上の快樂、卽ち法樂を得んとして、維摩の許に居るものである、何うして天宮に還つて五欲の樂を得むことを望みましようやと云ふと、波旬は維摩に向つて强て天女等を還宮せしめん事を請ふたのである、維摩は之れに答へて、我已に捨つ汝便ち將ち去れ、將ち去らば此の事を傳へ

よ、傳へたば魔界は悉く佛の教へに歸するのである、然らば汝の願は具足するのである、サー將ち去れ、還つて魔宮にありと雖も、已に菩薩の燈を傳ふるを得たのである、されば此の無盡燈の法門を學び、之れを以て無數の天女をして道心を發さしめよ、之れ佛恩を報じて、大いに一切衆生を饒益するのであると云ふた、ソコデ天女等は此の維摩の說教を聽いて禮拜し、魔に隨て宮に還つて、忽然として姿を隱くした、維摩は此の如き自在の神力智慧辯才があるのであるから、到底私は詣つて其疾を問ふの資格はないとて持世菩薩はお斷り申した、如上言ふ處の惡魔波旬とは煩惱である、此の無量の煩惱が恐ろしき相を現して淸淨本心を惑亂せんとしたるに喩へしものである。

## 善德と維摩

此度は佛は長者子善德童子に告げて、維摩の疾を問へと仰せられた、此の善德は寶積等五百の長者の子の中の一人で、在家の菩薩であるが、矢張彼れの處に詣つて疾を問ふの任に堪へずとてお斷り申した、其理由とする處は、曾て彼の父が死したる爲めに父の家で大施餓鬼會を設けて、七日間一切の沙門及婆羅門諸々の外道乞食等に供養した事がある、此の供養の時には、門前に高



い幢 立てるのが印度の風習である、デ今善德も高い幢を立てゝ天下の人に告げて七日間家財を惜しまずして施餓鬼を營み、以て下賤孤獨の乞食等に施して居た、其の期の滿ちた時に維摩が出て來たのである、維摩は善德に向ひて、夫れ大施餓鬼會は汝が設くる所の如くなる可からず、抑も布施は六度の一であるが、此の施には二通ある法施と財施である、財施と云ふのは有形の物品を施すことで、此の財施はよいけれども一時的である、財施多しと雖も窮り盡くる事がある又精神上の利益となる事が少ない、之れに反して法施と云ふのは無形の精神上の施である、卽ち敎である、前後なく普く一切衆生に施す事が出來て盡くる事がない、今善德は財施のみを行ふて、法施を行はない、ソレ故に維摩は人を善道に導くならば當に精神的の法施の會を爲す可し、何んぞ物質的財施の會を用と爲さんといふたのである、かゝる次第であるから、我れは到底維摩の疾を問ふの資格はないとお斷り申した、以上の因緣一々が大乘の道理を示し偏執を打破して大圓眞理を示す手段で、先きの弟子品と此の菩薩品との中に維摩居士を假りて大乘の妙理を示されてあるので、理論整然として微に入り細を穿つのである、かく五百の大弟子三萬二千の菩薩方が、皆曾つて維摩の爲めに屈せられた事實を述べて任に堪へずとお斷り申したのであるが、誰も行かぬ

譯にはいかぬ、此に於て佛は終に三世通達智慧第一の文殊菩薩に命ぜられた、文殊が旨を奉じて維摩の處に至り佛意を述べて、疾を問ふのが第五の文殊師利問疾品で、此の經の骨子となり精華ともいふ可きは此の後にあるのである、玆に於て場面はガラリと變つて維摩方丈の場となる。

## 文殊の問疾

佛は文殊菩薩に告げて、汝行いて維摩の疾を問へと仰せられた、文殊　佛の命を受けて背くも本意ならずとて曰く、「彼の維摩は酬對を爲し難く深く實相に達し、善く法要を說く、辯才滯りなく、智慧無礙なり、一切菩薩の法式悉く知り諸佛の秘藏得入せざるなし、衆魔を降伏し、神通に遊戯し、其の慧方便皆已に得度す、然りと雖も、當に佛の聖旨を承く、彼に詣つて疾を問ふ可し」と困難を排していよ〳〵文殊菩薩が行く事になつた、サー大變一方は智慧自在の文殊菩薩、一方は辯才縱横の維摩居士との二大士が、共に談話を交換するのであるから、必らず甚深微妙の法を說くに相違ないと思ふて直ちに八千の菩薩五百の弟子等を初め、滿座の聽衆は皆此の問答を聽かんとして皆文殊菩薩の後に從ひ維摩の宅に押掛ける事となつた、ソコデ文殊菩薩は是等の人々に圍繞せられて、城外の菴羅樹園から維摩の居る所の毘耶離の大城に入つた、時に維摩は其れと早



くも見てとり、其の神通力を以て所有の床を取り片付け、其の室内を空うし、且諸々の侍者をも退け、唯一人四疊半に一の臥床を置いて其の上に臥して居る、ソコへ文殊は大衆等と共に入つて來た。維摩は先づ語を掛けて善く來た文殊よとやつて「不來相而來不見而見」と劈頭から妙な事を云ひ出した、文殊もさるもの直ちに答へて「如是居士若來已更不來若去已更不去所以者何來者無所從來去者無所至所可見者更不可見」とやつた、即ち此の來不來見不見は妄想であつて、維摩の方丈と佛の說法なさつて居る菴羅樹園とにかけて云ふたのである、實を云へば來不來見不見はない、菴羅に居つた文殊は當處に滅して方丈に至らず、假を云へば菴羅の文殊は滅せずして方丈に至る、故に見不見も亦之れと同じで、ツマリ來見して而も來見の相を絕してをる、本來より云へば來不來見不見を存しない、今は之れを讃して云ふたもので、之れが抑も龍虎相會の口始めである、これが哲學的教理の甚深の所で此の後の問答はさこそと思ひやらるゝのである、其の問答中には生死を論じ、病氣を論じ、又病氣見舞の法を論じ、彼此應酬、維摩の辯才眞に縱横、而して其の云ふ處は悉く之れ佛教の妙義である。

## 室内の不思議

かくて第六の不思議品に入り談は轉じて聽衆の方に及ぶ、抑も此の問答を聽かんとして詰めかけた數萬の大衆、維摩の室中空にして牀座なきも僅か方丈は四疊半の室、何んとしてか座し得可き、ソコデ人間知識を代表さしてある舍利弗と維摩と床座に就ての問答があつて、維摩は諄々と又說法を初め、終ひに神通力を現はして、彼の東方三十六恒河沙の國にまします佛須彌燈王如來より獅子の座を假り來つて大衆を維摩の室に入る、其の獅子座の高きこと八萬四千由旬ある、一由旬は支那の里數にして四十里我が國の六里强に當るのでそれが三萬二千であるから、非常に大きいと云ふのである、此の高く廣く立派なる獅子の座が四疊半の方丈の室に入つた、抑も之れが不思議である、此の一丈四方の所へ高さ八萬四千由旬もある獅子の座が三萬二千も入る筈がない、然るに其れが維摩の方丈に這入つた、ソコデ舍利弗が「斯の如き小室に如何にして如是高き廣き座を容るゝや」と維摩に問ふたとき、維摩は「諸佛解說の法問は、須彌を芥子の中に入れ四大海を一毛孔の中に納む」と云ふて、こゝに微妙の法を說く、蓋し此等は萬物相關の原理を說明したもので、宇宙の美諸佛解說の眞理は道の邊に咲く花にも置く露にも宿り、宇宙の妙理は机上の一點の塵にも現はるゝことを此の不思議の手品の中に說明したのである、福澤翁の話であるが、今



コツプが所を換へた、之れ何んでもないが今コツプが此處に置かれるのは地球の引力があるからである。之れがいま少し動いたのは地球の引力に少し影響を來したのである、太陽と地球とは非常に引力關係を以てをる、故にコツプが少し動けば動いたゞけ太陽なり地球なりに少しづゝ影響を來してをる、かの小遊星なり天王星海王星等八遊星も、皆地球なり太陽なりと何れも引力關係にあるのである、宇宙に有りと所有もの皆引力關係にありと云ふ可きである、夫故に今コツプは直に宇宙を動かすと云ふ事が出來る、之れ天地宇宙の理法である、之れを人生に云ふても面白い事がある、かのコロンブスが米國を發見したのは其の當時歐洲にては航海熱が盛んであつたによるのである、ソノ理由は歐洲人は肉食するものであるから肉食するものは胡椒とか山椒とか云ふ樣なものが必要である、然るに歐洲には、此等山椒胡椒は無い、皆是等は東洋より輸入するのである、東洋から西洋に輸入するには地中海を通過せなければならぬ、然るに地中海の海上權は土耳古が有つて居る、夫故こゝを通るには多大なる稅金を取られねばならない、歐洲人は之れを避けんが爲めに西弗利加の南岸喜望峰を迂廻して東洋に來らんとしコロンブスは地球が圓形をなすと云ふ原則から西に西にと航して米國を發見したのである、中古に於て支那人と羅馬人とは文明國

にして支那人は自から中華國民であると威張り、羅馬市民は偉い顔をなしたものである、而しながら羅馬の亡びたのは支那と何等の關係無いと云ふ譯ではない、支那は當時匈奴の侵來する頃であつて、漢は之れを追ひ、彼は此處を遁れて行く即ち匈奴は、フン人種であつて、此　人種が遠く遁るれば從つてゼルマン人種(羅馬國境の野蠻人種)が遁れ、不知不識の中にローマの方に行く夫故勢ひローマも亡ぶるのである、歴史も之れを地球の上より見る時には非常に興味あるもので鳥の目「バードアイ」を以て歴史を觀察するのは面白いものである、以上述べて來ました如く、一のものが天地間凡てのものと關係して居る、其の關係して居る有様を示さんが爲めに、維摩は芥子粒の中に須彌山を入ると云ふて居る、即ち一のものに天地間の眞理を包含するの意である、之れに就て面白い話がある、昔唐の李勃が歸宗寺の知常禪師の許に行つて、此の經の中に芥子に彌須を入れると云ふとは之れ不思議である、妄談ではないかといふと、禪師は曰く「李勃汝萬卷之書を讀むと然るか」、勃曰く「然り」、師曰く「讀み得て何れの處にある」、勃曰く「我が心にあり」、師曰「汝の心芥子より小なり尚ほよく萬卷の書を入るゝにあらずや」と李勃は、其の理に服したと云ふことである。

之を要するに須彌山は最も大なるもの、芥子は最も小なるもの最も小なるものゝ中に最も大な



るものを入れると云ふのであるから、方丈の一室に三萬二千の獅子座を入るゝよりも不思議のやうであるが、決して不思議ではない、又妄談でもない、此處が萬物一體萬物相關の大乘佛教の妙理であつて、其の本體より見れば異るものにあらずして一、其一體の上より云へば須彌も芥子も共に假相に過ぎずであるが、此の相關の上よりいへば共に與に相關し大は小に攝し、小は大に通じ、大小長短相容れて居る、此の甚深の理を示さんとして須彌と芥子の喩を持ち來たのである、然ればよく這般の消息を解せなければ、到底此の不思議解脫大乘の妙理を味ふことは出來ない。

## 病中の修養

如是この問疾品に於ては菩薩は本と病なし然るに衆生に病あるが故に病むと云ひ、菩薩の方便殺活自在興奪縱横なる不思議解脫に住する菩薩の御方便を示し、病中大に修養し慈悲心を養ふ可きなりと說いてある、話は理に落ちたが維摩經の文學の妙味は不思議の事象の中に幽遠の妙理を示すにあつて、譬喩が巧みに應用してある、之れより觀衆品に入り復た維摩と文殊との問答に移り、其の間に天女と舍利弗との問答を點綴して、談論に趣味あらしめ、以て一切の諸法悉く之〻解脫の相なる理を示し、萬綠叢中紅一點、文學的脚色頗る妙を究め、更に佛道品となつて文殊と維

摩との間に佛道通達に就いて問答あり、最後に佛教の根本原理なる不二の道理を說くのである、之れが即ち古來維摩經の骨子としてをる處で、下根のものを化するに必要なる品である。

## 不二の法

不二と云ふは二にして二ならざる天地の妙用で、吾等は何事も二つ以上に見て迷ふ、生と死と是と非と、善と惡と、美と醜と、長と短と相對して居るが、此の二元と二にあらず、二にあらずと雖も亦一にあらず、一にして一にあらず、二にして二にあらず、萬法相入で、一となるも、二を離れたる一にあらず、即ち平等にして差別、差別にして平等なる妙理を不二の法門と云ふので之れ佛法の至極根本原理である、例へば波と水との如く、波の本性を離れて水なく、水の本性を離れて波なく、波の本性水、水の本性波たるを見れば、水に起滅はない、不二である、又かの扇子の如き糊と竹と紙で扇子を成す、之れやはり不二である、此の二の不二なる道理之れ宇宙の妙用、佛法の眼目、大乘無相の道であり、此の經の骨子である。

此の第一義諦不二の法門は、之れ文殊問疾の立つる所である、サテ維摩は其の如何にして不二の法門に入る可きか、各々其の樂しむ所によつて之れを說けと菩薩方に云ふた、サー此の肝要緊



切の不二の玄旨を、三十二の菩薩方は之を如何に領得せしかと云ふに、結局見不見實非實に滯つて、不二の實相を認むる事は出來なかつた、然るに此の經の大立物たる文殊は之れを如何 解したか、維摩は文殊に向つて何等をか菩薩不二法門に入ると問ふた、ソコデ文殊は我が思ふ處によれば、不二の妙たる口言ふ能はず、一切の法に於て「無言無說無示無識」、と即ち言語道斷言詮不及意路不到の處が不二法門に入ると爲すと答へて、其の說く可き相を離れたるを示した、衆菩薩の言說する處、たゞ之れ一面、所謂月を指すの指のみ、其の眞意に至つては無言無說である、文殊は即ち之れを言ふたのである。

## 維摩の默

然らば之れに對する主人公たる維摩居士の見解は如何に、文殊は之れを維摩に問ふたが、維摩默然として語無しで、默つて何ともかとも言はなかつた、此の默然無言の意、大に研究す可きことである、文殊は言ふことはないと云ふたが、維摩は默つてをる、ソコデ文殊師利は歎じて言ふのに「善哉々々文字言語あることなし之れ眞に不二法門に入ると爲す」と實に維摩の一默聲雷の如し大千に振ふと云ふ可きである。

三十一菩薩の冗説多辯、文殊菩薩の無言無説と喋々説き來れるも、皆之れ言句に落ちて居る、今維摩の默然として言なき中に、宇宙の妙伏し、佛法の玄旨盡き、本經の主眼も之れに盡きてをる彼の沙石集にある山寺に四人の上人が維摩の默を學ばんとて無言の行を爲し、夜更けて燈の消えんとするに、下座の僧承仕火かきあげよといふ、並み座の僧、無言道場に物申す樣候はずといふ第二座の僧二人ともに物言ふこと餘りに心地あしく候と云ふ、上座の老僧樣はかはれども面々に物言ふこと淺ましくもどかしく覺えて、法師ばかりぞ物は申さぬといふて、打ち點頭けるとある上座の僧同樣に見るのは文殊の眞意を解したのではない、文殊は接化の手段として自から無言無説と言語を離るゝを云ひ、終ひに維摩をして此の一默を行せしめたのである、之れ天地宇宙不二の妙理を示してをる、禪宗に於ては文字を離れ直ちに其の根源に入つて維摩と對面する處に禪の深味あり、是れ禪の獨り擅にする處で、從容錄第四十八則碧巖錄第八十四則に共に維摩不二の話が擧げられて居る、眞に維摩の顏を見るもの夫れ唯禪か。

## 維摩と釋尊

次に香積品に入つて早や食事の時となつた、維摩又神通を現はして、飯を香積佛に請ひて、之



れを頒つの一段がある、之れが終つて場面は前に返つて佛菴羅樹園の説法場となり、此處へ文殊は維摩を伴ひ、佛前に來るの光景であつて、玆に於て暫らく佛と維摩と法身無相の見るべからざるの問答がある。

佛と維摩と問答の終りに佛は維摩の本處たる妙喜世界を明かし、大衆は之れを見んと欲した、ソコデ佛は乃ち之れを維摩に命ぜられた、維摩は乃ち神通を以て右手を以て妙喜世界を斷取して此の土に置くと云ふ不思議あつて法供食品に入りて此の經が結ばれてある。

## 維摩是れ何物ぞ

上來説く處の維摩はこれ何物ぞ、是れ吾人本來自性淸淨心のこと、此の心は澄まさずとも自から淨く磨かざれども自から瑩き淸淨心である、淨名は前述の如く維摩のこと、維摩は之れ即ち我が自性淸淨心である、吾人が唯迷ひ惑ふのも之れ維摩てふ本來淨心の迷ひ惑ふのである、是れに由つて之れを觀れば維摩と云ふて他に尋求す可きものでない、吾人が直ちに維摩であるから今吾人が日常營む處の業を孜々と働きつゝ此の自性淸淨心を失はざれば其處に何時も維摩は活躍してをるので、之れを徹見するのが此の經一卷の大意である。

地　籟

# 現實生活に於ける解脱の趣味

現實生活に於ける解脱の趣味といふ題を出して置いたがこれによつてむづかしい佛典の講釋をして解脱を説明しようとするのではなく、唯だ其の一斑を髣髴せしめて諸君と共に其の趣味の幾分を味はうとするに過ぎない、一體人の心には二の方向がありまして、内から外へ向ふものと外から内へ向ふものとあります、内から外へ向ふのは自由自在で何と考へようが何と思ふうが、誰れ一人苦情を申すものはありませんが、其自由な内から外へ向ふ心を制限し束縛するものは外から内へ向ふて來る經驗であります、内から外へ向ふのは往々空想に流れますが、堅實なる理想といふものも亦之れ内より外　向ふのです、外から内へ來るのは經驗によるのですからこれは確かなもの現實なものです。此の理想の方は無制限ですが、現實の方には制限があります、無制限な理想は制限ある現實に縛られて居るので、丁度繩で身體を縛られながら手足を動かしたいと思ふ



て居るのと同じやうなものです。此繩を解いて自由の境地を得る所に解脱はあるのですが、此の繩はなか〳〵解けない。此理想と現實との衝突の間に煩悶あり懊惱あるので理想のない人には煩悶はないといふてもよい位です。人間も子供の時代は只外界に順應し現實に生活して居るだけで別に理想といふほどのものがないから煩悶も少く悲哀も稀れですが、それが少し年をとつて多少理想とか何とかいふものが出來ると、こゝに悲哀を生じ苦痛を生む。暫く例を目前のことに取りますと、希望の不充實や、目的に對する努力の苦痛なぞで少からぬ悲哀を感じます。學生諸君が勞なくして試驗に及第したい又は優等になりたいといふのは希望ですが、さう甘くは行かぬ。これを行かさうとするには少からぬ努力が要る、目的は達したし努力はいやだといふ中にも煩悶はあり、商人が一攫千金を望むがなか〳〵得られない、といふ所にも懊惱はあり、殊に美しいのは戀＝青春燃ゆるが如き情熱を以て或る人を戀ふ、しかしそれが思ふやうにならぬ、こゝに非常な悲哀があり、終に一生を誤るやうなものを生ずる。併し是等の悲哀は其人自身にとつては痛切でありませうが、これを人生の事實の上から見ると今一層悲痛なものがあります、それはいふまでもなく生活の困難です、これは先きの戀愛のやうな浮いたものや美しいものではない、最も現實的

な如何にして食はんかの問題です、併しこれも食ふといふことだけならさう困難でない乞食をしても泥棒をしても食べるのですから實に易易たることです、飼ひ手のないのら犬でも、どうかかうかして死なずに食ふて行きます、食ふことは決してむづかしいことではない。唯だ理想に從つて生活せんとするから困難なのです、内から外に向ふ心に滿足を與へやうとするからむづかしいのです、人生字を知る憂患の始、理想が高ければ高いだけ、生活の困難はいよいよ加はるのです。唯だ現實の影を追ふてうか〳〵と暮らし、世の中は蝶々とまれかくもあれ的で居つては悲哀もなく、煩悶もないのですが、少しでも理想を以て立つて行かうとするには是非理想と現實との衝突といふ運命に遇ふ、それも青年時代はまだよろしいが、中年になり老年になると痛切にこれを感ずる、何故青年時代はよいかといふに此の時代は未だ準備の時代で多少現實が理想に適はぬ事があつても、前途の希望洋々として居るから、今はかうやつて居るが將來必らず此の理想を現實にする時があると思ふて居る、併しそれが中年になり老年になつて來ると事、志と違ふて霜鬢明朝又一年で、將來必ず……なぞいふことがあてにならなくなる。私は曾て「現實の悲哀」といふものを書いて其の間の消息を述べたことがあるが、實際中年といふものは非常に現實の悲哀を感ず



るもので、生活問題の苦痛といふことが切實に迫つて來る、妻もあれば子もあるそれに親もあるといふ風で一身に家庭の重荷を擔ふて、内には尙ほ幾分燃ゆるが如き理想追求の考があるのであるから、其の間の煩悶といふものは青年時代のやうな光あるものではない已むを得ず自己の理想を犧牲にして現實に甘んずるのであるが、青年時代の同輩が成功した話を聞いたりなぞする時には心の中に涙のないものはない、それから老年に近くに從つて生存の否定とでも申すやうな死の運命が次第に近づいて來るものであるから、こゝには亦老年の悲哀がある、自分は若いものに負けないつもりでも手足が思ふやうにならなくなる、肉體が精神の命令を奉じなく、我が影が次第に薄らぐといふのであるから、口には言はねど心には餘程の悲があるに違ひない、曾て洛東鳥邊野を過ぎてお俊傳兵衞の墓の前を通つた時、白髮の老媼の案内者が之は緣結びの神ですといふのを聽いて「それは若い中のことわしらはもうあかぬ」といふたのを耳にしたとき、此の短い句の中に無限の悲愁が籠つて居ると思ひました。兎に角人の一生は理想と現實との衝突史で、内より外に向ふ理想と外より内に向ふ現實との軋轢を免れないから胸中に悶々の情を醫すことが出來ない。此の衝突を調和統一して一の大なる理想に復歸せしむるのが宗教の力ではあるまいか、此の

宗教の力によつて人は現實の束縛を解脱してこゝに慰安を得るのではなからうか、抑も宗教とは如何なるものぞ。宗教とは何ぞやといふことは古來幾多の學者の頭腦を惱ました問題で、其の定義もいろ〳〵であるが、之れを要するに吾等の此の紛々擾々たる心に統一者を得せしめ、それによつて現實の繫縛から解脱するに外ならぬのです。古代の人類は子供の時代の如く外界に心を向け現實以外に心を向け現實以外に大なる理想を持て居らぬから其求むる所も現實のことで病を祈るとか風雨を祈とかいふので、神の數も多く求むる所も種々雜多であつたが、人智漸やく發達するに從ひて、個々の要求を統一したる一大要求に促され、個々の神を包容したる、一神を求むるといふことになり、初めは現實の要求に重きを置たものが、次第に理想との衝突に一道の慰安の境を求めんとし終に心内の統一を計り、其の統一せられたるものによつて生活を統一あらしめんとするやうな風になつたのではなからうか。兎に角、今日では宗教の精髓は之れを人心の秘奥に訪はなければならぬのであるから、私は暫く心内の統一といふやうなこと、更らに平易な語でいへば心の落ちつきといふやうなことで見ておかうと思ひます。一體心を一つの所に落ちつけると、他の一切の事から解脱することが出來るので、彼の大石良雄が祇園町で遊んで居つた時、薩摩の村



上喜劍といふ人が其の不心得を叱咤し啖を吐きかけたさうであるが、大石良雄はこれに對して少しも怒らず、却て其親切を喜んだといふのは何であらう、彼れは心の内に仇を打つといふことの外には何にもない、一切の外界から來ること又は心内に起るさま〳〵のことも仇討といふ一の大なる觀念を統一して居つたから如何に罵詈せらるゝとも以て其の心を動かすに足らず、泰然として罵詈から解脱して居たのではなからうか、人といふものは一事に專らになるときは他のことを忘れてしまう、よし忘るゝまでゞなくとも、それが爲めに心を動かさるゝことはない。併し仇討とか何とかいふ一つのことに心をつけて居つては、本望を遂げた後には其の心の主人を失ふことになる。そんな變ることのあるものでなく、何時も變らない而して能く一心を攝する絶對無限の一物の上に心を歸着せしめてこそ、全生活を通じて統一することが出來、萬事に對して解脱の地に居ることが出來るのである。今まで紛々擾々たりし心を此絶對無限の一物に歸着せしむるといふことが宗教の目的で、心理の狀態からいへば、こゝにコンバアションを得るのではなからうか、コンバアションといふのは悶々の心を轉じて新しき歸着を得せしむるので、禪語で云ふ所の心機一轉の境である、「南無」といふ語の一面には確かに此の意があるのであつて、心を佛に歸着

せしむるのである、元來南無といふ字は梵語でナマハ、巴利語でナモといふのださうで、又那謨とも那麻とも納謨とも書くので歸依とか歸命とか歸投とかいふ義があり、其の歸依といふに就ても歸命といふに就てもいろいろな義があつて諸宗諸派其の說明が違ふので、他力門では、歸命といふは如來の勅命にしたがひたてまつるなりとあつて、此のしたがふには憑むの意ありまかすの意あり、すがるの意があるといひ、天台では身命を佛の境界に歸すを歸命とし、又た命を盡くすとも悔なきを歸命といふとも取り、禪宗では歸はこれ還源の義、命根を以て本源に歸すとして一心の本源に歸着するのを南無として居る、詳しいことは別の話として大體からいへば吾等の我見我執を沒却して此の絕對無限の一物に歸投することである。これを客觀的に阿彌陀如來に向けるのと主觀的に我が心裏の奧底た　佛性の本源に置くのとが自力と他力との別であるが要は這箇の一物に歸投し一切の事象を此の源底に歸着せしめ、ここに懸崖に手を撒して絕後に復たび蘇へるの新生命を得るのである。他力門で往相廻向といふのは我より此絕對無限の一物たる佛に向ふので還相廻向といふのは一切を佛に任せて、こゝに現實生活に力を得て行くのであり、禪に於て退步却來といふのも、歸着すべき所を得て現實生活に解脫の境地を得るのであらう、これらは專門家



にはいろいろ込み入つた說明があらうが、暫くかういふ風に見る事が出來る、此の境地に入つて、曾つて現實に縛られたる吾等の繩は自由に解け萬事に對して執着のない事を得るのではなからうか。解脫といふのは自由自在の境地で涅槃經は「一切衆生、同じく佛性あつて本來解脫す、良心に執着を生ずるに由て妄りに自ら迷倒して諸の纏縛を受く、若し能く一念妄を反して眞に歸し縛を了すれば、縛なき時則ち諸佛如來と同一解脫にして差別あることなし」とある、十全健康な人には身體の上に執着がないが、齒が痛いとか何とかいふこれに執着して氣になつてたまらぬ、貧乏人は金のないのに執着して事毎に心を勞する、金が出來ると其の金が氣になつて心配を免れぬといふ風に囚はれて自由自在でなく、何か執着する所があつて解脫を得ない、これらは現實に囚はれたのだが中には現實を解脫したが、理想に囚はれて居るのがある、「事（現實）を執する元是れ迷、理（理想）に契ふも悟に非ず」と石頭希遷禪師の云はれた如く、現實だけは解脫しても理想に縛られて居つては鐵の鎖を解いて金の鎖で、縛られたやうなもので、自由でないといふことは一である。或る人が悟り顏に「夢さめて見れば恥かし寢小便」といふたを、萬丈和尙が今一關透過せざるものありとて「恥かしと未だ夢さめぬ寢惚坊」と大喝せられたのは能く這般の消息を說

明して居る。理想と現實とを別々に見て居る以上は未だ眞の解脫ではない、理想を現實にし、現實を理想化する上に、解脫の境はある。宗教の用は我より神に向ふだけではない更らに神より我れに反　する所に力があるので、此の神の力の中に生存して居る境涯が則ち光明裡の生活で自力でいへば解脫した生活、他力で云へば救濟せられた生活となる。これこの時宇宙には一枚、乾坤唯だ佛あるのみで他に執着すべきものもなければ拘泥すべきものもない、他人が何と云はうが、其の爲めに心を勞する用もなければ氣にかける必要もない。毀譽に超絶し褒貶に解脫し我れ我が守る所を行ふ、他人の褒貶や毀譽は我れと沒交渉だ我れ我が行ふところを行ふ、苦樂昇沈何があらん苦にあつても苦ならず、樂にあつても樂ならず、苦樂以外に自己存在の境地を置くことが出來てこそ初めて解脫の趣味は解せられる。吾等が巧妙な美術や文學に對した時、恍惚として我、吾を忘れる、これは一時的に解脫したものだ、一時的の解脫は烟の如くに消えるが、宗教的解脫は永久に吾我を忘れて相對差別の葛藤裡から超絶するのだ。これは部分的の解脫で見聞する所悉くには解脫することが出來ないのであるが、宗教の解脫宇宙全體に亘りて且つ永久性なものだ、此の無限絶對の一物と我との交通感應の中に解脫の妙はある、併し未だ交通感應といふことを自覺し



て居る間は眞の解脫でない。交通といひ感應といふ間には我れと佛との二がある、此の二つが一つになつて「唱ふれば我れも佛もなかりけり南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」の境には天地間唯だ南無阿彌陀佛あるのみ、我といひ佛といふ區別はない。魚の水中にあつて水と相忘れ鳥の空中に在て空と相忘るゝが如く、現實生活にあつて現實生活を忘れ、全く之れを理想化して其の理想たるをも忘るゝといふ境に至らねばならぬ、「波間無〻路路縱横」で「水鳥の行くもかへるもあとたへて、されども道は忘れざりけり」の自由のところにまで達せねばならぬのです、世法にあつて世法に着し佛法にあつて佛法に着するのは眞解脫の境でない、世法を食物に喩ふれば佛法は鹽だ、鹽なき食物の味なきを厭ひて鹽のみを食ふて居るのは間違だが鹽の辛きを厭ふて食物の味なきに安んじて居るのも間違だ、互に加減して其加減を忘れた所に妙はある、此の理を詳しく御話申せば面倒なことになるが、面倒なことが解脫じやない。自力で云ば一言一行佛作佛業となり、他力でいへば一擧一動佛恩報謝となつて行く中に解脫の趣味はある、農家の手にする鍬の中にも、佛法作業あり、商家の手にする算盤の中にも佛恩報謝の業は成つて日常行中解脫の趣味が存ずるに至らねばならぬ。どうすれば此の解脫の趣味を體することが出來るか、それは前に云ふたやうに心を絶對無限

の一物即ち佛に歸し歸投し歸命して、それによつて相對差別の境に動かさるゝなきに至る所に在るので、現實の生活は悉く相對差別で長と云へば短、黑と云へば白、賢と云へば愚、苦と云へば樂、健全と云へば病弱、聲名と思へば誹謗あり、成功と思へば失敗があるので人の一生は皆な差別相對の境に支配せられて居るのである。此の相對差別の親玉はと云へば生と死とである、生あるものには必ず死がある、生を望み死を厭ふ此心が抑々現實生活悲哀の本だ、若し能く、此の生死の根本をだに解脫することが出來れば他の紛々擾々たるものは快刀を以て亂麻を斷つ如く解脫することが出來るのである。されば宗教の眼目は此の生死の一大事因緣を決着するを要するが、是がなか〳〵解脫が出來ない、併し心を絕對無限の一境につけて生死海中、常住不變の水あることを看破し、身を佛の仰せに任して安立の地を得ることが出來、こゝに一心の決着を得て世に處し事を行ふて行けば、その間に解脫の趣味があるのである。香樹院語錄の中にコンナ話しがある。美濃のおせきといふ女が手桶さげて庭先を過ぐるのを見て、上人が「おせき極樂參りはどうぢや」と云はゝると、おせきはすかさずこのまゝでござりますと。此儘でござりますまで安心してこそ眞の解脫を得たものといふことが出來る。「圖畫當年愛洞庭、七十二峯波心青」理想の一境、山水明媚です



が、さて行つて見ると別段異つたことはない、「如今高臥想前事、添得廬公倚石廟」と雲寶のいふたやうに現實にすることが出來て趣味があるのではないか。悟つたとか悟らぬとかいふのも別のことではない、丁度、煙草を喫みつけた人の煙管の持ちやうと、喫みつけない人の持ちようと違ふ位なもので、喫みつけた人と喫みつけない人と何處といふて持ちようが違ふのではないが、何となく煙管と手とが離れ離れになつて落ちつかないが、喫みつけた人は不用意に持つても、ちやんと、煙管と手とが不二になつて居る、解脫の趣味を解した人の現實生活と解せない人の現實生活とが別に異つたわけではないが、此の一境に到らぬ人は理想と現實とが別れ〳〵になつて居るが、此の境を體得した人は理想と現實とが不二になつて居るといふことが出來る、吾等〳〵宗教の力によりて此の不二の境に到らねばならぬと思ふのです。以上の話で心は解脫の一境にかけて無碍自在になることが出來るが、併し此の身は矢張現實の繫縛の中にあるのだ、「世を捨てゝ身はなきものと思へども、雪の降る日は寒むくこそあれ」だ、そこで此の現實の缺陷に對しては何うして行くかといふことを究めて置かんと折角の解脫も何の役にも立たぬことになる。それには唯だ現在の小さな時間にのみ眼を止めず未來永久に達觀して理想を現實にするといふ方面に向ての努力を

忘れてはならぬ。佛の事業は濟世利民であつた、吾等も亦此の事業に力を盡くして行かねばならぬ。唯だ僅か目前のことだけを見るから失望もし落膽もするのだが長い時間を見ると吾等の社會といふものは漸次に理想に近づいて來たので、社會の進歩といふことは歩々理想の實現に向ふことだ。されば吾等も亦力を盡くして此の社會改良といふことに注目せねばならぬので、先きに現實の悲哀の中に尤も甚しきものとして擧げた生活難の問題も多くは社會組織の缺陷から出るので、今日社會主義者のいふ所を直に一から十まで實現することは出來ないが、歩一歩社會の制度を革新して現實の缺陷をして少からしむるといふことも亦此れ佛陀の理想を實現する所以に外ならぬ。君主獨裁の壓制の下にあつた歐洲の民は、何うして今日の自由を想ひ浮ばう、今日の如き自由は彼等の夢想であつた。併し今は實現出來た。松明や提灯に滿足して居つた時代には、誰か電氣燈、夜、晝の如きを思ひ浮ばう、旅行としいへば歩む外なしと思ふた古代民族が、何うして汽車電車の世を思ひ浮べやう、彼等は始んど夢想をもしなかつたが、今日は實現出來た、これ皆吾等より先に生れた人々の理想の實現に努力してくれた御庇である。今日資本と勞力との分配其宜しきを得ず、或るものは何の勞力なくして飽食し、或る者は額に汗して食ふに苦むといふやうな社會



組織も亦其の根底から改革せらるゝ時がないとは思はれない。眼は遠く未來際に注ぎて理想の實現を望み、足は近く現實の上に立て是を理想化して行くことを怠らず、衆生濟度の職責を双肩に擔ふて進んでさへ行けば苦しき現實生活の中にも無限の趣味があるではなからうか。此の問題に就ては更に深く云はねばならぬことがあるが、今は之れを略する。

# 靈覺の人か趣味の人か

靈覺は全精神の轉換、彼れが世相の觀察は覺前覺後に於て一大變化を呈し、煩悶の人は超脫の人となり、其の文藝に發露するに於て靈覺か趣味かに迷はしむ、曾て西行、頓阿、兼好等の歌人を傳して其の靈覺味を點檢せんとしたることあり。これ靈覺か、これ趣味か、左に掲ぐるものこれ、

## 西行法師

予曾て西都に遊び、東山に上る眞葛原頭風靜かに、長樂寺畔秋色深し、右折古庵あり、西行頓阿が夢を葬る、松杉鬱々、枯艸、憂を含み、また當年の歌人を想ふに似たり、落葉掃く老翁に昔の忍ばれて涙にくぼむ石の文字なる萬條の詩味を解し、徐ろにアービングが「ウエストミンスター」の古墳を訪へるを想ふ。彼れ記して曰く、

人の無窮に傳へらるゝは、大抵歴史の媒介に頼るなれば、物變り星移るに連れて、次第に朦朧暗淡に歸するを免かれず、獨り文學者が國人に於ける信仰は、常に清新快活且つ直接にして彼は自己の爲めよりは、寧ろ諸人の爲めに生存し、四邊の觀樂を犧牲と爲し、浮世の興を打捨て



ゝ後の人また末の世と語らむとて餘念なく一生を暮したりき、

西行も亦た後の人、末の世と語らむとて一生を暮したる骨をこの地に埋めしなり。この地を過ぎ此の墓を訪ふもの誰か又た彼の風流を想はざらん。

世を厭ふ名をだにもまたとめ置きてかすならぬ身のおもひ出にせん、

彼は明かに後の世と語らんとしたるなり、されど世は益々澆季となり、人は愈々俗に流れ、一人の彼が友たるなし悲ひ哉、

彼は田原藤太藤原秀郷の孫、孫左衛門尉康清の子、佐藤義清とて弓矢とつての强の者、血統いかめしき武夫なりしなり、勇敢にして射を善くし、頗る韜略に通ず、鳥羽上皇に仕へて北面の士たり、和歌を好む、上皇其の才を愛し玉ふ、而も彼れ榮利を喜ばず、名聞を好まず、會々鳥羽新宮成る、當時の歌人經信、匡房、基俊を召されて障子に描きたる繪を題として和歌を作らしめ玉ふや、彼れ卽坐に十首を勸めたるに御感斜めならず、朝日の御劍を賜はりしと、されど「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、唯戒及施放逸、今世後世爲伴侶」とて少しも心せず、前世如何なる緣のありけん、無常の感いと深く、或日、相親しき友佐藤左衛門憲康と宮を罷り出て明日の事と

も約し、翌朝まだきに同しく朝せんとて行き見れば、憲康の影は見えで哭聲のみ聞えし、彼如何にと問へば、憲康は死して十九になる妻、七十あまりの母の泣き悲むなりける、哀に覺て

こえぬれは又もその世にかへりこむ死出の山路そかなしかりける

とし月をいかてわか身におくりけんきのふ見し人けふはなき世に

彼の無常觀は層一層を進め、今はこの世にあるを懶く思ひて任を辭しけれども、上皇許し玉はぬに今度出家をとゞまり、また愛着の住處に歸りなばいつかは期すべき、悲のことよとて、

をしなへて物を思はぬ人にさへこゝろをつくるあきのはつ風

世のうさに一かたならすうかれゆくこゝろとゞめよ秋の夜の月

思ひ煩ふて家に歸れば、年頃いと愛しくおもひし四才 娘、父の歸りを喜び迎ふるを見て、出家を思ひ止りしもこのためなり、我が爲には出離の道を妨く惡魔ぞと、情けなくも椽より蹴落し、其の夜、嵯峨野に入り、僧となりける、

これより諸國を行脚し、鈴鹿山を超えては、

鈴鹿山うきよをよそに振りすてゝいかになりゆく我が身なるらん



と謳ひ、二見の浦に庵を結びては

おもひきや二見の浦の月を見てあけくれ袖になみかけんとは

鳴立つ澤の秋の暮、彼の涙脉は破れて、

心なき身にも哀は知られけり鳴たつ澤のあきのゆふぐれ

と吟じ、東、武藏野に笻を曳きて、をばなが露にやどる月、すゑこす風に玉ちりて、小萩かもとのむしの音いと心細き夜、昔し上皇に仕へし頃の知人に遇て終宵語りつくし

いかでわれきよく曇らぬ身となりてこゝろの月のかゝみがゝん

秋はたゞこよひばかりの名なりけりおなじ雲井に月はすめども

かくて東は白河の關をこへ、西に下りては、讃岐なる新院の御陵に詣でゝ懷舊の情禁じかね、

よしや君むかしの玉の床とてもかゝわらん後はなにゝかはせん

と一首の和歌を手向け、歸りて庵を洛東に結び常に

ねがはくば花のもとにてはるしなんそのきさらぎの望月のころ

と云ひつゝ建久元年二月十六日七十三にて寂しぬ、左近の中將、定家、菩提院の三位中將のもと

〈西行の死を申し遣しける奥に、

もち月のころはたがはぬそらなれどきえけん雲の行衛かなしも

と、左に二三の逸事を掲げて拙き文を補はむ、西行、天龍川を渡りける時、如何にしけん舟人共怒りて西行を鞭撻すること甚しく、この似非坊主よと罵りけれど、少しも顧みず、從僧のいと怒りければ、我は法の爲めにこゝに至る、凌辱、死に抵るも憾むる所にあらず、若し此の心なくんば剃髪せざるの優れるに如かずと云はれけるとなん、今の世、この覺悟あるものそれ幾許ぞ、西行鎌倉を過ぎける時、頼朝之を慕て延見しければ、已むなく赴きて武道の話は法師のなすべきことならずとて辭し去るに及び、頼朝其の風を慕ひ銀猫を贈りければ、受けて出で門前に戯るゝ兒童に與えて去りける、こは世の人の知る所なり。

西行と文覺との事に就ては、予曾て其の逸事を記す。

西行と文覺とは、同じ代の人なり、其性同じからず、其遁世の理も一ならぬば、相往來することもなく、荒法師文覺は常に西行を罵りて凡そ沙彌沙門たるもの道を修するをこそ主とすべきに、彼れ何者ぞ、天下を周遊して吟咏に日を送り、浮世を三十一文字に輕く送ること奇怪千萬



我若し彼に會するときは、一擧彼を打殺しくれん誠に佛門の賊なりと云ひ居りぬ。其後幾許もなく西行飄然と文覺を高雄の庵室に訪ひければ文覺大に喜び共に語りて夜を徹しぬ、翌日西行歸りければ、弟子ども文覺を詰りて師の坊さきには西行の頭打ちくれんとの玉ひつゝ、今其の音だに聞かぬは如何にぞと云ひければ、されば、我も初は然か思ひしが、西行の狀貌を見るにもとより我れに毆らるべきものにあらず、却て我を毆んとするなりと云ひしとぞ西行は決して涙のみの人にはあるざるなり。

## 頓阿法師

普光院の攝政、近來風體抄の中に、

かゝり幽玄に姿なだらかに、こと〳〵しくなくして、しかも敢て一かどめづらしく、當坐の感も有之にや。

と評されたる艸庵の頓阿は、藤原道長の末裔二階堂下野守光貞の子、俗名下總守貞宗といふ武夫なり、時はこれ親鸞寂後二十八年、日蓮逝て八星霜、世は血腥き風、吹き荒みて弓矢の聲、耳を絶たず、心あるも心なきも世の敢果なきを悲み、身は山に墨染の衣を纏ふもの少からず、佛法は

多くの人に誤解され、僧侶は干戈を手にするにあらずんば、厭世の理を唱ふる徒のみなりし、多情の少年貞宗此間に處し、心に佛法を味ひ、眼に現世の頼むべからざるを視る、名聞を尊ぶ封建社會、大義滅却せらるゝの今日、何ぞ涙の滂沱たらざるなきを得ん、彼は學と才とによつて一種の人生觀をなせり、此人生觀は彼をして其の名聞と恩愛とを斷離せしめたり、彼は此の世を觀て

とまらぬもことはりなれや浮世にはさくべき花のいろと見えねば

と云ひ、僧侶の腐敗を慨きて、

世をいとふ姿はかりはかるかやのみたれやすきはこゝろなりけり

と謳ひ、年二十四、彼は花の如き顏に破れ衣を纏ひ、飄然叡山に登りて修學の身となり、名を頓阿と改め、更に阿字不生の理を高野に尋ねたれと、聖道門の成就し難きを思ひ、淨土の門を叩きて良惠上人に謁し、眞宗院に詣でゝ西山の法義を享け、如法念佛を行ひ、了譽上人の上洛に遇ふては、鎭西流の義を學び、專ら心を佛敎の研究にゆだねられし、柳は綠、花の紅、彼はさまで浮世を厭はざりし、或る時は四條の道場に隱れ、靈山三室戸、仁和寺に去りにし人の跡を慕ひ、或時は一鉢一節足にまかせて去り、光景凄如、冷氣冽たる時、千古の名吟、彼が詩腸に入り、



月やとる澤田の面にふす鳴の氷よりたつ明けがたの空

なる高遠幽妙なる想を述べ、野徑寒艸に無限の感慨を寄せて、

霜かれの今や草葉のはてならんかきりは見えぬむさしのゝそら

とて荒凉の景を寫し、終に西行の跡を慕ひて、庵を双林寺に結び

あとしめて見ぬ世の春を忍ぶかなそのきさらきの花のした影

多情の法師一掬の涙を西行に灑ぎ、血にそみたる世を遁れ、淨土の境に赴きぬ、彼は歌を二條大納言爲世卿に學び、其奥義を極む、當時歌風亂れて其正しきを得ず、神聖を汚すの傾向ありければ、彼は老の身をも厭はで攝政良基と之を問答し、後の世の龜鑑となさんとて愚問賢註を著はしぬ、以て彼が斯道に忠なりしを知るべし、彼は爲明卿の後を享けて、新拾遺集を撰し、別に井蛙抄四卷、新續歌仙集二卷、家集草庵集あり、彼は實に歌學史上前期、後期の間にたちて非常に功ありし人なるを忘る可らず、歌の形と歌の調とに就ての巧拙は、吾人門外漢の知り得べき所にあらずと雖、唯だ彼の敬虔なる想に至ては、多く得易からざる人なるを知る、彼の調は流麗ならざるものあらん、彼の形は典雅ならざるものあらん、されど彼の想は他の企て及ぶべからざるの妙

あるたり、且つや彼の吟懐は毎に佛法を忘れず、殊に、

なかき夜の夢の枕はさめにけり鹿のそのふの秋のあらしに

とて鹿苑小乗の法にて、三界の煩悩を脱離したるを云ひ、

雲消てみどりにはるゝ空みればいろこそやがて空しかりけれ

と色不異空、空不異色、色即是空、空即是色の理を示し、

ことはりは藻に住む人もへたてぬとわれから迷ふこゝろなりけり

とて一切衆生悉具佛性、藻に住む虫とて變るなきを說き、更に己が心の修まらざるを嘆じて、

年をへてすますしるしもなかりけり野中の清水もとのこゝろは

とこれ一二のみ、以て彼が佛教に熱心なりしを知るに足らむ、長慶天皇の文中元年三月十一日落花と共に双林寺の庵室に寂す。年八十四、東山の花、幾度か開き、幾度か落つ、殘月老松に懸るの曉、朝露を踏むで此の庵を叩くの詩人、豈に無限の感慨なからんや、月語らず、花言はず、照て皎々、咲て爛熳、彼は成さず、彼は計らず、然も彼の名は日本史上忘るべからざるなり、今ま彼が逸事二三を揭て其傳を補はむ、徹書記物語云、或會に頓阿、六首の題をとりて見わたし



て所用ありて、小棚の下へ押入て置き、まかり出たる所に慶運が（同時代の歌人にて頓阿兼好淨辨と共に四天王と呼ばれたる人なり）六首とりたる題に皆なとりかへおきたるに、既に短冊かさぬる所へ頓阿歸り來りて見れば、悉く以前の題に非るに墨おしすりてさら〳〵と書て出しぬ、慶運申けるは、賢くそ我仕りたる、箇樣の時こそ堪能の程はあらはれぬべきと申ける、その六首の歌の中に、橋霜といふ題に、

山人の道のゆきゝのあともなし夜のまの霜のましをつきはし

など云ふ名吟ありしと、

私言（わたくしごと）に云ふ、慶運とて歌人なり、されど身の程や不肖なりけん毎に述懐のみせしが、新千載集に四首入られしかば、之を喜び撰者を九拜して感涙を流し侍りしが、頓阿が歌十餘首入りぬと聞て後日に吾歌を切出し侍るとかや、草庵集蒙求諺解には、此事を引きて頓阿法師の歌新千載集を考るに四首入なり、十餘首如何とあり、如何のものにや、左に彼の想と歌とを窺ふに尤も適當なる淨土の歌を擧ん、

淨土宗の心をよめる長歌

朝日の景、
山のたかねを、
夜半の月、
五十の春の、
いろ〳〵は、
まよひの里を、
かへるひと、
心のおくを、
かすかにて、
中々まよふ、
かそふれは、
山のさつをゝ、
むまれきて、

憂き世の闇に、
てらすには、
雲かくれにし、
華のひも、
八百萬にも、
立はてゝ、
かそへすよます、
たつぬれば、
外にもとめぬ、
たよりなれ、
ふたつの千事、
しらまゆみ、
澤田のうきに、

いてそめて、
鶴のはやしの、
わかれまて、
說おく法の、
あまりけん、
もとの悟に、
おほけれど、
忍ふの山路、
さとりこそ、
佛の御世を、
はやすきぬ、
末の御法に、
せく水の、



ふかき濁りに、
かなしけれ、
あすを待べき、
うきしつみ、
ほのうへてらす、
いかゝせむ、
悲ひなたらう、
ひらきしは、
いく世もしらす、
わすれ貝、
花さくのへの、
人のため、
たてしちかひの、

おほゝるゝ、
そもうつせみの、
身ならぬに、
おもひさためぬ、
いなずまの、
さてかた糸の、
にしへゆく、
十といつゝと、
つもりきく、
浪にくたけて、
つほすみれ、
わたす川瀬の、
末つゐに、

身の契りこそ、
よのなかは、
あみのうけ縄、
このまゝに、
光きへなは、
ひとすちに、
御法のかとを、
おもきとり、
うくれはやかて、
あともなく、
つみをかしある、
橋はしら、
まさしきさとり、

ひらけしそ、
さたまりにける、
唱ふれは、
涼しき風そ、
たくひてそ、
をもきいわほを、
帆をあけて、
彼の千里を、
難波なる、
かゝる御法を、
うつもれし、
只めのまへの、
おもひにて、

皆むまるべき、
かきりなる、
もゆる煙も、
吹かへて、
たからの國に、
つむふねも、
棹さすちから、
わたるそと、
みつの心も、
きゝてたに、
もとの心の、
取とりの、
つとむることは、

ことはりの、
ひと聲十聲、
さなからに、
ちりかふ花も、
うつりける、
風待へたる、
なけれとも、
しるより外は、
さらになし、
野中の清水、
ぬるけれど、
色音にうつる、
おこたれと、



おさめて捨ぬ、
てらされて、
深きいはれを、
立かへり、
心にとむる、
待へつゝ、
たへなる聲に、
闕をこへ、
月のみかほを、
程やなからん、

ことはりの、
佛もわれも、
しりぬれは、
何をかさらに、
むらさきの、
香をかくはしみ、
さそはれて、
やとる蓮も、
みむことも、

たゝぬひかりに、
へたてなき、
おろかなるとも、
うれふへき、
雲のむかへを、
いと竹の、
すてに浮世の、
ひらけなは、
おもへは今は、

## 兼好法師

崑玉集に、頓阿と兼好とを比較して、
兼好と頓阿と平生うたをよみしに景色の歌は頓阿まさりしかど、まことの佛心無常をよみしは

兼好にしくものあるべからず

と、この頓阿と兼好とは其の境遇も相似たるところありて、その交りも亦た尋常ならざりし、兼好の仁和寺の邊、ならびが岡に庵を結びて、

ちぎりおく花とならびの岡のへにあはれいく世の春をすぐさん

と詠みし風情は、頓阿が其の後、庵を小倉に結びて

おくら山、昔にかへる雁金のあしたにつゝくおもかけもなし

と吟ひたるに似て、共にあはれ深し、彼れ曾て米と錢とを頓阿に借らんとて、

よもすゝしねさめかきほのたまくらもまみても秋にへたてなきかぜ。

と云ひやりければ、頓阿米はなし、錢少しとて、

よるもうしねたく我せこはてはこすなをさりにだにしばし問ませ

と返しけると、清貧のさま想見するに足るべく、交情の密なりしも知らるべし、頓阿と兼好と、其の和歌に於ては優劣なかるべけれど、

日本文學に於ける功を云へば、兼好優に頓阿の上にあるべし、彼は頓阿と共に其先は藤原氏、後



卜部の姓を賜はり神祇伯となれり、父は兼名、三子あり、長は大僧正慈遍、次は從五位下民部大輔、兼雄、季は即ちこの兼好なるなり、幼より學を好み、其の家の專門なる神道は勿論、道、儒二教に心を凝め、本朝の古文に眼を曝し、三十七の頃なりけん、後宇多上皇の仙洞に召されて從五位の上、佐兵衛佐に補され瀧口にとの居して親しく玉體に咫尺し、忠勤怠りなかりしが、後、上皇政務を御讓りありし後、兼好の歌どもめされければ、喜びて

人しれず朽ち果てぬへき言の葉を天津空までかぜに散さん

と人にも云ひ遣りける、かくてある中、正中元年六月といふに法皇、御壽五十六歳を以て崩御ましましければ兼好、悲哀已む能はず、無常の感、禁すべからず、修學院に遁れ入りて髮を削り、俗の名のまゝ兼好法師と呼びて

身をかくす浮世の外はなけれどものがれしものは心なりけり

と、此時に當りて、世の中はます〳〵騷しくなり、冠履所をかへ、恐多くも一天萬乘の至尊は配所の月に泣かせらるゝに至り、上下安き心なし、兼好は飄然、諸國を歷遊し、大道廢れ、忠孝地を拂ふの慘狀を見る、のがれし心をしも遁れ了らしむる能はず、中納言資朝、藏人頭俊基等の鎌倉へ

下さるゝを聞き、

かたるへき友さいまれになるまゝにいとど昔の忍ばるゝかな

と詠みて憤慨の意を洩し、木曾に遊びて國守の專横を憤りて、

こゝもまた憂世なりけりよそながら思ひしまゝのやま里もがな

と懐を和歌に寄せ、心を正義に碎き、山深き庵尙ほ彼れをして安けき夢を結ぶ能はざらしめし、正平四年の頃、横川に上りて且崇院と云ふに住み、頓阿よりあづかれる和歌俊秘抄及び柿本秘式に讀方添て上りければ、權僧都の位階を賜はりけれど、再三固辭して受けず

水艸もきよきなかれとたどる身はみやことといへとちりの世の中

彼は實に誰やらが云ひし如く情澄み氣高く、世の紛々も沒すべからず、區々の情義も繫くべからず、一道の氣魂別に塵外に逸出して殆んど天をもつかんとする概ありしなり、同年五月の頃、彼は伊賀國橘成忠に招かれて田中の莊密乘院に赴きしが、七月の頃、光嚴帝よりの御召あり、さま〳〵辭ひたれど嚴命のがれ難く、また都にかへり院參して歴朝の故實ども申し上げ、天臺山觀を講じ終りて歌の御會ありしに、



いかなれば世をも心もすてし身のまたすてられぬしき島の道

と云へる一首を上りて叡感の餘り黄金十兩を賜はりしに受けず、伊賀國勝部郷の租税を宛て行はんと勅り給ひしも辭み、終には重ねて院參せざりしといふ、其清廉のさま想ひ見るべし、

都の塵の物憂く、旅の空のなつかしくて、西國行脚を思ひ立ち、播州に庵を結びしことありしも成忠の許より强て招かれければ、また伊賀に還り正平五年二月の初めふと病に罹り、典藥和氣清元の藥も辭みて受けず、同十五日といふに六十八歳を一期として圓寂し了ぬ。病中の咏に、

あるはなき世のならはしも忘られてをくるゝ身には夢かとぞ思ふ

彼の想も、彼の氣も三十一文字の中に髣髴たるを覺ゆ、

彼の歴史に印せる痕は何人も慕はぬものなけれど、後世稗史者流に誤られ、あはれにも此の法師は二の瑕瑾を加えられぬ、一は彼が瀧口に宿直せし頃、伊賀守成忠の娘、中宮の少辨と道ならぬ契を結ひしといふにて、他は彼が師直の爲めに艶書、かきたりといふことなり、されど、こは二つながら事實を誤れるものにて、本朝遯史などに「信一生之過錯也、可慨惜焉」と云へるも大なる過誤なるなり、さきの中宮少辨との事は、假ひ此の事ありとすとも俗にありし時の事とて、さ

まで咎むべくもあらず、且つ古人も、こは後宇多上皇が、兼好をして少辨か父成忠が許へ、屢ば内勅を下し玉ひし事實を誤れるなりと云へりければ深く論ふ要もなし、師直艶書の事、こも亦た室町の記に、師直、兼好にたのみて母が追福のため五十首の歌もよほせし事より誤りしものならん、且つや歴史上年月を照し合はせば、鹽谷高貞の殺されしは、延元三年にありて兼好年正に五十七、其時こそは伊賀の國にて寂寞の中に餘生を送りし時なれば、かゝることのあるぞとは思はれずと考證せらる。



# 人生餘裕なかるべからず

## 餘裕なき世態

昔の人が一日かゝつて歩いた途が一時間もかゝらずに行ける便利の世となつたにつれて、昔の人が二代も三代もかゝつてやつた仕事を一代の中に仕上げんとする人の心の燥急は、さなきだに人々の増殖や、交通の頻繁で、神經過敏になつた現代人を刺戟し、一體にイラ〳〵として少しの落ちつきなく、「これではいかぬ」「どうかせねばならぬ」と行詰りを感じつゝ、其の日〳〵の生活に追はれて心もとなくも其の生を送り、何れの社會にも不安に満ちつゝ、しかも無目的にあせりにあせつて居るのが今の世の狀態であるから、靜かに生を味ふといふ餘裕もなければ、徐ろに行くてを考へるといふ閑暇もなく、たゞ何者にか追はれて逃れ行くやうにかけ廻つて居る。

コンナ忙しい世の中に、どうして靜かに百年の大計を立て、徐ろに前途の進運を計ることが出來やう、人生に與へられたる多くの問題は未解決のまゝに次ぎから次ぎへと移つて不安と疑惧とに満ちつゝ、たゞヒタ走りに走る。其の行く所は何處であり、其の落ちつく先は何處であらう。

至言
○
天金言

私は今の人に少し餘裕をつくれといひたい。「必要は發明の母」で燥急の中にも發明は產れるであらうが、そは大抵其場限りの應急方法で決して永遠に人生を利するものではない。永遠の人生に寄與するものは皆な心に餘裕を保ちつゝ靜かに工夫せられたるものである。生活の困苦に應用せんとしては藝術家の作品も下るといふ況して人生百般の工夫、何者にか追ひ廻はされるやうな燥急な精神で何が出來るであらう。

## 生活の餘裕

物價は騰貴し、生活は向上し、何んぼ働いても〳〵足らぬ〳〵で追ひ廻はされて居るのが現時の多くの人々の燥急である。併し生活を低下して行けば多少の餘裕は出ないであらうか、上を見れば限りはないが、下を見ても限りはない。現代人は上を見ることを知つて、下を見ることを知らない。下を見ることを知らないから足らぬ〳〵に追ひ廻はされて、働けるだけ働き、儲けるだけ儲けんとして、焦りに焦り其の儲けたものは、直に生活に消費して、尙ほ足らざるを想ふのである。下を見て御覽なさい、我が生活に及ばざるものは澤山ある。澤山あることはあるが、彼等が社會から侮蔑せられ、輕賤せられて居るのを見ては、彼等の列に加はるを恥ぢて一歩をも高めんとす



る其の努力は向上の精神となり、發憤の氣風となつて、まことに結構なことであるが、其の爲めに心身を沮喪せしめて、物質生活以外、別に高尙なる精神生活あるを忘るゝのは愚の甚しきものではあるまいか。

## 物質生活と精神生活

金錢を多く費やさなければ生活の向上が出來ないと思うて居るのは現代人の弊、徒らに外見を衒つて食に佳肴を選び、衣に錦繡を用ひ、住に宏壯を誇り、其の爲めに苦慮も焦心して、齷齪として、心に平安なきは之れ我が爲めの生活を人の批判のために犧牲にし、世間の體裁を飾つて心中の悶々を增すものである。多くの金錢を費さずとも生を養ふの道はある。物質生活の重荷を輕減して精神生活の向上を計るは、生の趣味を豊かにする所以で汝の虛榮を去り、汝の物質的慾望を制せよ。そこに生活の餘裕はあり、精神の慰安はあらん。

物質生活の優勝を以て生活の向上となすは外見を以て內實を評し去らんとする世人の妄斷で、金殿玉樓に苦悶あり、賤が伏屋に平安あり、物質の慾望は得るに從つて更に多からんことを望みて、いよ〳〵得ていよ〳〵飽くなく、飽くなきが故に不平あり、既に得ては失はざらんと欲して

苦慮徒らに多いが、精神生活の安慰は無限に飽滿して他に奪はるゝの憂ひなく、心安立するが故に、業自ら進み、期せずして生活の向上せらるゝものがある。

## 時間の餘裕

日々夜々、寢ても、覺めても、心を勞するものは物質慾望であるから、これに驅らるゝものには時間の餘裕といふものがない。時間の餘裕なきが故に、自己、自ら自己を反省することなく、徒らに他に追はれて走り動く、これを以て自己は墮落し、人格は低劣に流る、吾等は時間に餘裕を作つて、靜かに世事と離れて自己を點檢せなければならぬ。一月に數日の閑を作り、一週に一日の閑を作り、乃至一日に數時の閑を作るも可、其の時は一切の人事を放擲して獨り自ら自己を味ふ、此靜坐瞑想の間、吾等の得る所は決して少くない。一見無用の如くにして、しかも人生最も有用のこと、今の人は無用の用を知らずして、却て有用の名の下に無用の時日を空費す。吾等は此無用の用に於て、物質生活以外の興趣を味ふの時間を作らねばならぬ。

## 如何に餘裕を作るべきか

雜然として世を送れば、人生一日の餘裕なく、漫然として生を立つれば、生活一錢の餘裕なし



餘裕は整理によつて生ず、輕重を考量し、本末を比較し、輕を去り末を除き、其の大本重要なるものによつて計を立つれば、省くべき冗費は自ら明かに節せらるべき時間も亦自ら生ずるのである。今の人は此整理すべきも、餘裕をも惜んで雜然漫然として時と金とを空費し、心に悶々の情あつて、しかも之れを除去するの計を立てないのである。整理は發展の第一歩、金錢能率も之れによつて發揮せられ、時間能率も之れによつて發揮せられ、無駄の費を除いて有效に、無用の時を轉じて有用に使用せらるゝのである。汝の家計を整理せよ。汝の日課を整理せよ。されば汝の生活を煩惱より脱し、汝の日々の焦心より餘裕を生み出さん。かくて吾等は此忙はしき人生に、落ちつきを得、此あせりにあせる世の中に安立の地を得ることが出來るのである。

人籟

小説

# 我が聞ける懺悔

左の一篇は予が多大の興味を以て聞ける某氏の懺悔談を骨子として小説體に叙述し曾て『靈光』と題して公にしたものである。無垢の一青年、心裡の慾望と外界の誘惑のために墮落して惡の惡たるを知らず、しかも一道の靈光、心に閃きて一轉して善の權化となる。小説としては平凡に結構としては陳套なるべけれど、日常平凡の此物語も亦靈覺に導くの助たるべきを想ふ。もとこれ文藝の作品にあらず、描寫盡さず説述足らず、論文の具體化としても不備多きを知るも、當時の感興今更ら棄て難く、凡夫覺の一經路。其の形式こそ異れ。世にはかゝる人のあるべきを髣髴せしむるを得ば幸ならんのみ。

（一）の一

『どうも、見たやうな女だ。』



見たには相違ない、さて何處で見たのであらう？親類中の娘達を考へて見たが思ひ當らぬ。友人の細君や妹を彼れか此れかと迦つたが似た風なのもない。汽車の中で遇つたのか、渡し船で乘り合せたのか、古き記憶に遡つたが想ひ出せない。毎日學校の往返に邂逅ふ女の中かと又思考を他の方面に向けて見た、けれども左樣でもない。併し確かに見覺えはある。唯だ見覺えのあるだけではなく、何となく親しげな氣もする、「鳥渡、聲をかけて見やうか」、此方が思ひ出せぬほどであるから、彼方が覺えて居る筈はない。少しでも覺えて居るなら先刻から、しげ〳〵見て居るのであるから默禮位はすべきだが、さういふ風もない。さあ解らぬ、いよ〳〵以て解らぬ。これが氣に掛つて書生の身には贅澤過ぎる歌舞伎座見物も、少しも氣が乘らぬ。誘つて呉れた人には濟まないが團十郎が出やうが、菊五郎が出やうが幕が、開かうが閉らうが、そんなことは少しも關せず頭腦は全く此問題の爲めにかき亂されて居るのである、それも其筈、疑問の主人公は直ぐ前の土間に居つて、時々後を向ひては益々疑團を深からしむるので、忘れやうとして四方を見ると島田髷、丸髷、桃割、蝶々、さま〳〵な女も居るが、いつか目は本へ戻り、「何處で見たのであらう」を繰返さしめる。

『どうだ、君、團十郎の松王ときては天下の絶品だね』

云はれて、フト舞臺を見ると、一番目は濟んで、中幕の「寺子屋」だつた。

『さうさ、巧いものだ。』

とは應へたが一向氣が乘らない。知人の細君はじれつたさうに、

『權さん、貴君どうかしてるのじやありませんか、茫乎して……』

『ナニ、別にどうもしませんが、少し考へごとを爲て居つたものですから……』

『何を考へていらしつたの、お母さんのことでも』

『ハア』

頭腦は矢張此疑團の爲めに占領せられて思ひ返す餘地もない。舞臺は今極感の所で、虚と云はゞ切付けん、實と云はゞ助けんと堅唾をのんでひかゆる源藏、松王は「ハッハハハ何のこれしきに性根呼はり、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か」と大音聲、「成田屋ア」「日本一」の聲は諸方より起つた。前の女は連れの男と何か話して居つたが、舞臺の松王が、「ムウこれや菅秀才の、首打たにまがひなし……」といふ拍子に

『オホ、、、』と笑ひ出した。癪に觸つたと見えて、芝居好きの細君が



『厭な女ねえ』

と啣つと、僕を誘つた高田君までが、

『五月蠅奴だ』

と相槌を打つた。何んだか自分が侮辱せられたやうな氣がしたが、此の機會を利用して、吾よりは世故に長けた此の人に疑問解決の緒を得やうと思つたので

『何者でせう？』

と試みた。

『何處の茶屋女だらう』

茶屋女？茶屋女？

『茶屋女て何です』

『ハッハ、村岸君は堅いから知らないね』

『知りませんとも』

『知らなくとも、今に覺えるよ。』

横合から細君が

『そんなことは覺えない方がよいんですわ、ねえ權さん』

『覺えなくともよいか惡いか解りませんが、云つて下さい』

『大層、熱心だねー、茶屋女の定義かさうさ矢張茶屋女だね』

『ホ、!と笑ひかけたが、僕が沸然としたのを見てとつて、

『良人、そんな戯言を仰やつちやあ、權さんがお怒りになりますよ、權さん、良人は何故こんなでせうーもう少し眞面目になつてくれますとね……、とんだ所で細君の愚痴を聞くものだと可笑しくなつたが、それより肝心の問題を他へ外されてはならない。

『奥さん、御存知でせう』

『私もよくは知りませんが、料理屋の女中衆のことでせう。』

彼れが料理屋の女中であらうか。

『女中でも彼んなに立派な服裝をするのでせうか』

細君はもう舞臺の方へ一心だつた。高田君は、



『さうさ、同じ女中でも君等の下宿や牛肉屋の女中とは違ふさ』

また一しきり「成田屋」「音羽屋」の聲が聞える。

例の女は色白の横顔を此方に見せて、花道の方を見つめて居る、どうも見たやうだ。何處で見たのであらう、疑問は依然として解決せられない。

## (一)の二

解らぬことを解らぬまゝにして置くことの出來ないのが僕の性質で、未だ頑是ない子供の頃にも拔き難き智惠の輪に飯時を忘れ、學校へ通うてからも解し難き宿題に夜を徹したことも少くないこれが一つの長所となつて勉學の上には非常な利便を得て居つたのであるが、今は此長所の爲めに困めらるゝこととはなつた。歌舞伎座の土間で見た女、どうも解らぬ。机に對して明日の課業の下た調をして居つても、學校へ出て講義を聽いて居つても、一念玆に及ぶと、白い頰や黑い髪はあり〳〵と我が前に現はれて其の解決を迫り、ホ、と笑つた聲は今尙ほ我が耳を去らぬ。これが戀といふものであらうか、併し少しも戀しいとも愛らしいとも思ひはせぬ。唯だ何處で遇つた女であらうといふ疑問をさへ解決すればよい、所がそれがなか〳〵解けないので、あの日以來不快

の日が續いた。

「村岸は此頃餘程變だ」と同級生の噂するのさへ耳に入るやうになつたが、他に云はるゝまでもない、自分ながら、餘程變だと思つて居る。

『君はあまり勉强が過ぎるから、身體を惡くしたのだ少し養生したまへ』

と親切にいうて呉れる者もあるが、勉强どころではない怠慢極るので、此頃は學校も休み勝ちだし、書籍もろく〳〵讀まない、笑ひたまふな。僕も亦こんなことに心を勞するの愚を知らないのではない、唯だ一人の母上に別れて遠く帝都に遊學して居るのはかゝる問題を專攻する爲めでない。修むる所は法律、志す所は大政治家たるにあるのだ。志す所こゝにあるが故に意氣頗る豪壯で、時に滿樽の綠酒を傾け盡くして當世を罵倒するの快を貪ることはあるが、膩粉の氣は我が顧る所にあらず、一意專心、權利を論じ義務を講じて居つたのだ、それが何ぞや、交際とはいへ婦女子の喜ぶ演劇を見る、これ既に墮落だ、其上、そこで見た女を疑問として焦心苦慮するとは痴の極、愚の極、村岸權六郎、男がすたる。よし、思想轉換の法を利用して忘れ去らんと、日頃愛誦せる英雄傳を出して見たが、英雄と女とがごつちやになつて、矢張忘れられない。郊外に散策



して烟霞に心を散ぜんとするが疑問は舊に依つて腦裏を去らぬ。こんなことをして無意義の煩悶に半月計りを過ごして終つたが、終に思想轉換の大事件が起つた。『ハハベウキスグカヘレ』此電報を讀み終ると共に、彈ぢかれた如くに起ち上つた。何の爲めに起ち上つたのか我れにも解らぬが、もう不歸の人になられたやうな氣がして「ベウキ」の三字と「スグカヘレ」の五字との中に字面以外の意味が含まれて居るのではなからうかと、考へても見たが、もとより字面通りに解釋するの外はない、早速歸國の途に就くことに定めて、囊中を探れば、未だ月の初で、かつ〳〵汽車賃だけはある。これから急げば終列車の間に合はぬことはなからうと思つたので、此由を下宿屋の主婦に告げた。

『それはどうも、とんだ事で』と云つた主婦の挨拶はかゝる場合に普通の挨拶だが、何だか吊詞でも述べられたやうに思はれて氣が氣でない。軈て來た俥に飛び乘つて、發車前二十分といふに上野へ着いた。待合所はいつもながらに人を以て埋められ、行く人、送る人、入り亂れて混雜一方ならぬが、我が腦裏は混雜はそれにも增して、越方行末のこと一時に群り起り、母上に萬一のことでもあれば、我は此後、如何に世に處せねばならぬであらう。賴るべきものとてはなき身の

浮世の荒波に漂はされつゝ能く當初の目的が達せらるゝであらうか、心は云ひ知らぬ寂寥に打たれて眼には涙の滂沱たるを止むることが出來ぬ。これ杞憂なり、母上は決して死にたまはじ、僅かの病氣も老の身の心細くて我れを呼び寄せたまふに外ならじと、自ら慰むるものゝ不安の念は未だ胸裏を去らぬ。

『御免ください』

茫然と人波の中に立つた我が横を艶なる女が過ぎた。フト目をつくれば、服裝こそ異れ忘れもせぬ例の女、何だか惡魔に襲はれたやうな氣がして、思はず戰慄したが、對者は見向きもせず雜踏の中に沒し去つた。日頃の疑問は閃に閃めく電光のやうに復活したが、今はそれどころではないそれどころではないが、心の奥では微かに例の疑ひを繰返して、彼の女と我とは何か深い因緣でもあつて、不可思議の力で結び合はされつゝあるのではなからうかとの妄想が低語がぬでもなかつた。

改札口は開かれた。汽笛は鳴つた、車は此煩悶の子を載せて動き出した。

（一）の三



母の病氣は急性肺炎で、一時は頗る危篤であつたが、其後の經過は餘り心配する方ではない。此狀態でゆけば二週間位で平常に復するであらうとは近村で名醫と云はるゝ何某學士の診斷だ。これで少しは安心して、留守中、世話になつたらしい隣りのお角婆さんに禮をいふた。この婆さんは惡氣のある人ではないが、少しのことでも大層に自慢をする癖があるので、何だか虫が好かない。

「ナニ別に世話といふほどのことを爲たでねえが無人だもんだでお醫者呼びにゆく、田吾作や太十に沙汰する……おまへさんの所へ電信打つ、皆な私が指圖しただ。」

そろ〳〵初まつたと思つたが、實際其通りに違ひない

「大層な御厄介でござりました」と頭を下げた。

「それにお竹(下女)どんでは、何かが解らないもんだで、昨日から此娘が付き切つて御世話を……行屆かないが……爲て居るだ」

此の娘といふたのは此婆さんの秘藏娘、名はお種、田舍では先づ容貌の美い方であるから、これも亦婆さんが自慢の種だつた、未だ二人が鼻汁を垂らして小學校に通ふた時分、僕が此の娘に石を

打ちつけたとやらで婆さんに怒鳴り込まれたことがあつた。それから少時遇はなかつたが、今度歸つて見ると、もう立派な娘さんだ

『種ちやん、それはえらい御世話で……有難うございました』

といふと彼女は顏を赤らめて羞かしさうに會釋する、なか〳〵以て當年の鼻汁垂しではなかつた僕も目を外らして隅の方に畏まつて居る作男に

『田吾作に太十、どうも御苦勞だつた』

と聲をかけて其場を紛らした。

『小旦那眞に早や御心配な事で……』

這輩は何時までも、小旦那というて居る、小旦那と云はれると、父上存生の時を想ひ出さずに居られない。維新の當時に逸早くも兩刀棄てゝ此村に歸農し、僅かの田地を作男に賴んで自身は村治の世話をなさつて、村の人達に先生先生と敬はれてゐさつた。いつも晩酌のお相手は僕で、おまへは武士の子だ、勉强して豪い者になれ、こんな片田舍の百姓の子と同じやうに心得てはならぬと仰やるのが口癖で、其度毎に太閤さんや正行の話をして下さつたものだが、今も目の前に見



えるやうだ、嗚呼、そ も十三年の昔、御自身は終に此村の土となられた。母の病氣は最早心配するに及ばぬ。明日は早く父の墓に詣でやうと、婆さん種ちやん作男等を還し、竹をも早く寢かして其夜は久方振りに母の側に待いて心だけの介抱をした。

都の喧噪には似ず鄙の夜は靜かであつた。

何處かに鷄の聲がする、今日も亦暖かに照らす春の日は微光を東の窓に洩らした、竹は疾くに起きたのであらう、臺所には、もう誰か來て居るやうだ、寐まいと思ひながら何時の間にかつひウト〳〵として寐過した重い瞼を拭つて出て行くと、田吾作は上り框で煙草を吸つて居た。

『ヤア早いねえ』

『これは小旦那、嘸お疲れでございませう……お竹どん、お洗面を——』

『それには及ばぬ。川へ行く』

手拭を提げてブラリと背戸から外へ出た。鍬をかたげた太十は、遠くから頰冠を除つて

『ヤツお早うございます……お母堂さんは……』

『別に異りもないやうだ』

『それは結構なことで』

と云つて臺所の方へ行つた、行つたかと思ふと早や田吾作との話聲が聞えて來る。

小川の水はいつもながらに清くしい、對岸の山は霞に罩まれて、隣りの梅には鶯が鳴いて居る。清冽な水で洗面すると心迄清々しくなつた。家へ戻つて見ると作男等は野良へ行つたのであらうもう居なかつた。朝餉を濟まして病床を見舞ふと母はスヤスヤと寐て居られる。其中に今日は昨日より美しい衣服を着て種ちやんが來た。

『大層お美裝しだね』

『アラ……』と顏を隱くした、ツイ小供の時のやうに思つて云ふたのだが、妙齡の婦人に對する語としては失敬であつた。

『恐つたの?』

『イヽエ』

『それではね、少し賴みたいことがあるのですが、聽いてくれませんか』

『どんな御用?』



首を傾けて

『出來ますことなら……』と付け加へた、

『ナニ難かしいことじやないんですが、僕、鳥渡、お父さんの墓參りに行つて來やうと思ふんですが、其間母を……』

皆なまで言はさずに

『そんな御用?、どうせ裁縫をして居ますのですから貴宅でさせていたゞいて居ればよいのですわ』

快く承諾して呉れた、

『それでは、何卒』と賴んで帽子片手に出かけるのを、種ちやんは追ひかけて來て、

『お羽織の襟が』と云ひながら、きまり惡るそうに正してくれた。

## (一)の四

追懷多き墓參を濟まして歸つて來た。母と種ちやんとは寫眞など取り出して話して居る。

『お母さん、もうそんな事をなさつてよいのですか』

『おまへの歸つたので安心したせいか、今日は餘程心持が快いから起き上て、お種さんに此箱を出して貰つて、おまへの子供の時からの寫眞を見て居たのさ』

『そんなら宜うございますが、あまり無理をなさつちやいけませんで……チョツト種ちやん、それは僕のだね』

『ハア……』

『腕白さうな顏をして居るねえ』

『今でもあんまり御變りなさらなくつてよ。』

『笑談云つちやいけない十二三の時と二十三になるものと同じで溜るものか』

『權さんは二十三なのねえ……小母さん權さんの近頃お寫しになつたのはなくて?』

『近頃は寫眞もさつぱり送つて呉れなくなりましたが、二三年前のが其處にありますよ』

『さう』と、種ちやんは箱の中を探し初めた。箱の中にはいろ〳〵なのがあつた、日光や松島の景色も、れば、今は亡くなつた母の姉妹のもあり、父の友達のもあれば、東京土產に貰つた大臣參議のもある、僕も興を催して一枚一枚見てゆく中、フト目につゐた丸髷の婦人、



『どうも見たやうな女だ』

頃日、歌舞伎座で見たのも、一昨日停車場で會つたのも此女に相違ない、寫眞の古びから考へると十數年前に寫したものと思はれるが、頃日見たのは廿一二、これも矢張其位である、イヤこれの方が少し老けて居るかも知れぬ。さあ解らぬ、一體此女は何者だらう?自分の憶えて居る叔母さんにはこんな人はなかつた筈だ

『お母さん、これは誰です?』

母は痩せ細つた手に寫眞を取り上げて

『これは卷だあね』

『卷て誰です?』

『お忘れかい、おまへの四歳の時に暇をやつた乳母の卷さ』

母上の話にかね〳〵聞て居る乳母といふのは此女であつたか、疑問は漸く解決の緒を得たやうである。曾て或る雜誌で記憶の再現といふことを見たが、それでは幼時の記憶が再現して彼の女をどうも見たやうだと思つたのであらう、それにしても、彼の女は乳母の血緣のものではたからう

か似たというても、あゝも似る理由がない、それとも全く他人の空似か、新たな疑ひが又起つて來た。

「それから乳母はどうしました」

「歸つてから二三年は能く手紙を寄こしたが、其後は全く音信不通で、何處に居るやら解らぬが何でも東京の方へ緣付いたといふ噂を聞いたことがあるが」

「その乳母には子がなかつたのですか」

「歸つてからのことは知らぬが、此家へ來る前に女の子が一人あつて、何でもおまへに二つ三つ年上だといふて居つた」

それ！それ！それに相違ないと聲を出さうとしたが、此處で云ふべきことでないやうな氣がしたので、話はこれで止めにした。

種ちやんは僕の寫眞を出して、

「權さん、これを戴いてゝよくツて？」

「つまらないぢやありませんか」



「つまらなかないわ、わたし……」と早や袂に入れた。母は

「おまへ、能くお種さんにお禮をお云ひよ、留守には何かと氣をつけて下さつて」

「アラ小母さん、ちつとも！」

禮をいふのは困らすやうに思はれたので、態と何にも云はなかつた。春晝靜かに母は眠りかけた。種ちやんは寫眞を片付けて居る。障子に鳥の影がさした。

「お種〳〵」お角婆さんの聲がする、

「權さんの家にばかり居らないで、チツト御歸りよ」

庭の外から怒鳴つた、種ちやんはあたふたと出て行つた。春晝の平和はその聲に破られて母の眠りも覺めたらしい。ソツト障子を開けて椽先へ出て見ると、尨犬の白は不思議さうに僕を見て居つたが、それでも憶えて居たと見えて尾を振りながら側へ來た。其顏は僕が墨黑々と眉をつけてやつた時と變りはない。白の頭を撫でながらそこらを見ると庭の松の木にも色々な紀念があり脊戸の柿の木にもさま〳〵な追想がある。母に手をひかれて野生の蘭の花香ばしき裏山へ上つた事や、乳母に連れられて野川に芹を摘んだことなぞが朧げに想ひ出される、乳母のことを想ひ出す

と先刻の寫眞が懐かしい、寫眞を思ふと忘れて居つた例の女の顔が目先にチラつく、獨斷ではあるが、問題は既に解決せられたのであるから、もう思ひ出すには及ばぬに、さりとては執拗にも我が心を去らぬ。戀か戀にあらず、されば何か、

座敷に女の聲がする、又種ちやんが來たのであらう。

（一）の五

我が村に小學校の校長を會長として、青年達が智識交換品性修養といふ定り文句を目的とした一の青年會があつて、冬は農事講習會なぞを開き村相應の効果を擧げて居た。僕の歸鄉が本會の顧問たる興禪院の滋然和尚から知れたものと見タて、二三日經つて村長の子息黒川信一といふが、青年會幹事の資格で母の見舞かた〳〵やつて來て、先日の墓參で歸鄉を知つた、就ては滞在中に一度青年會へ出席して、一場の演說をしてくれぬかといふのであつた。此の村から東京へ遊學して居るものと云へば、天にも地にも僕一人だつたから、村の青年等は外國からでも歸つて來たものゝやうに思うて居る。それでこんなことを賴むのであらう。よし、平生の抱負を吐露して彼等を驚かしくれんとは思つたが、先づ謙遜の態度で、



「なか〳〵以て演說なぞは出來ませんが、私も會員の末に加へて貰つて拜聽かた〳〵參りませう」といふと、

「勿論御入會は願はねばなりませんが、どうか一場の御話を願ひます、村には一人も高等の教育を受けたものがないのですから、貴君のやうな方に出て戴いて誘導してもらはねば私共も實に困ることがござりまするので……」といやに切口上だ。

小學校に居つた時分は二三級も下で、隨分泣かしたことのある男だが、今はなか〳〵生意氣で頭髮も綺麗に分けてピカ〳〵光る衣服を着て居る

「會員は何名位です？」

「青年というても全く教育のないのは入れませぬで、僅かに五十名足らずです」

五十名足らずに僕の抱負を聽かすのかと思へば、少々物足らぬ心地がする。

「會員だけにお話をするのですか」

「イヤ御高說を少數に聽かすのは惜しいといふので、會長とも相談いたしまして、興禪院の本堂を借り受け、公衆の傍聽を許すつもりです。」

これで滿足だ。

「公衆に聽かすやうな御話も出來ませんが……それでは明晩にでも」

「早速の御承引、一同も定めて喜ぶことでせう」と歸つて行た。

學校の練習では兩三回やつたことはあるが公開演說は之れが初めてだから、翌日は全く腹稿に賣して定刻に會場へ行つた。物珍らしい田舍のことゝて聽衆は早や堂に滿ちて居る。會長の開會の辭が濟み、それから湛然和尙の「人は生きて居りたい爲めに働くのぢやない、働く爲めに生きて居るのじや」などといふ、說敎然たる演說があつて次ぎは僕の番となつた。一體此村は敎育もない癖に、かういふことの流行る所で、ヒヤ〳〵ノーノー位はチヤンと心得て居る。で、僕が登壇すると拍手の聲は、諸方から起た。得意滿面、東洋の大勢を論じて日本の地位に及ぶといふ大袈裟な演題を擔ぎ出して雄辯滔々といふほどではないが、何しろ聲が大きいものだから聽衆は烟に捲かれて唯だ感心して居る。約二時間ばかり喋つて壇を下ると「えれへもんだ」「うまいもんだ」なぞの聲が聞える。

「村中第一の學者だ」と力むのは田吾作らしい。



控所に歸ると、村長の子息を初め會の役員達が

「御苦勞でござりました」と叮嚀に挨拶に來た。

「慣れないものですから思つたことの十分の一も云へませんで……」

「どう致しまして、まことに結構でござりました」といふのが師範學校出の若い校長で即ち本會の會長だ、

「今は何方の學校にお居になります」

「東洋法政學校」

「さうですか……何時御卒業で」

「本年は兎に角社會へ出られるつもりです」

「それは御目出度、私なぞも一度は東京へ出たいと思つて居るのですが未だ義務年限があるので田舍に燻つて居ります」

「イヤ東京だつて別に異つたことはありません、私なぞは却て田園生活の方が面白いと思ふのです。」

『田園生活といふと立派ですが、實は配流に遇つたやうなもので……イヤハヤ飛んだ愚痴を御聽かせ申しました。』

『配流になつたつもりで教育せられては生徒も耐りませんねアッハ〻〻〻』

笑ひに流したもの〻實は神聖なる教育事業に從事する人が、こんな考へでは國家の前途も思ひやられる、と心私かに慨嘆に堪えなかつた。

宅へ歸ると早や田吾作等の報知で、今日の成功を御存じと見えて母上は大層な御喜び、寒いであらうと種ちやんが來て雜煮を拵て置てくれたさうだ。其後四五日は尙ほ母の介抱をして居たが、今は全く恢復されたやうであるから、復び遊學の途に上ることにした、母上は「身體を大切に勉强してくれ」と仰り、お角婆さんは「留守の事は心配しなさんな」といひ、種ちやんは行李を整へてくれ、田吾作と太十とは五里の山路、荷物を持つて停車場まで送つて呉れた。村の者は皆な親切だつた。

## (二)の一

優勝劣敗の法は人の心の中にも行はる〻ものと見えて、青年會の演說に成功した僕は、最早未



來の空想の外には何もない。早く學校を卒業して、堂々と社會に立ち三寸の舌頭を以て國政の新に其名を轟かしたい。今の政治家なぞは過激一片、徒らに壯士的運動を事として、宇内の大勢を看取するの明がない。こんな盲目的行動で何が出來るものか、今に見よ村の青年會を驚かした技倆は、之れを天下に試みるの時があるのだ、さう思つて書を讀むものであるから、倦むこともなく撓むこともない。彼のしばらく頭腦を惱ましした女の問題の如きも、獨斷なる解決に甘んじて今は夢にも想ひ出さない、故鄕のことも母のことも全く忘れ果て〻一意專念に勉强したものだから、幸に卒業試驗は好成蹟で、教員も餘程望を囑したと見えて間もなく民權新聞の記者に周旋して呉れた。其頃の新聞記者は俸給は少いが、世間からは非常に重く見られて政治家といはる〻ほどのものは必らず何處かの社に筆を執つて居るものであつた。僕の入つたのは民間の一大勢力たる自由黨の機關で、諤々の論、侃々の筆、しば〳〵政府の忌避に觸れたが、それが又人氣に投じて發行停止が重なれば重なるほど發行紙數は增加する傾であつた。僕が初めて書いた藩閥政府滅亡論は頗る痛快を極めたものであつたから、主筆は大に此年少氣鋭の新入記者を優待して呉れ時には社說欄をも埋めさせ、政治上の集會などにもしば〳〵連れて行つて天下の名士に紹介して

吳れた、恁うなると、僕は既は一廉の政治家にでもなつたつもりで、黨の演說會にも出席し先輩諸氏に立交りて盛んに氣燄を吐いて居つた。青春湧くが如き血を以て最も名譽心を滿足せしめ易き政治運動をするほど面白いことはない。用もないに二人曳の俥を走らして名士の間を往來し、時には酒樓に上つて紅燈綠酒の中に天下の經綸を論ず、僕の得意、想ふべしだ。嗚呼、此の得意はいつまで續くであらう！　直に告ぐるものは財政の缺乏だ。何も御存じない母上を說得して僅かの貯蓄を取り出したが、そんなことで足るものではない、で終には高い利息の金も借りて見ることになる、借りて見るとこれはなか〳〵便利だ。かくて其年はどうかかうか。便利な借金で繰廻し、明くれば明治二十二年の一月、忘れもしない五日であつた。憲法發布の日も迫つて政治界は何となく色めいて來たので、我が社が發起となつて諸種の打合せを爲すべく新年宴會の名に於て在野の有志家を東臺の櫻川樓に招いた。會するもの百有餘名、宴醋にして慷慨淋漓たる數番の演說は幾度も拍手を繰返さしめたが、それも大略濟んで絃歌先づ一隅より起り坐は大分亂れて來た。

「村岸君、今日は沈默だね……オイ姐さん酒だ〳〵」



と早や千鳥足でやつて來たのがドリンカーと綽名のある同僚の中川渡だ、すかさず樓婢が

「ヘイ御酌」と德利を取るを遮つて僕に向ひ、

「これは僕が飲むんじゃない、此好男子に、さあ君、大に飲むべしだ」

「貴君、御酌」と向き直つた姐さん、と見ればこれだ、例のだ、記憶は復活せざるを得ない。我にもあらず杯持つ手がブル〳〵と慄へた。

「貴君、どうか遊ばして……」

「ナニ姐さんに見とれたのさ」

堅いと云はれた權六郎、何時の間に、こんなことを覺えたのであらう、女は嫣然として、

「どうせさうでせうよ」と不得要領だ。

「全く」

何が全くだ、これも不得要領だ。

「たんと、お調弄なさい、どうせ……」

「イヤ全く僕は姐さんを見たことがある」

『アラ私も御目にかゝつたやうに存じて居ります』
これは少し怪しい。
『何處でしたか知ら?』と付加へた。隨分狡猾ないひ方だ、此方はそんなことに頓着なく
『歌舞伎座で、去年の春』
女は思ひ出したやうに
『あの成田屋が寺小屋をした時、さうでしたねえ』と如何にも憶えて居るやうに調子を合はす、
これを眞實だと思つたのだから助からない。其處へ中川が
『大分話が好況ね、お春さん』と口を出した。
『ハヽア姐さんの名はお春さんといふのかい』
『云ふのかもないもんだ、まゝ緩くり話したまへ、我輩が居ては邪魔だ』
中川は立たんとして女の方へヒヨロ〳〵と、倚りかゝつた。
『ひどいわねえ』と樓婢は眉を顰め微笑を僕に洩らして起つて行つた。これが實に墮落の第一歩
深所へ陷る源だつたのである。



## (二)の二

學びの窓では書籍は讀んだが世間は讀まなかつた。空論は教へられたが人情は習はなかつた。
實際世に立つて見ると、いろ〳〵な混み入つたことがあつてなか〳〵容易じやない。一躍政海に
身を投じた上は直に大政治家となれるやうに思つたが、政黨内にも諸種の情實があつて識見がな
くとも金力のあるものは上位を占むるし、學問がなくとも世才に長けたものは重んぜらるゝ世の
中だから、驅け出しの僕等は到底志を伸ぶるの餘地がない。志未だ伸ぶるに足らずして借金は早
や我身に肉薄して來た、人生、眞に意の如くならずで、得意の時代は夢の如くに消て今は全く失
意となり、むしやくしやして堪らないから酒を飲で自ら慰めんと、しば〳〵「櫻川」に遊びお春
さんの酌で漸く悶々の情を醫した。一度が二度、二度が三度となると、互に心安くなつていろ〳〵
な話をする。話をして見ると、どうも乳母の娘らしい。幼時から母に別れて他人の手で育つたか
ら詳しいことは解らないが、實母の名が卷であつたといふことは覺えて居るといふ。世間には隨
分同名異人もあり、殊に卷といふ女の名は有觸れて居るから一概にさうとは定められぬが僕自身
は乳母の娘としてお春さんを好遇した。お春さんは何と思うて居るか知らないが、僕は戀といふ

やうな下等な考でお春さんを愛するのではない、聊か乳母が哺育の恩に酬ゆる積りで、頼まれもせぬのに小使を與つたり、偶には反物の一つも買つてやつたこともある。社の同僚等はいろんな事をいふて冷評すが、僕はお春さんとの交際は潔白だと信じて居る。潔白と自信して居るが二三日遇はないと遇ひたくなる。遇へば何となく愉快だ。愉快だから又出掛ける、そんなこんなで、さなきだに增して來る借金はいよ〳〵累むばかりで、終には進退谷るの狀態となつた。今まで「先生」「先生」といふて金の無心に來た壯士連も來なくなるし、政友にはさま〴〵な忠告を受ける、政友といふものは結構なもので親切らしく忠告はして呉れるが金を貸しては呉れない。四面皆な楚歌の聲で何だか肩身が狹くなつたやうながする、高利貸の方は何の斟酌もたく責めたてる。社へ出れば社へ、下宿に歸れば下宿へ、朝から晩まで借金の斷りに日も亦足らずだ、それにもと〳〵債權者は故郷の田地や家屋を目的に貸したのだから、もう東京で工面が出來ないと思ふと、差押を執行すぞと嚇す、そんなことにされては村中第一の學者が面目玉を潰す次第であるから、何とか防禦の策を講ぜねばならぬ、嗚呼、金が欲しい！餓えたるものは食を選ばず、渴するものは水を選ばず、どんな金でもよいとさへ思ふやうになつた。



「ヤア今日は珍らしく宅に居るね」

案内もなく入つて來のは中川渡、霜降の背廣服に肥太とした體を包むで

「選擧期が近づいて政治界も大分面白くなつて來たね」

未來の大政治家も、今はそこどころではない。

「さうさねえ」と一向氣が乘らない。中川は得意然と葉卷を吹かしながら

「君の如き年少有爲の士が新聞社なぞにへばり付いて此の機會を利用しないのは迂といふべしだ、僕の如き老朽のものでさへ、斷然社を退いて選擧運動に參加することにした」

氣焰中るべからずだ。こんな男が選擧なぞと心可笑しく思つたが、

「君も代議士に起つ積りか」

「戯談云つちやいけない、天下何れの處にか僕なぞを選擧する白痴があらう、僕は或る男の選擧を助けるのさ」

「其位なことに何にも社を辭するに及ばぬじやないか」

「イ、ヤそうぢやない僕の助けんとするのは社の主義と反對だ」

「ヤアそれでは君はこれまでの主張を棄てるのか」
と少し急き込むでも、對手は平然と
「棄てる棄てぬもあるものか、もと〳〵僕は糊口の爲めに彼の社に入つたので主義の爲めといふ理由ではない。君考へて見たまへ、僕だつて二十や三十の端た金に縛られて進退の自由まで奪はれるやうな愚人でもあるまいじやないか、かういふと失敬だが、君なぞは若いから世間の裏面を知るまいが、自由主義で立つて居る黨の領袖連にも隨分怪しいのがあつて、内々政府から運動費を貰つて、表面は矢張立派に自由黨で居るものもあるさ」
「オイ〳〵、君が社を退くのは君の自由だが、其爲めに黨　領袖を惡口するのはよくないじやないか」
「ナニ惡口するのだじやない事實を報道するのだ、君、今日の帝政新聞を見たか」
「否」
「それだ　それだから話にならない、まあこれを見たまへ」とポケットから一葉の新紙を出して
「これだもの君」



「此新聞のいふことなぞがあてになるものか、揑造、揑造、」
「揑造なら揑造にして置きたまへ、今に解かることがあるから、兎に角君や僕等のやうな陣笠連は大將達の好き自由にこき使はれて彼等が金儲の提灯持をして居るやうなものさ」
云はれて見ると思ひ中る節もないではない、中川は語を繼で、
「割前でも呉れゝば提灯持もおつなものだが、成功すれば後足に砂で、殘つたものは世間から正義の士なぞと云はれるが、實は馬鹿の骨頂さ。君は我が黨といふが、我が黨が議會に多數を制せらるゝ見込があるではなし、要する所は多數の厭制で、我が黨の主張なぞは少しも通るものではない、通るものでないと見え透ひて居るに義理を立てゝ目前の利を逸するは策の得たるものではなからう、君だつて今有福といふではなし、僕の連帶してやつた件だつて、もう疾く　期限は過ぎて居るのだから、こゝ一つ思案を變へて僕の運動を助けてくれてはどうだ」
ハハア此奴、僕を買收に來たのだな、金は欲しいが、名譽は重い。
「中川君、君は僕を變節させようといふんだね、これでも僕は名譽を貴ぶからねえ」

『怒つたねアッハ、、、、君は主義を變ずるのを不名譽のやうに思つて居るが、君が自由黨の陣笠になつて何程の名譽がある。僕等の運動を助けて成功して見たまへ、君の名は却て高くなるが強いて現在のやうなことをやつて居れば君は借金の爲めに社會から葬らるゝより外はない。僕は君の爲めを思うて此一擧兩得の策を献ずるのだ、君、能く考へて見たまへ、大政治家は須く大膽なるべし君のやうに小心翼々として何にが出來るかアッハアッハハ』

僕の心は惑はざるを得なかつた。大政治家は須く大膽なるべし、成る程僕のやうに小心ではいかぬ。

『で、君は僕に何を爲さうといふのだ』

『外ぢやない。君の雄辯で選擧區民を遊說して貰ひたいのだ』

『そら誰の爲めにだ』

『君も知つて居る高田俊夫さ』

『ヤツ高田君が』

『官吏を辭して候補を爭ふと云ふので、實は君とも昵近ださうだが、こんなことは、どうも自身で言ひ難いから……』



『それで君が來たのか、高田君にはいろ〳〵世話になつたこともあるんだが選擧區は?』

『君の鄕里の長野縣!』

『エッ、それやあ駄目だ、僕の鄕里は自由黨の根據地で到底帝政黨の入込む餘地はない』

『それを切り破るのが君の手腕さ、君が自由黨に居つて見たまへ、何時まで經つても鄕里の先輩達に頭は上るまいが、帝政黨となれば外に人はなし、今回の成功によつて直に第一流となれるじやないか』

この一言は僕の急所を衝いた、實際、自由黨に居つても、第四流より第五流たるさへむつかしい一擧先輩と戰ふ、これ實に快心のことだと思つたから

『成る程さういへばさうだが、なか〳〵困難だからね』

『困難といへば困難だが、此方には軍資は充實して居るし、それに大きな聲ではいへないが其筋でも多少の保護はあるからね』

『行つて見たいやうな氣もする。

『行つて見たまへ〳〵、君が行るとさへ云へば借金の方は皆な方法をつけやうし、それに必要だ

けの運動費も出さう」

僕は終に目前の急と多少の自負心とに惑はされて、我が郷の先輩や政友に反對することゝなつた。

（二）の三

自由黨では僕と中川とを獅子身中の蟲として排斥し、昨日まで筆を執つた新聞も今日は變節漢として筆誅することを憚らなかつた。こんなことは覺悟の前だから、少しも意に介せず燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん、と心に笑つて、靜かに戰鬪準備を畫した、中川は參謀として祕密に買收運動に從事し、僕は公然主義政見を發して候補を助くべく、演壇に立つことゝなり、護衛の壯士十數名に圍まれて當人の高田と共に選擧區に向つた。威風堂々向ふ所敵なし、如何に反對黨の勢力强くとも、我れには直接間接に利便を與ふる警察あり、人を魅するに最も力ある黃金あり、よし充分ならずとも、敵の氣勢を挫き將來に於ける我が黨の地盤を成すに足るものあると信じた。事態、頗る好望なり、いで多年名に醉うて實を知らざる縣民に自由黨の內幕をあばきて反省一番せしめ、徐ろに我が主義を宣傳せんと先づ第一着に縣の咽喉たる長野の劇場に於て政見發表の演說を開いた。得意の雄辯聽衆は謹んで聽くと思ひの外、罵詈讒謗の聲は四方より起り辯士をして頗



る辟易せしめた、たゞ弱味を見せじと負けず劣らずの罵詈讒謗を弄して其の日は無事に濟みは濟んだが、第二日目は屋代の開會だ、此の日は反對黨も餘程苦心したと見えて多くの壯士を聽衆の中に混ぜしめた。味方は先づ對戰の手筈として、開會の劈頭に

「これより當縣出身の秀才村岸權六郎君が登壇せられます、」と紹介した、

と鑑に「馬鹿野郎」「青二才」「變節漢」の聲が場の四方より起り拍手の聲と混じて何となく殺氣を帶びて來た、僕は悠然と壇に上つた。

「諸君、」

とやりかけると聽衆の中から「我が縣の面汚し」「獅子身中の虫」なぞと新聞にあつた通りの惡口を繰返す者がある。

「諸君は名に醉うて實を知らないのです」

「金に醉うて節を知らないのだ」と叫び返す、

「自由黨といへば名は立派ですが其實は腐敗極るので……」

「ノー〳〵」

『先づ私のいふ言を聽いてから批評をなさい！
「ノー〳〵」『そんなことは聞く耳を持たない」
『持たなければ退場なさい』
「ナニ生意氣な、やつゝけろ」と二三の壯士、勢ひ込むで演壇近く推しかゝる・我が黨の壯士は之れを止めやうとする、下足札が飛ぶ、煙草盆が飛ぶ、巡査の制止も何の功はない、「コン畜生」「ナニ」組討が初まる、場内は沸くが如きの騒ぎとなつた、手持無沙汰に演壇に立つた僕は、あまりのことに
『諸君、野蠻な行爲はお止めなさい』
といふと、「何が野蠻だ政府黨の提灯持めが」とズカ〳〵と來て引き倒さうとする亂暴者がある、口は健全だが腕力は及ばぬから倒されては大變と降りかゝると「ソレ逃るぞ」と追　かけて來た一人が棍棒で足を拂つた。バタリ倒れる、のしかゝつて滅多打、彼方では巡査が倒されて居る。此方では我が黨の壯士が締めつけられて居る、僕は今棒のやうなもので擲られ、足のやうなもので踏まれて居る、併し最早や抵抗する氣力はない。唯だ擲ぐるに任せ、踏むに任せて漸次に人事



不省に落ちた。
『君、ひどいめにあつたねえ』
と中川のいふのに氣が付いて見ると、いつの間にか宿屋の一室に横臥して枕元には藥瓶があり頭や腕には繃帶がしてあつた。
『うん』
身内は諸所痛みを覺える、
『反對黨が非常に暴行手段に出たのだから仕方がない……高田君も心配して早速此處へ連れて來さしたのだが、君痛みはせんか』
『痛むことは痛むが……今後の作戰計畫はどうするのだ』
『君の恢復を待つて居つては時機を逸するし、外に適當な人はなし、實は大に弱つて居るのさ……それに』と聲を潜めて
『投票買收のことが反對黨に洩れて其證據まで握られたから、事が頗る面倒になつて來さうだ、

マゴ〳〵して居るとドンナ目に遇ふか知れないで、僕はこれで手を引くつもりさ」

隨分輕薄なやり方だと思つたが、

「それでは高田君も困るだらう」

「ナニ高田君も取るだけの運動費は取つたのだからこゝらで斷念した方が利益だ」

僕はこれを聞いて非常に不快を感じた、變節と呼ばれ獅虫と云はれて運動したのは何の爲めか、目前の急に迫められたといふ事實もあるが、僕を動かしたのは此選擧を成功させて大に名聲を博したいといふ野心に外ならぬ、それがこゝに蹉跌してしまつては僕の今後の方針は全く潰れるのだ手足の一本や半本は折れてもよい、どうか當初の目的が達したい。と思うても相手の中川はこの通りだ。さればとて自分一人でやれることではない。友を賣り主義を棄てゝ贏ち得る所は不名譽と負傷とのみか、あゝつまらない、これからどうなるであらうと四五日病床に呻吟して居る中に引あげの準備は出來たと見えて、轉むでもたゞは起きぬ中川の策略でこれまで得た投票を他の競爭者に賣渡して高田初め歸京することゝなつた。東京へ歸つても仕方のない僕は幸に鄕里が近いので其處で當分療養することゝした。母は心配さうに我れを護つて下さつた。種ちやんは相變らず



いろ〳〵世話をしてくれるが「村中第一の學者だ」と誇言した田吾作等は、なまじ新聞を讀むものであるから僕を輕蔑するやうな風があり、お角婆さんは「大層お金儲をなさつたてねえ」と厭味をいふ、門の壁に腰拔野郎と樂書したものもあり、村の青年會からは何の理由もなしに除名して來た、故鄕に歸つても去年の春のやうな愉快はない、氣候も秋の末だ、庭には落葉がうづ高く、四邊の山はもう霜に染つて來た、あゝお春さんはどうして居るだらう。

## (二)の三

人が社會の壓迫に對する道は唯二つ、一は飽くまでも之れに抗して最後の勝利を期するか、他は自ら蟄伏して壓迫を擅にせしむるかだ、自ら蟄伏して此の寒村に打ち果てるのは今の我が身の堪ゆる所ではない、さればとて堂々之れに抗して勝利を得るの見込は毛頭ない。如何にすればよいであらう。母は非常に其の事を氣にして夜もろく〳〵寢たまはぬやうだ、こんな猫の額のやうな小さな所に居るからいろ〳〵なことも云はれるのだし、四邊の光景も癪に觸るのだ、これは一層思ひ切つて此の地を引拂つて東京へ出たならば、住めば都で、世間は廣い、又爲すべきこともあるであらう。何事にも即決主義速斷流の僕は內々母とも相談して僅かばかりの田地と住み慣れ

た家屋とを賣拂ひ、田吾作や太十にも相應の手當をやつて出立することとした。村の人達は夜逃でもするやうに笑つたが、種ちやんだけは心から泣いて呉れた、種ちやんの泣くので母も僕も少し撓ゆんだが、そんなことで躊躇すべきでないから斷乎として轉住を實行した。

東京へ出て先づ第一に高田俊夫を訪ねたが、彼れは選擧の失敗後負債に責められて弱つて居つたさうだが、どこをどうしたか、歐米漫遊の途に就いた、中川は藩閥政府に泣き付いて某省の屋となつて些少の月給に口を糊して居るので、なか〳〵相談相手にはならぬ。二三の友人の所へ行つたが何人も會つて呉れない、偶ま會つて呉れるものがあれば、僕を罵倒して自から快とするものばかりだ、嗚呼かうも社會に迫害せらるゝのであらうか、自身では少しのことだと思つて居るが帝政黨の提灯持が、かくまで我が身に祟るのであらうか、お春さんに遇ふにも何だか面はゆいが遇ひたいやうな氣もするので＝今はそんな呑氣なことは爲て居れぬのであるが＝一夕、瓢然と「櫻川」に上つて見たが意外にもお春さんは暇を貰つて此家には居らぬとの事、さて何處へ行つたのであらう。朋輩の女中に訊いたが、これも知らぬと見えて

『オヤそれでは貴方の所へいらつしたのじやとさいませんの』と揶揄一番、『不實ねえ』と付け加



へた。

「不實ねえ」眞にさうだと云ひ知らぬ不快を感じたが、考へて見れば、彼方には無理のないことで別に言ひ交した間といふではなし、親切にしたのは此方の醉狂、チト醉狂に念の入り過ぎたのであると諦めても、何だか手の中の物を奪られたやうに思はれて、不愉快でたまらぬ、藝妓でも招んで大に騒がうかと思つたが、それほどの勇氣もなく樓婢相手に二三本の酒を傾けて、ブラリと公園へ出た。

東臺の冬は殊に淋しいもので、影暗き瓦斯燈の光は僅かに木々の枯葉を照らし、地には早や薄き霜が布かれて居る。不忍の池は模靄の中に罩まれて權現の森がこんもりと見える、颯と吹く風に誘はれて落葉は此處彼處に一塊になつて、宿なしでもあらう、痞犬がそれを堀つて嗅ぎ廻はして居る。犬！　食を求むる犬！　僕の今の身の上は丁度あんなものではなからうか、イヤ人間といふものが此世で活動して居るのは實に此痞犬と同じことではなから　か、食を求め齷齪と狂ひ廻る、彼の馬車を驅る人、俥で走る人、それを鞭つ馭者、それを曳く車夫、詮じつむれば皆な此の犬なんだ、生存の前には名譽もなく愛情もないんだ。「粟平も飯食うてから燕子花」なまじ名譽を

思ふて名譽に敗れた、生中愛情を思ふて愛情に失つた、人生の本義は食ふにあり、田を賣り家を賣つて剩す所五百金、これでどうして食ふことが出來やう、職を求めて職を得ず、落葉掻く犬と何の擇ぶ所かある。

かく考へつゝ歩を運ぶほどに何時しか廣小路へ出た、此處は未だ宵の口とて人馬雜踏、さても多くの犬の行くことよ！

其頃僕は芝に僑居して居つたから鐵道馬車の便を藉りて、車中つく〳〵犬たる我が身の振り方を考へて居た。

「先生お久し振りで」

茶の少し色の褪めた二重外套に黑のこれも色の褪めた中高の帽子を冠り手に折皮鞄を持つた五十恰好の眼ばかり鋭い瘠せぎすの男、よく見れば隨分困められたことのある高利貸だから、犬、瘠せ犬と心に繰返しつゝ

「ヤア赤島君か、何處へ？」

「一寸取引先へ、……先生はいつ此方へ？」



「一月ばかり前に來たが、未だ何處へも行かない。」

「さうですか、先生は非常に御儲なすつたといひますぜ」

「少しは金にもなつたが、皆な君達に取られてしまつた」

「笑談じやありませんぜ、先生には大分困らせられました」

「何方が困らせたのか解らない……時に君、此頃は儲かるかね」

「さうです、まあ損をするといふことはないのですからね」

損をするといふことはない。世の中にこれほど都合のよい營業があらうか、高利貸といへば人が憎むが、憎むほどなら借らぬがよい。借るやつも欲しいからだし、貸すものも犬なら借るものも犬。同じ犬でもこれは安全な犬だと思ふた。

「君達の商賣は幾許位金があれば出來るのだ」

意外の問ひに彼れは一寸答へに窮した容子だつたが

「それは多いほどよいに限つてますが、私共は二三百の資本でやつて來たのです」

今では高利貸中の資産家として誰も知らぬものなき此の赤島も、本は僅かに二三百であつたの